

香川日独協会会報

Japanisch-Deutsche Gesellschaft

KAGAWA

創立 10 周年記念号



第10号

Ma i 2002

目 次

【10周年に寄せて】

ご挨拶 -----	中村 敏子	4
メッセージ -----		5
	樋口 廣太郎 ヨハネス・プライジンガー マリアンネ・メンヒ シュレーダー美枝子	

【協会主催の行事から】

欧州旅日記：ボンからケルンへ -----	細川 清	13
ドイツ兵を偲ぶ丸亀・エンゲル祭に参加して -----	山下 暁	16
デュルンバッハ音楽隊の一日 -----	門脇 卓爾	21
デュルンバッハ音楽隊 高松受入舞台裏事情 -----	嵯峨山 由範	23
付属高松小学校でのデュルンバッハ音楽隊 -----		24
	植松 勝 大貝 尚士 金谷 優広	
桜の女王 ハンブルク独日協会会長よりのメッセージ -----		27
第22代桜のプリンス（ハンブルグ）アンネマリー・メゼイ嬢をむかえて -----	地下 真喜子	29
ハンブルグ桜の女王を迎えて -----	乗松 達郎	31

【ホームステイ報告】

高松 2001年3月2日～9日 -----	クラリッサ・オッタワ	35
高松 2001年7月10日～15日 -----	フランチェスコ・ピエルジャンニ	38
ホームステイを体験して -----	武井 素子	41
ホームステイ受け入れのおすすめ -----	山田 美智子	42

【会員のご活躍・お便り】

ゲッティンゲンから -----	高野 光司	47
独検2級への道 -----	藤田 晋	51
一期一会 ～ドイツを通しての出会い～ -----	川田 敦子	54
ボン独日協会の友人と再会してきました -----	明神 実枝	57
私が初めて出会ったドイツ人 -----	松浦 洋三	65
ドイツからユーロで厚生年金が貰える -----	加藤 元規	67
ボランティア活動への情熱 -----	笠井 強	68
第2回全国ドイツ語スピーチコンテスト -----	(株) ビッグ・エス	71
ドイツ・オーバーハウゼン国際平和村に募金贈呈 ---	(株) ビッグ・エス	73
ドイツの新聞に紹介されたワイン輸入業 -----	大坂 靖彦	76
第3回しずおか世界翻訳コンクール最優秀賞授賞 -----	ラルフ・デーゲン	79

ボン独日協会：新年のご挨拶と役員名簿 -----		83
2001年度香川日独協会のあゆみ -----		85

香川旧独協会創立十周年記念



香川日独協会 10 周年に寄せて

Grußworte zum 10jährigen Jubiläum

ご挨拶

中村 敏子

1991年10月13日に創立された香川日独協会は、多くの方々のご尽力とご支援のもと着実に歩みを進め、ここに10周年会報刊行のはこびとなりました。各方面からの暖かい励ましに満ちた玉稿を手にする時 鼓舞する気持ちと感謝の念で心ひき締まる思いがいたしております。

これを機に、香川日独協회를21世紀を担う若者に継ぐべく立ちあげた時の経緯と特に、彼らへの願いをここに記して明日への展望と致したいと存じます。

ドイツをこよなく愛し、ドイツに想いをはせる有志・数名が相集い、協会の立ち上げに向けて動き出したのは1991年の春。それぞれのおもいが大きなエネルギーとなりこの年の秋、発会式を迎え会はスタートをきりました。全く草の根からの出発（たびだち）は感動としかいいようがありませんでした。

夢は大きく、ドイツに関心を持ちドイツとの交流に理解を持って果敢に取り組む青少年を育てる― ひいては 日独交流の窓口として広く県民に手渡し感覚で届けられるような情報発信基地でありたいと願いました。

1994年10月、香川日独協会はボン独日協会（1976年5月創立）と姉妹協力関係を結び互いにホームステイ交流を軸にあらゆるレベルでの人の交流、文化の交流を続けてまいりました。ありのままの、てらいのない交流は人間の感性を呼び覚まし、相互に理解し合えた時、その印象は長く深く心に刻まれます。香大教授（副会長）の熱意で学生会員が積極的にこの計画に参加し、まわりに翻弄されることなく確実な成果をあげてきております。

また幸いに、香川大学では2学部で複数のドイツの大学と交換留学協定が整い毎年、真面目で才能ある学生が相互に留学しその後成長した姿をみせ喜ばせます。インターンシップの企業研修も緒についたところと仄聞いたしております。

こうした日独青少年交流は両国政府レベルでの取り決めで、独日協会では2000年ハノーバー万博のおり170名の学生（当協会からも学生会員が参加）を招き企業研修を行い大成功をおさめ、本年も100名の学生を招く準備をしております。そして、2005年愛知万博にはドイツの学生を日本に送りたいとの意向です。

このような流れの中で やはりドイツ語学習の必要性はいなめません。高松の企業がドイツ語スピーチコンテストを企画、ドイツ語を学習していてもドイツに行く機会のない人が応募資格という催しです。社長（副会長）の若いころの苦労話からの発想で上位2名にドイツの旅を賞品として称えています。このように今、彼らに場は与えられました。この場に何を持ち込み、どう発展さすかは 偏に本人の気概と周りのサポートに掛かります。ドイツの青年と対比した時、「自立と自律」という言葉がうかんでまいります。可能性を秘めた若者たちにこそ密度の高い日々を送ってもらいたい。教育を脳科学で考える時代にあってこそ人と人との温もりを忘れないで欲しいと切望いたします。

メッセージ

財団法人 日独協会

会長 樋口 廣太郎

香川日独協会が創立10周年を迎えられましたこと、お祝い申し上げます。

1991年10月に設立されて以来、貴協会のご活動は、多分野にわたり、94年にはボン日独協会との姉妹協力関係を締結され、今日にいたるまで多くのドイツの青年とのホームステイによる真の国際交流に努められたことは、賞賛に値する活動であると敬意を表するものです。

また文化交流では2000年にドイツ各地で行われました、日本文化をドイツに広く紹介する「ドイツにおける日本年」に積極的に参加され、ボンの旧市庁舎前での日独合同での「さぬき踊り」はボンの人々に踊りという共通の文化を通じて、お互いの異質性と同質性を同時に理解していただいたのではないかと思います。先に申し述べました、ホームステイは日常ありのままの生活を隠すことなく相手に伝える最適な方法であると思うと同時に、それを経験した多くの人々は、その国、その地域への愛着が更に深まるとお聞きしています。このような交流が多層的に行われることにより、これらの人々が、その後、長期間にわたり、お互いの文化への継続的な興味と理解を深めることにつながることは想像に難くありません。

人間の交流とともに、文化交流では、貴協会の域内である鬼無に、毎年日本の文化のルーツを求めべく、多くのドイツ人の盆栽愛好家たちが訪れ、地元の人々との交流が広がっているとのことをお聞きして、日独の友好促進にかかわるものとして大変うれしく思っています。

文化芸術は「無くても死なない」ものではありませんが、人類でなければなしえない、創造性の賜物であり、日常とは違う形で日独文化そのものを具現化してくれます。

激動の20世紀より新たな世紀を迎えた今日、国を超えた交流の重要性はますます大きな意味を持っています。世界を見回してみますと、互いの理解不足、さらに文化的背景の違いへの配慮不足が地域紛争につながっている現状をみるに、つくづく相互理解の重要性を感じるものであります。他国の人々、他国の文化への理解を通じお互いの存在を認め合い、かつ尊敬しあう世界を作り上げることがわれわれ21世紀に生きる人類に課せられた義務ではないでしょうか。

香川県の人々がドイツとの親善を毎年深化させている事実は、われわれ関係者を勇気づけ、改めて真の異文化交流の重要性を認識させてくれるものです。

種々の積極的な活動を通じ、日独両国の相互理解に大きな役割を担われている貴協会の更なるご発展をお祈り申し上げます。

(アサヒビール名誉会長)



DER GENERALKONSUL
DER BUNDESREPUBLIK DEUTSCHLAND
THE CONSUL GENERAL
OF THE FEDERAL REPUBLIC OF GERMANY

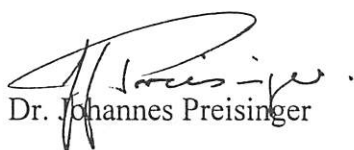
Osaka, 25. April 2002

Ich freue mich, der Japanisch-Deutschen Gesellschaft Kagawa die besten Glückwünsche anlässlich ihres 10. Jubiläums aussprechen zu können. Zugleich bin ich froh, daß es mir in letzter Zeit gelungen ist, zwei Mal selbst nach Takamatsu zu reisen. In dankbarer Erinnerung bleibt mir mein Vortrag und meine Begegnung mit den Mitgliedern der Gesellschaft am 22. Januar 2002. Ich hoffe, eine solche Begegnung mit den jugendlichen und lebhaften Mitgliedern bald wiederholen zu können.

Bei meinen Reisen nach Shikoku ist mir auch bewußt geworden, welch kulturellen Reichtum Ihre Insel beherbergt, der in anderen Regionen Japans nicht immer voll wahrgenommen wird.

Wegen der vielen Freunde Deutschlands auf Shikoku bemüht sich das Generalkonsulat auch, die Insel noch stärker in die deutsch-japanischen Beziehungen einzubeziehen.

Allen Mitgliedern der Japanisch-Deutschen Gesellschaft Kagawa und der tatkräftigen Präsidentin Toshiko Nakamura möchte ich für Ihren Einsatz für den Ausbau unserer Beziehungen danken und der Gesellschaft insgesamt noch viele Jahrzehnte des erfüllten Gesellschaftslebens wünschen.


Dr. Johannes Preisinger

ドイツ連邦共和国総領事

平成 14 年 4 月 25 日 (大阪)

香川日独協会 10 周年にあたり祝辞を述べることができ嬉しく思います。更に喜ばしいことに私は最近二度にわたり高松を訪れる機会に恵まれました。特に去る 1 月 22 日には日独協会会員の皆様の前で講演し交流できましたことは記憶に新しいところであり今でも感謝の気持ちを抱いております。若く活発な協会の会員の皆様と再びこのような出合いの場が持てればと願っています。

日本の他の地域ではまだ十分に知られていないのかもしれませんが、四国は非常に文化的に豊かな島であるという事実について貴地を訪れて認識した次第であります。

四国にはドイツの友人の皆様が数多くいらっしゃいます。従いまして総領事館としましても貴地での日独関係強化に更に力を注ぐ所存でございます。

精力的に実効ある活動をされておられる中村敏子会長様を始めとする香川日独協会の会員の皆様に対して、これまでの我々の両国関係の発展に向けた御尽力に感謝しますと共に、これからも広く何十年にも渡って充実した協会活動を続けられますことを願って私のお祝いの言葉とさせていただきます。

ヨハネス・プライジンガー (署名)

13. Oktober
1991 - 2001

10 Jahre
Nichidokukyôkai Kagawa

An die
Japanisch-Deutsche Gesellschaft Kagawa

Sehr geehrte Frau Präsidentin Nakamura
sehr geehrter Herr Ehrenpräsident Hosokawa,
sehr geehrte Vorstandsmitglieder,
liebe Mitglieder,

aus dem fernen Bonn sende ich Ihnen
im Namen unseres Vorstands und unserer Mitglieder
unsere herzlichen Glückwünsche
zum 10 jährigen Bestehen Ihrer Gesellschaft.

In den vergangenen 10 Jahren hat Ihre Gesellschaft viel geleistet.
Ihre Mitgliederzahl ist stetig gewachsen, Sie haben in Ihren Veranstaltungen
Einblicke in unsere deutsche Kultur und Politik ermöglicht und
vor allem sind Sie vor acht Jahren unsere Partnergesellschaft geworden.
Viele unserer Mitglieder erfuhren seitdem bei ihrem Homestay-Aufenthalt
die freundliche Aufnahme in Ihren Familien und konnten sowohl
die japanische Kultur wie die herrliche Landschaft von Kagawa genießen.
Mit vielen Ihrer Mitglieder sind freundschaftliche Bande gewachsen.
Dafür danken wir Ihnen von ganzem Herzen.

Wir wünschen Ihrer Gesellschaft weiterhin viel Erfolg
bei Ihrem stetigen Bemühen um die japanisch-deutsche Freundschaft.

Bonn, 25. September 2001
Deutsch-Japanische Gesellschaft Bonn

Marianne Mönch

Marianne Mönch, 1. Vorsitzende

Grußwort

10 Jahre sind seit der Gründung der Japanisch-Deutsche Gesellschaft Kagawa am 13. Oktober 1991 vergangen - ein guter Grund zu feiern, aber auch zurückzudenken. Als Vorsitzende der Deutsch-Japanischen Gesellschaft Bonn möchte ich unserer Partnergesellschaft die herzlichsten Glückwünsche zu diesem Jubiläum übermitteln.

In den 10 Jahren seit ihrer Gründung hat die JDG Kagawa viele Mitglieder gewonnen und eine rege Aktivität entwickelt, um einen Kulturaustausch zwischen Japan und Deutschland zu fördern und freundschaftliche Beziehungen zwischen unseren beiden Ländern wachsen zu lassen. Um diese Verbindung zu stärken, suchte die derzeitige Präsidentin, Frau Nakamura Toshiko, schon zwei Jahre nach der Gründung einen Erfahrungsaustausch mit einer Deutsch-Japanischen Gesellschaft. Das Schicksal führte sie nach Bonn. So begann im Januar 1993 eine Freundschaft, der im Oktober 1994 dank der Unterstützung durch den damaligen Präsidenten, Herrn Professor Hosokawa Kiyoshi und des gesamten Vorstandes der JDG Kagawa, die Unterzeichnung eines Partnerschaftsvertrages in Takamatsu folgte.

Seit diesem Freundschaftspakt zwischen beiden Gesellschaften sind nun mehr als sieben Jahre vergangen. Beide Seiten waren in dieser vergangenen Zeit um den stabilen Bau einer Freundschaftsbrücke bemüht. Am 20. Jubiläum der DJG Bonn nahm eine größere Delegation aus Kagawa teil. Im Japanjahr 1999/2000 in Deutschland reiste eine große Gruppe JDG-Mitglieder nach Bonn, und die Tanzgruppe Suizenkai aus Takamatsu erfreute die Bonner Bevölkerung.

Es ist Herrn Professor Takaki Fumio zu verdanken, dass bisher ein reger Homestay-Austausch stattgefunden hat. Über dreißig meist junge Mitglieder jeder unserer Gesellschaften besuchten die Partnergesellschaft und lernten bei ihrem Homestay-Aufenthalt die Freundlichkeit und Hilfsbereitschaft der Gastgeber, die andere Kultur und das Leben im anderen Land kennen. Viele freundschaftliche Bande sind geknüpft worden, die weiterhin gepflegt werden.

Heute möchte ich im Namen unseres Vorstands und aller Mitglieder Frau Präsidentin Nakamura, dem gesamten Vorstand und allen Mitgliedern der JDG Kagawa für die uns entgegengebrachte Freundschaft herzlich danken. Mögen die Aktivitäten der JDG Kagawa weiterhin Früchte tragen und das Verständnis zwischen unseren beiden Nationen wachsen lassen, um dadurch die Freundschaft zwischen Japan und Deutschland sowie Kagawa und Bonn auf Dauer zu stabilisieren.

Marianne Mönch

Marianne Mönch
1. Vorsitzende der DJG Bonn

香川日独協会創立十周年おめでとうございます。

創立以来御協会のご活躍ぶりはいつも感嘆の目で拝見しておりますが、これからも益々のご発展をお祈り申し上げます。

この機会をお借りしてフランクフルト俳句サークルについてご紹介させて頂きたいと存じます。このサークルはフランクフルト独日協会に所属するグループで、14年前に創立されました。当時在フランクフルトの日本総領事は荒木忠雄博士で、日本航空画廊での展覧会でエリカ・シュヴァルムさんに出会いました。博士との話でシュヴァルムさんは俳句に魅せられて、数日後にはフランクフルト俳句サークルを創立するまでに意気投合したのです。荒木博士ご自身俳人でもあり、総領事からケルンの日本文化会館館長、在ヴァチカン日本大使に就任された後も、機会ある毎にフランクフルト俳句サークルを援助され、お陰で順調に発展しています。初めは数人がお茶を飲みながらの小さいグループでしたが、やがて年に四回の俳句セミナーを設け、先日第54回のセミナーが開かれました。セミナーの前半は講師を招いて様々なテーマの講演を聴き、後半は席題が出されて作句、その内のいくつかの作品を取り上げて議論をします。毎回30名前後の参加者があり、講師もドイツばかりではなく、英国、オーストリア、日本などからも招きます。

フランクフルト俳句サークルの活動は年々盛んになり、それにつれて全国にも知られ始め、いろいろな町の学校や博物館などの要請で、俳句ワークショップや朗読に出かけることも多くなりました。

ドイツでは1950年代から俳句への関心が芽生え、その愛好者は増え続けていますが、荒木博士がドイツに就任されていた頃に最も大きな変革がありました。1991年、1992年、1994年にはケルンの日本文化会館で俳句シンポジウムが開催されて、その都度日本から大勢の俳人が参加、日独交流が深まりました。

博士の肝煎でフランクフルト俳句サークルばかりでなく、同じ年の1988年にドイツ俳句協会も設立されました。この協会の会員は全国に約250名、その中でもフランクフルト俳句サークルはもっとも大きく、活発な活動をしています。最新の挑戦はガラスのトランペット演奏を入れた俳句CDです。昨年ドイツ俳句協会全国会議がフランクフルトで開催された時に、トランペット演奏と俳句朗読の試みがあり、それに少し手を加えて今回のCD出版の運びとなりました。5月16・17日に独日協会全国会議がフランクフルトで開催される折に、このCDを紹介します。どんな反響があるか楽しみです。

フランクフルト独日協会理事
シュレーダー美枝子

協会主催の行事から

Die Brücke かけ橋

日独協会機関誌



Japanisch-Deutsche Gesellschaft e.V., Tokyo



ボン市庁舎前の讃岐おどり
Sanukitanz vor dem Rathaus von Bonn

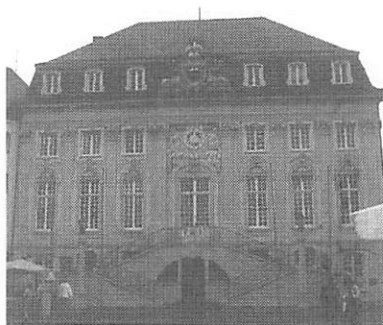
表紙のことは：ボン市庁舎前の讃岐おどり

香川日独協会会長 中村 敏子

(写真：ボン日独協会会長 Marianne Mönch)

香川日独協会は友好関係にあるボン日独協会の要請で「ドイツにおける日本年」行事に2000年7月に草の根交流・さぬき踊りとして参加しました。「Sommer in Bonn」と合流し Bonn 旧市庁舎前広場をうめつくした市民と夏の一夜を存分に友好を深め合いました。さぬき踊りは、五穀豊穡を願い古くから踊り継がれたものです。子ども連れも舞台上がり、踊り連といっしょに弾みあうなかな夕焼けを残して、10時幕を閉じました。

背景に見えるロココ調のきらびやかな大階段を持つボン旧市庁舎は、1737年建設されましたが1944年戦火で焼失。戦後、再興されたのち新市庁舎の建設(1978年)にともないこの建物は、ボン市の迎賓館として大勢の賓客を迎えています。来賓は「Goldenbuch」に署名を済ませ、市長と一緒にこの大階段から市民の歓迎をうけるのがならわしです。昭和天皇、皇后両陛下は、1971年秋に、天皇、皇后両陛下は、1993年9月、この大階段からボン市民の大歓迎をうけられた様は私たちの記憶に深く刻まれています。



2001 **7/8** 合併号

欧州旅日記：ボンからケルンへ

細川 清

2000年7月21日、ボンに向け出発。

ボンは、高松時代に初代の日独協会会長として姉妹縁組を結んだものだから、今回二代目の会長の中村女史がなにかアニバーサル行事をむこうでやる。ついては出席してよ、というようなことで、とうとう腰をあげる次第とあいなった。

出発

女房は4時半ごろからごそごそやっていた様子。新幹線で関空までだが、岡山発が7時27分、そんなに早い時間ではないが、女の出立はまた格別。大変なんである。まあなんとか運び、比較的順調に関西空港に到着。私としては上出来の滑り出し。NH985便、CLUBの人となり、一路フランクフルトへ、11時間の離陸となった。

何キロも歩いたようなフランクフルト空港

フランクフルトに着いた老夫婦いよいよドイツ鉄道でボンまでの今日の締め括り。ここが実に長かったのである。だいいち、荷物受け取りの場所から遠かった。baggage claimならぬ不平クレームである。やっと辿り着いたプラットホーム。さて左右ははるかかなたまで、またまた長大。時間は十分だったので、つぎつぎに発着するDBの様子を観察した。そのうち、そうだ、first classの停車位置が問題ではないか。ここは日本新幹線ではなかった。勿論ときおり変な節回しのドイツ語放送がある。そんなものが聞き取れれば世話はない。もう聞くにかぎる。駅員らしいのにENGLISHでよろしいか？、最後はまあ、vielen Dankで締め括りことなきを得て車中へ。もうひとつ、ドイツ鉄道の頑丈さ、大いに力をいれてよいしょと把手なんか引っ張らないと、ドアなど開きませんぞ。かよわきわが女房なぞには少し荷が重い。DBの一等車は意外に薄汚いコンパートメントだったが、乗り合いもなく、ゆったり、気をつかうこともなく、ライン河を北へ。さすがライン。ある感動を覚える。ゆったりと大きい。豊かだ。ほとんど平ら、長い船がかなりの行き違いを見せ、赤と青の河中のブイの間を流れ、遡る。KOBLENZに停車。MAINZは通過した。女房はすでに夜中の時差の最中、ライン河は夜目に見えないところ。すうすう寝息をたてている。あすあさって、下りを見ればまあよからうか。

JAPAN in SOMMER BONN

岡山を出る時、気温のことだが、最高35度上下、最低25度という猛烈さ。ボン、なんと最高20度以下。今年はSommerなし、と首をかしげている様子。ボン駅について、どなたか迎えがあるかもしれないと聞いていた。実際はボン独日協会副会長、メンヒ夫人の旦那が来ていたのが見そびれ、遅くなったと思っている我々、そそくさとタクシーへ。ゴードスベルク、スタット、ハレと告げて走る。静かなたたずまいを見せる、ボン。田舎都市だが、さすが元首府。雰囲気がある。運転手がここが、そうだと言われ降り立つと、なんと玄関は施錠され、人気もない。遅かったか、どうしよう。付近に人はいるが、このまま放られるとあとが困る。einen Moment, 建物の裏側を覗いてみる。静か。人の気配はなく、なにかパーティなどやっているような物音などまったくしない。まだ日は高いが、すぐにでも暮れていくような気がしてくる。決断、明日が問題だからこれでいいか、ホテルへ行こう。いつも不安なわが伴侶の、「もうこれ以上は無理よ、今日は深夜よ」と愚痴るに便乗。ついでにHoliday Inn, BONNまで頼むということにした。さいわい、遅くなってからだが、連絡がつき、明日は9時には旧市庁舎の前に来られたし、今夕は残念であった。あなたが辿り着いた頃、宴はたけなわ、メンヒ夫人はボン駅で、来るか、来るかと待っていた、とメンヒ夫人の電話越しの、久々の声だった。

KÖLNに歴史をのぞく

高松からの独日協会の数人、ボンの日本で踊る人達十数人を乗せてケルンへ。ラインを遡って、30分もすれば、ドイツ4番目の街ケルンに。ケルン大聖堂が中心の小観光となる。ゴシック建築の威容を真近にする。五百年を要して建立、徳川幕府の全政権期間よりなお長く、多くの人達はその完成されるのちのちを、手元に削る大理石のかなたにどういう感慨をもち続けたのであろうか。それにしても、このような聖なる広場に群がる観光客は、広場で競う現代物貰いの奇抜なショウのほうが面白いのか、スリを気にしながらの見物のほうに熱がはいっているように思われる。

ケルンというのはどういうところかは、もっとゆっくり時間が必要。聞くと、ころ、いわゆるゲイのご本家らしく、決起大会があると百万単位のそういう人達がここに集まるという。窓に垂れ下がった縦長の色帯の数本の小旗がその場所を示しているらしい。

ここはローマ時代とヨーロッパという関係なしには語れないと言わせる。随所に遺跡がある。ほとんど埋め込まれたらしく、掘り返せば二千年以上も前が再現され、そこに貴族が座っていた居間の跡だというようなところがあちこちにある。そういえばあのナポレオンがケルンの水を持ち帰り、これがオーデコロンのルーツだと。ちなみに、ケルンをなるべくオーウムラウトを効かせて発声してみよう。コロンに近くなるはずである。

旧市庁舎に訪問団が表敬に出席する前、暫時を利用して、メンヒ夫人がベートーベンの生家に誘導した。いかめしい巨人のイメージよりも、宮廷音楽師一家に生まれ、8歳のころから貴族の前で英才教育を披露し、神経をすりへらし、難聴という致命的な音楽ハンデを背負って深淵の境地にさまよう姿のほうをより強く感じる。時代的な、すこし微笑ましいような補聴器を正視し得ず戸外に出た。

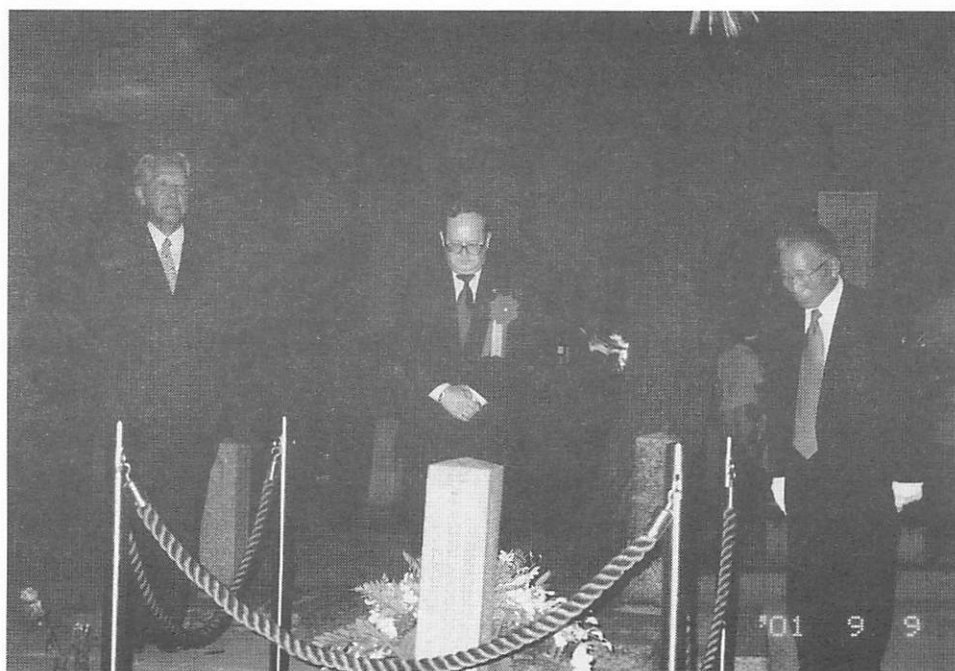
夕刻、SOMMER BONN フェスティバルを観る。高松の舞踊団、そしてドイツの若者のたくましく叩き出した震太鼓。女性二人のいる六人の日本太鼓の面々、どこに留学して仕込んだのか、多いに感動した。アンコールもあった。特にふたりの女性の柔らかな手捌きと、身体ごとぶっつけていく、両肘からくりだされる日本のリズムには参った。

(香川日独協会 名誉会長)





ドイツ捕虜収容所になっていた塩屋別院・本堂前にて
 (右より在大阪・神戸ドイツ総領事館の大谷さん、クラマー領事、ドゥーベンダック氏)



異国の軍人墓地に眠るアマンデウス・テンメの墓標に献花して黙祷を捧げる
 (右より宇野実行委員長、ゲアハルト・クラマー領事、三原先生)

ドイツ兵を偲ぶ丸亀・エンゲル祭に参加して

会員 山下 暁

はじめに

昨年3月に当協会の中村会長から電話をいただいた。要件は第1次世界大戦の折に中国で捕虜となったドイツ兵が丸亀で収容されていた。その間に音楽会等を通して地元住民との間で暖かい交流が図られていた事を偲ぶ町おこしのイベントが丸亀で計画されている。ついては日独親善の一環として趣旨に賛同して、当協会も後援することになったのでオブザーバーとして打合せ会に随時出席して進捗状況を連絡して欲しいとのことであった。丸亀に在住する一会員として直ちに了承させていただき、早速世話人の一人であった山田正芳県会議員に連絡をとり、昨年4月29日(日)の実行委員会に出席させていただくことになった。これが今回報告のエンゲル祭にかかわることになったきっかけである。

エンゲル祭実施の背景

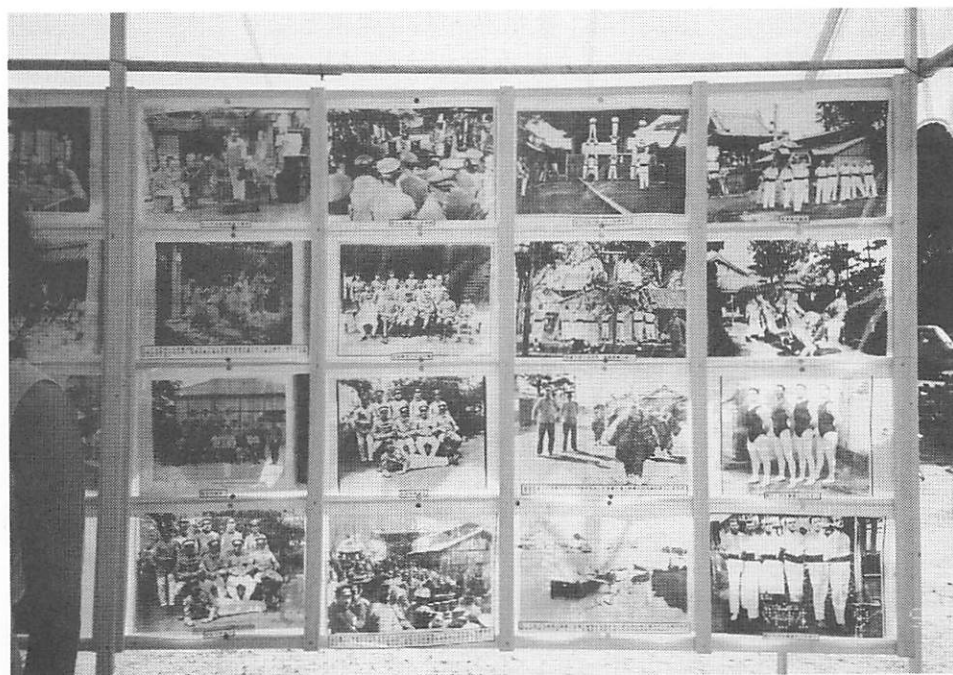
町おこしのイベント(エンゲル祭)は丸亀市土器町東の駒ヶ林地区を中心とした地域住民有志で編成された実行委員会で検討されていた。その発端は土器町東6丁目に日清日露・太平洋戦争による戦没者を祀っている陸軍墓地があり、今までは戦没者の同僚や戦友の方々が供養していたが高齢となり、先般、今後は地元でお世話願えないかとの申し出があった。世話人会で検討の結果、申し出の意思を尊重して供養を継続していくことになった。この駒ヶ林陸軍墓地には日本兵の戦没者とは別にロシア兵士(キリール・ニコフ 明38、11没)とドイツ兵士(アマンドゥス・テンメ 大4、6没)が眠っており、遺族会や地元自治会の方々により日本の戦没者と分け隔てなく供養されている。亡くなったドイツ兵士は第1次世界大戦で捕虜となって大正3年11月から同6年4月に鳴門・坂東収容所に移送される2・5年の間、丸亀で収容されていたドイツ兵324名の1人であった。彼らは丸亀第12連隊(当時)の寛大な対応の下に健康を最優先にした生活が許されていた。その結果、収容所内で活動されていた音楽をはじめスポーツ、工作、料理などいろんな分野で地元住民との交流が図られていた記録も多く残されている。このような史実を背景にして、この機会に先人達の友好を偲ぶとともに国際親善と文化の向上に役立つ町おこしのイベントとして「エンゲル祭」を企画することになった。

エンゲル祭のエンゲルは俘虜であった音楽家パウル・エンゲル氏の名前で、エンゲル氏は音楽に精通した方で寺院楽団を編成して数多くのコンサートを開催するなど地域との融和を図るとともに丸亀高等女学校(当時)で指導もされていた。氏の遺徳を称え平和を愛する心を子々孫々にまで伝承していくためにお名前をお借りして名付けさせていただいたということである。

たまたま丸亀俘虜収容所となった本願寺塩屋別院は自宅の近くにあり、この話は先般「丸亀 郷土の歴史を彩った人々」(H10、3 白川 悟著 丸亀市教育委員会刊)の中の「塩屋別院が俘虜収容所に」の項目でロシア兵とドイツ兵の収容所になっていたことと病死された兵士が駒ヶ林陸軍墓地に祀られていることが記されていたので、近所のよしみで少し認識していた程度であったが、今回のかかわりで改めて日本人の偉大さと人間愛に富んだ対応に敬服した次第である。



会場いっぱいの参加者に来賓挨拶をする当協会中村敏子会長
(前方右端の特設演台にて)



楽団練習、武芸・体操、記念スナップ、収容所周辺の風景など
当時の収容所生活がしのばれる写真展の様子

ドイツ兵を偲んだ厳粛なセレモニー（式典）

地元有志の方々による初めてのエンゲル祭は9月9日（日）、好天に恵まれて幕を開けた。当日、午後1時に大阪から公用車で来亀される在大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館のゲーハルト・クラマー領事一行を当協会中村会長とデーゲン由美子さん、小生の3人が坂出で出迎えた。総領事館からドゥーベンダック氏と大谷恵子さん（通訳）が同行された。日程打合せの後、式典開会までの時間を利用して丸亀城、ドイツ俘虜収容所のあった塩屋別院および俘虜がよくスポーツに興じたといわれている中津公園内の中津万象園（丸亀藩主・京極家の別館として築庭）を案内させていただいた。俘虜たちが過ごした87年前の生活環境を訪ねていただき、当時は不幸にして敵対国の間であったにもかかわらず人間尊重の精神で日独の人間交流がなされていた原点を見聞き願ったことは小さな点ではあるが、これからの日独親善に役立ってもらえるものと信じている。

式典は午後6時から会場いっぱいに溢れた地元住民参加の下で開式された。宇野義美実行委員長がエンゲル祭実施の経過と協力お礼の言葉の後、市民を代表して三原正一先生から当時の丸亀の社会風俗をふまえながらドイツ兵俘虜を偲び、日本の近代化に果たしたドイツの貢献を讃えた挨拶があった。

続いてクラマー領事から「両国にとって難しい時期にドイツ兵捕虜達はコンサートやドイツ料理を通してドイツの文化を紹介することが許されていた。これは日本の皆様が温かく受け入れて下さったお陰である。これからも相互の文化を理解しあい、末永く日独友好が発展することを祈っている。」との挨拶をされた。

その後、関係者がアマンドゥス・テンメの眠る墓石に献花し、参加者全員が黙祷を捧げた。

花を添えた演奏会・講演会・写真展

厳かに式典を終えた後、演奏会に移った。演奏会には丸亀市民吹奏楽団など4グループが出演し、ドイツ俘虜が楽団を編成して演奏したことのある「故郷」、「菩提樹」、「美しき蒼きドナウ」など懐かしい曲も演奏され、参加者を魅了した。

演奏の合間を活用して来賓挨拶やドイツ俘虜のことをよく知っておられる方とのインタビューがあり、片山丸亀市長に続いて当協会・中村敏子会長から日独の友好親善に努力している協会の活動と併せてボン日独協会の協力をえて、陸軍墓地に眠っているテンメ氏の身元が判明したことが報告され感動を与えた。

エンゲル祭は厳粛な式典、献花並びに演奏会とは別に午後3時から鳴門ドイツ館・田村一郎館長（鳴門教育大学教授）の「ドイツ俘虜と丸亀」と題した講演会、収容所内外でドイツ俘虜が撮影した写真の展示（約120点）やラルフ・デーゲン先生とドイツ留学生が腕をふるったドイツ料理をはじめ地元の方々が心をこめて出店された種々のバザーも好評であった。訪れた約1000名におよぶ参加者は気楽さの中に戦争という厳しい歴史の狭間で明るい人間交流の暖かさをかみしめることができ、平和である倖せをかみしめていた。

実行委員会では予期以上の地域住民の強い関心を受けとめて平成14年も創意を結集して引き続いて開催することを決定している。88年前にお城のある町・丸亀にかかわりのあった先人達が国の立場を超えて友好を育んでいた貴重な歴史の一端を未来永劫に伝えて行くことは、今望まれている人間教育ひいては世界平和のためにも大きな意義があると確信している。エンゲル祭が人間の真の心を伝え、国際親善と地域文化の向上のため、ぜひ継続されて更なる発展を願っております。

当協会も日独親善・友好推進のため、今後ともご支援ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。



デュルンバッハ音楽隊の一日

米子日独協会 会長 門脇 卓爾

九月二十六日夕刻、JR高松駅の構内にりゆうりょうたるヴァルトホルンの音が響きわたった。奏するのは緑色のチョッキに革の半ズボン、羽飾り付きの帽子をかぶった屈強のドイツ人たち。改札口を出てくる人々は思わず脚をとめて聞き入り、たちまち人垣ができた。香川日独協会10周年記念のためドイツのバイエルンから招かれたデュルンバッハ音楽隊によるドイツ民族音楽の演奏である。私は日独協会のよしみでこの行事に招かれ、一日この人たちと行を共にした。その夜は会員百数十名が集まり、一行を囲んで懇談会が開かれた。

ドイツ人たちは演奏し踊り、その合間にビールを飲み、最後には会員も一緒になって踊った。その日の午後、関西空港に着くとすぐ高松に直行したにもかかわらず、彼らは元気だった。ホテルに帰ってからまた飲みに出たらしい。

翌日は八時半にホテルを出発。香川大学附属小学校を訪問して全校生徒に迎えられ早速、音楽と踊りが披露された。一行のなかには男女四人ずつの若者がいて、彼らは踊りだけしかやらない。その踊りは高く跳び上がって、その間掌で脚をバタバタとたたき楽しい踊りである。子どもたちにはそれが珍しかったようで、まねをする子が多かった。後で子どもたちの間ではやるのではなかろうか。

その後、栗林公園を見学してからバスで屋島に向かい、車中彼らと話す機会があった。彼らはミュンヘンの南の観光地テーゲルンゼーの湖畔の人びとで、素人ではあるが、毎年ミュンヘンの十月祭（オクトーバーフェスト）には出演する。今回の来日では高松のほかに大阪の御堂筋パレードをやるのだそうだ。

屋島では、わら屋根の店で盥（たらい）うどんが出た。ドイツ人たちは、うどんを一本ずつ吸い込む者、大口を開けて流し込む者といろいろだったが、後で会長のN女史が「いかがでしたか」と聞くと、「おいしかった。でもアンシュトレングンド（苦労）だった」という返事に、皆で大笑いした。

山陰中央新報 H・13・10・10 「大山おろし」より



「嵯峨山さん、大変よ！飛行機が遅れて何時に着くかわからないんですって」

昨年9月26日のことである。朝のオフィスアワーのかかりに、香川日独協会中村会長さんからの慌ただしい電話の声である。『やれやれ、受入準備万端整い、その日になって…』とは思ったものの、こうなった限りはじたばたしても始まらない、なるようにしかならないのだからと、腹を括った。デュルンバッハ音楽隊高松受入当日のドタバタ騒ぎの始まりである。

例の『9月11日事件』の直後でもあり心配したが、幸い飛行機は3時間あまりの遅れで関西空港に到着した。だが予定のスケジュールはこなせるだろうか？変更するとすればどう変えるか？結局彼らのバスがホテルについたのは夕方5時過ぎだった。そして、商店街のパレードをキャンセルする結果となり、町内会の役員の方々にご迷惑を掛け、マスコミの方々を振り回して、後でこっぴどく叱られたのは記憶に生々しい。しかし、彼らが到着して楽しい行事が始まってしまえば、全ての苦労もどこへやら、飲めや歌えの歓迎パーティーに嫌なことはすっかり忘れ、やはり来て貰って良かったな、というのが裏方全員の思いだったのではなかろうか。

そもそもこの話は、全国日独協会に顔の広い中村会長に対する大阪神戸ドイツ総領事館の杉岡さんからの誘いに端を発する。昨年8月12日の理事会で会長から話が出て、それ乗りましようといいに焚き付けたのが何を隠そうこの私だった。それなら貴方、岡谷さんと一緒にお世話しなさいとなって、中村会長に連れられJR四国とか、アサヒビールとか、三越のパーティー会場の準備に取りかかったのである。加えて、たまたま9月始めに私が休暇でドイツ、ミュンヘンへ行く機会があり、デュルンバッハはミュンヘンから車で約1時間のところにあるということが確認できた。それならということで、先方のリーダーであるWinklerさんにお会いすることにし、杉岡さんに紹介をお願いした。偶然に偶然が重なり、杉岡さんもその時期に別件で南ドイツへ行くとのことで、デュルンバッハには同じ日の同じ時間に訪問予定を組むこととした。折角の訪問と言うことでもあり、単にご挨拶とスケジュール確認に終わらせるのではなく、メリハリを付け、中村会長には歓迎親書を素晴らしいドイツ語で準備して頂くこととした。当日9月5日はあいにくの雨で肌寒い一日ではあったが、駅にWinklerさんの出迎えを受け、例の会長からの親書を早速Winklerさんにお渡しして、高松歓迎の意を表すことが出来た。デュルンバッハでの滞在は、わずか半日程度のものであったが、その大半の時間に杉岡さんに同席していただいたため、しばらくドイツ語から離れていた小子としては大助かりだったこと、改めてここに杉岡さんにはお礼を申し上げたい。



お礼

香川大学教育学部附属高松小学校副校長 植松 勝

昨年の9月27日、日独協会香川支部のご援助によりドイツ国バイエルン地方のデューン・バッハ音楽隊に来校いただきました。この時期、高松はまだまだ残暑が厳しく、また湿気の高い頃であります。団員の皆様にとっては大変であったでしょうが、子供たちにとってなじみのある曲を交えながら1時間あまりにわたって素晴らしい演奏と民族舞踊を披露いただきました。あっという間に1時間が終わったという印象が今も残っています。多くの子供たちは、初めは大きな体のドイツの皆さんに圧倒されたようですが、音楽の演奏が進むにつれ、皆さんのにこやかな笑顔や優しい話しぶりに大変親しみを感じたようでした。

小学生の子供にとって、ドイツ国は地図の上で知る国であり遠い存在でしたが、音楽やダンスを通して随分身近な国に変わってくれたものと、お世話いただいた皆様に大いに感謝している次第です。この3月には「桜のプリンセス」アンネマリー・メゼイ様にも来校いただきました。今後、益々ドイツの皆様との交流を深め、日独の友好につながればと希望しています。

最後に、音楽会に参加した子供たちの感想をいくつか紹介します。



ドイツの音楽隊のえんそう会

五年白組

大貝尚士

ドイツの人達が、歌などをえんそうして
 くれました。ほくは、この日を楽しみにして
 ました。ほくのフランスの河内君と内海君が
 いっしょにドイツのトたちとおいていて、
 その事がテレビでかかっていたので、ほくは
 びっくりしました。
 また、その音楽隊の人は、ほくたちが知っ
 ている曲をえんそうしてくれましたので、うれし
 かったです。
 また、学校に来てほしいです。

ジュニア音楽隊 来校

五年白組

金谷優広

ぼくは、今日、ドイツの人たちの音楽を聞
 ききました。全部聞いたことがある曲ばかりだ
 ったのですごいなあと思いました。
 おどりもくるくる回ってそんなによくきれい
 に回れるなあと感心してしまいました。
 ドイツのいろいろなことも聞けてとてもよか
 かったです。
 心に残るおどりや音楽でした。



Deutsch-japanische Gesellschaft
zu Hamburg e.V.

• DJG Hamburg · Gotenstrasse 21 · 20097 Hamburg

Frau
Toshiko Nakamura
Präsidentin der Japanisch-deutschen Gesellschaft Kagawa
Bancho 44-20
Takamatsu-shi

Deutsch-japanische Gesellschaft
zu Hamburg e.V.
Gotenstraße 21
D-20097 Hamburg
Tel. (040) 23 60 16-25
Fax (040) 23 60 16-10
http://ourworld.compuserve.com/homepages/marcus_Schumacher/djghp.htm

Hamburg, 14. März 2002

Sehr geehrte Frau Nakamura,

Frau Annemarie Mezei, die 22. Hamburger Kirschblütenprinzessin, weilt auf Einladung der Japanisch-deutschen Gesellschaft Kagawa in der schönen Stadt Takamatsu. Im Namen der Deutsch-japanischen Gesellschaft zu Hamburg möchte ich Ihnen für die Einladung Frau Mezei sehr herzlich danken.

Frau Mezei übermittelt Ihnen die besten Grüße und Wünsche unserer hiesigen Gesellschaft. Wir freuen uns sehr darüber, daß damit auch ein Kontakt zwischen unseren beiden Freundschaftsgesellschaften zustande kommt. Und wir sind immer wieder beeindruckt von dem alle Präfekturen Japans erfassenden Interesse an einer Vertiefung der Beziehungen zwischen Japan und Deutschland. Dafür, daß Sie sich auch in der Präfektur Kagawa dieser Aufgabe annehmen, möchten wir Ihnen sehr danken.

Die Deutsch-japanische Gesellschaft zu Hamburg wünscht ihrer Schwestergesellschaft in Kagawa viel Erfolg bei ihrer Arbeit. Ich verbinde diesen Wunsch auch mit den besten Wünschen für Ihr persönliches Wohlergehen und bin mit freundschaftlichen Grüßen

Dr. Bernhard Großmann
Präsident der
Deutsch-japanischen Gesellschaft zu Hamburg e.V.



第22代桜のプリンス（ハンブルグ）

アンネマリー・メゼイ嬢をむかえて

地下 真喜子

3月23日24日の短い期間でありましたが、第22代桜のプリンスアンネマリー・メゼイ嬢を高松へむかえることができました。彼女は黒髪がとても美しい東洋的な雰囲気をもつ女性でした。23日、「二蝶」で開催された交流会にはたくさんの人々が参会し、楽しく、和やかな交流が行われた。ハンガリー語、ドイツ語、英語もちろん日本語も、と。国際色豊かな、内容のある楽しい会話が交わされた。彼女を取り巻いた輪が幾重にも出来、あふれた人が彼女が次の輪に移るのを待っていました。写真を撮るにも列ができるほどで、人気の高さがうかがわれました。これも彼女の人柄に依るものでしょう。ひとつ、一つをととても大事にする人でした。

楽しい時間はあっという間に過ぎてしまいました。お名残惜しい。また、お会いすることができずことを念じてお別れしました。

今年は、例年になく桜の開花が早く、3月末で、今、まさに見頃、満開だなんて、彼女の来高（来日）を歓迎しているようにも思えました。

四国村を加藤氏が案内して下さり、日本の古い建物や文化的なものに触れていただくことができました。また、違った意味での文化を感じていただけたのではと思われました。

24日には、香川大学付属小学校を訪問し、子供たちと楽しい時間を過ごし交流することができました。校庭に桜の植樹も行いました。

子供たちのドイツ語での挨拶や、日曜日なのに出てきて歓迎してくれたことに彼女はとても感激していました。学校紹介に続き、折り鶴を作ったり、歌を歌ったり、プレゼントの交換をしたりして交流をしました。お別れの時にはサインをお願いする子供たちの列ができ、飛行機の時間が気になる場面もありました。さよならの握手も列ができなかなにお別れができませんでした。順番が廻ってこなくて、半べそになった子供もいましたが、校長先生から「お手紙を書くといいよ。きっとお返事がもらえますと思います。」といわれ、ようやく学校を去ることができました。

「大阪へ留学が決まれば、大阪と高松は近いですから、また高松へ来てくれますよ。」と校長先生。「記念植樹は後輩たちに引き継いで立派に育てていきます。」と子供たち。桜の花が咲くのが楽しみです。

駆け足の訪問でしたが、とても実り多いものであったと思います。子供たちの輝いていた顔が印象的でした。この子たちが将来を担うのですから。彼女が与えた影響の大きさは、たとえようがありません。

これはおまけです。「鬼ヶ島に桜を植える会」が行った植樹に参加しました。予め許可をもらっていたので、植樹につけたネームプレートにアンネマリー・メゼイの名前を入れさせてもらいました。5年位経つと桜の花が咲くそうです。彼女が大阪へ留学して来られたら、一緒に見にゆきたいと思います。（これは夢です）

「桜の女王」讃岐路へ

ハンブルクから友好使節

協流 独交 日交 川員 香会

春の讃岐路に桜のプリ
ンセスが舞い降りた。
香川とドイツの都市ハン
ブルクの友好を深めよう

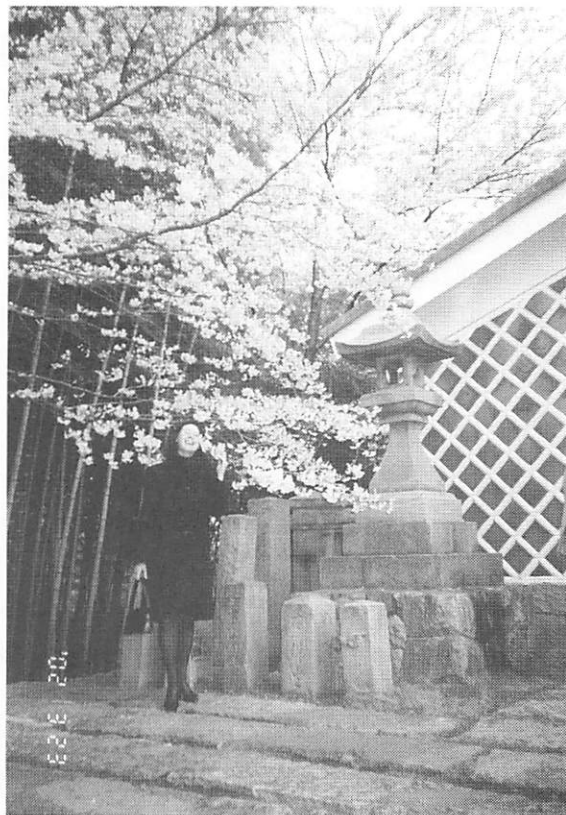
と、「ハンブルク桜のプリ
ンセス」のアンネマリ！
メゼイさん(ミ)が二十三
日、来県。香川日独協会

(中村敏子会長のメンバ
ーと高松市内を観光す
るなどして交流した。
アンネマリさんは、
ドイツで桜の名所として
知られるハンブルクの第
二十二代桜の女王に輝い
た大学生。二十日に友好



手渡された桜を持ち、笑顔を浮かべるアンネマ
リーさん 高松市内

「四国新聞」 2002 年 3 月 24 日



都市関係を結ぶ大阪市を
訪問し、この日、高松に
やってきた。

日本語を学ぶアンネマリ
ーさんは、流ちょうな日
本語で「日本の文化のと
りこになり、いまでは生
活の中心になっている」

と話し、「高松は自然が
とてもきれいだ。これから
も交流を深めたい」とに
こやかな表情を浮かべて
いた。

二十四日は、高松市の
付属高松小で児童らと桜
の苗木の植樹を行った
後、東京に向かい、小泉
首相とも歓談する予定。

ハンブルグ桜の女王を迎えて

乗松 達郎

ドイツ第2の大都市ハンブルグの桜の女王アンネマリー・メゼイさんの歓迎会が3月23日好天の午後、香川日独協会の主催で行われた。

詩人ハイネの詩にシューマンが作曲した愛すべき歌曲 Im wunderschönen Monat Mai「素晴らしく美しい5月には蕾がみんなはじけると・・・。」ハンブルグの中心のアルスター湖畔、日本から贈られた3000本のソメイヨシノが五月一斉に花を開き中旬に桜まつりがあり2年に一度桜の女王が選ばれる。栗林公園も桜の名所で360本の桜があるが、3000本となるとさぞかし壮観だろう。

昨年の女王アンネマリーさんは40人の応募者から選ばれハンブルグ大学で日本語と経済学を専攻の学生、27歳。また日系企業で非常勤勤務する親日家。ハンブルグ桜の女王と日本の桜の女王との交流訪問は20年にわたっている。

歓迎会は中村会長の心のこもった歓迎の辞に始まり、22代桜の女王は流暢な日本語で「日本の文化のとりこになり、いまでは生活の中心になっている。高松は自然がとてもきれい。これからも交流を深めたい。」とにこやかな笑みを浮かべて話す。

長身で美貌の女王にピンクのドレス、王冠、赤く大きなたすきが映える。さて桜の花束贈呈、筆者の出番。マリーさんはハンガリー語を母語とするとの話を聞いて、ハンガリー語とドイツ語を交えた挨拶をそえて花束を手渡す。

ヨー・ナポトゥ・キヴァーノク（今日は）

ウルルク・ホジ・タラルコストウンク（お会いしてうれしい）

Das ist kleines für Sie, aber schönes wie Sie.（これは小さいものですがどうぞ。

しかしあなたと同じく美しい）

参会者50名の大半は女性でいづれも和服、洋服を華やかに着飾り、座は一段と明るい。プローストの後は、各テーブル初対面の人を交えながらも、ドイツ旅行の話やら急に賑やかな懇親の場となる。

やがて桜の女王は各テーブルを回って親しく挨拶を交わす。愛嬌あふれる表情、優雅な気品に間近に接し深い親しみの印象を与えてくれる。お互い日本語で通じる間柄で、座の雰囲気は盛り上がり、カメラのフラッシュも絶え間ない。

到頭別れの時が来て「できたらまた高松を訪れたい。」の言葉を残して、みんなの惜別の思いの中を去って行く。

今年の異常な早咲きと女王訪問が丁度一致し、また参会者にさわやかな満足感を与えてくれたこの歓迎会はいつまでも記憶に残ることと思う。



ホームステイ報告

In Kagawa:

Clarissa Ottawa
Francesco Piergianni

In Bonn:

武井 素子

ホームステイ受け入れのおすすめ

山田 美智子

ホームステイ・プログラムの記録(2001年4月～2002年3月)

()内の氏名は受入会員名

ボンから香川へ

Francesco Piergianni 2001年7月10日～7月15日(柳澤良明)

香川からボンへ

武井素子

2001年11月16日～11月22日(Long)

[担当理事から一言]

今年度は派遣も受け入れも最少人数になりました。
また、いつもではありませんが、受け入れに際してホストファミリーを探すのに苦労することがあります。派遣・受け入れの双方で会員の皆様の積極的なご応募をお待ちしています。どちらも随時受け付けていますが、お申し込みはお早めをお願いいたします。



申込先:高木(Fax 087-847-4793 あるいは 087-832-1923 ; E-mail takagi@ec.kagawa-u.ac.jp)

[ホームステイ報告]

クラリッサ・オッタワ Clarissa Ottawa

高松、2001年3月2日～9日

3月2日11時間半の飛行を終えてやっと大阪に着いた。飛行機から見た最初の日本の光景はすでにとっても印象的だった。特に何もかもがすごく大きかったからだ。午後神戸で実枝と会って、フェリーで一緒に高松に行った。高松で彼女の家族にとっても暖かく迎えられた。私は1週間お客用の部屋をもらった。典型的な和風の部屋で、畳が敷いてあった。様式通り私はフトンで寝た。

土曜日実枝と一緒に四国村を見学した。ひな祭りだったので、どこでも綺麗な「ひな壇」が置かれ、この日のお祝いに私は甘酒を味わった—とても美味しかった。日曜日は香川日独協会の久保さんと栗林公園で開かれた外国人のための催しに行った。私たちは公園の中を案内され、「マッチャ（抹茶）」をいただき、次いで「うどん」を食べた。

月曜日には実枝と私は香川日独協会の中村さんと会った。中村さんは新しい市役所を案内して下さったが、そこからは高松全体が見渡せた。市役所食堂で昼食をとった後、中村さんは向かいにある学校を見学できるようにして下さった。校長先生が私たちを案内し、説明して下さった。1、2年生の小さな子供たちは特に可愛かった。子供たちは私が見るのと同じようにほんとに大きな目で私を見た。それどころかその後校長先生はその日一日を学校で過ごし、授業を見学するようにと誘って下さった。しかし、残念なことに私にはほとんど時間がなかった。ほんとにそうしてみたかったんだけど。夕方実枝と私は彼女の知人の一人、そして日独協会の関亦さんと一緒に和食の店で食事をした。その後さらに私たちはカラオケに行った。とても楽しかった！火曜日は実枝と関亦さんと一緒に琴平に行った。そこで私たちは金比羅さんに登った。たくさん階段があつてとても大変だった。それでもそれだけのことはあった。その後私たちはうどん学校に行き、うどんの作り方を学んだ。この夜は関亦さんと子供たちの所に泊まった。

水曜日は私たちは一緒に小豆島に行った。そこで、映画『二十四の瞳』の舞台になった、昔の学校を訪ね、次いでお猿の公園にも行った。木曜日は荷物整理に一日を空けておく必要があった。そして金曜日に私は鎌倉に向けて発った。

高松の一週間はただただ素晴らしかった。たくさんのことを体験したが、家庭でもとても快適に感じた。実枝とお母さんは巻きずしの作り方を教えてくれた。私は家族の一員だと感じて、別れは気が重かった。でも、今は実枝が9月にドイツへ来るのを楽しみにしている。

＊『香川日独協会会報』第9号に、Ottawaさんを受け入れた明神実枝さんの「ホストファミリー報告」が載っていますので併せてお読み下さい。]



Takamatsu 2.3. bis 9.3.2001

Am 2.3. bin ich nach 11 ½ Stunden Flug endlich in Osaka angekommen. Der erste Blick auf Japan, aus dem Flugzeug, war schon sehr beeindruckend, vor allem, weil alles so groß war. Nachmittags habe ich mich mit Mie in Kobe getroffen und bin mit ihr mit der Fähre nach Takamatsu gefahren. Dort bin ich von ihrer Familie sehr herzlich empfangen worden. Ich habe für eine Woche das Gästezimmer bekommen. Ein typisch japanischer Raum, ausgelegt mit Tatami – Matten. Stilgerecht habe ich auf einem Futon geschlafen.

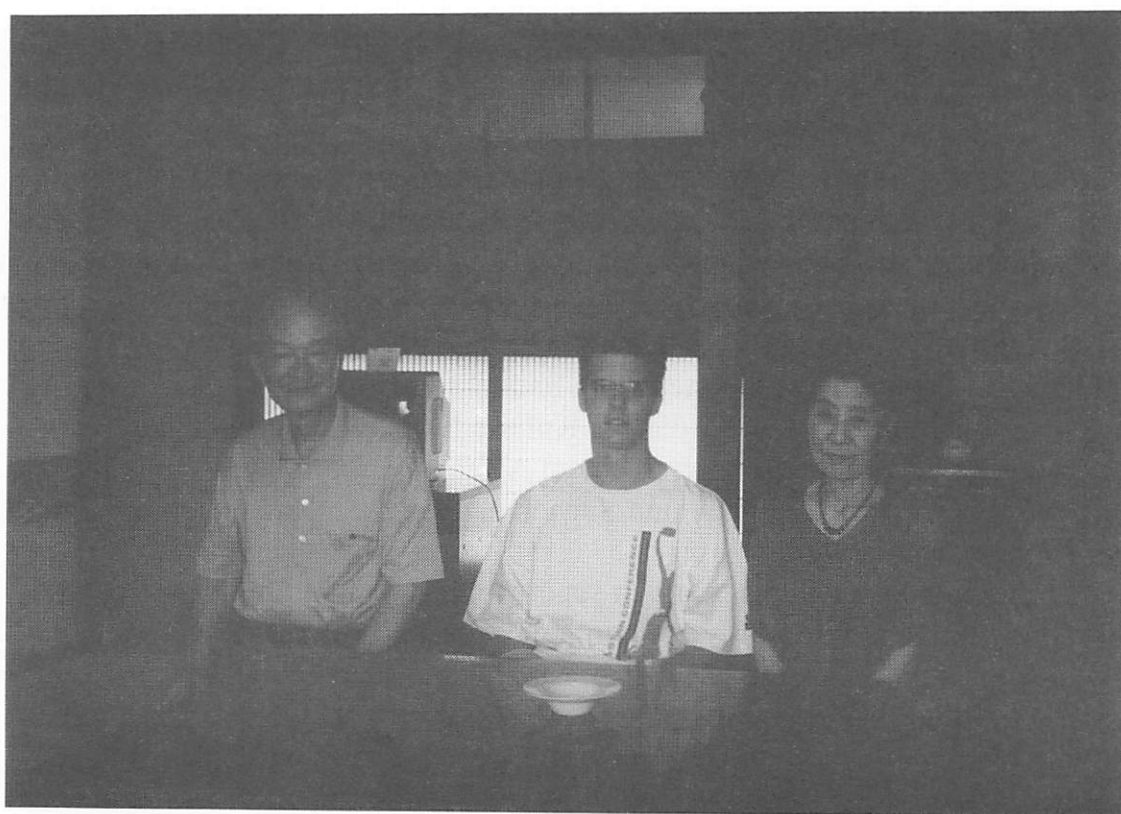
Samstag habe ich zusammen mit Mie 'Shikoku – mura' besichtigt. Da hina – matsuri war, waren überall hübsche „Altare“ aufgestellt und zur Feier des Tages durften wir ama – sake probieren (sehr lecker) . Am Sonntag war ich mit einem Mädchen (Kubo- san) von der Deutsch – Japanischen – Gesellschaft Takamatsu auf einer Veranstaltung für Ausländer im Ritsurin – Park . Wir wurden durch den Park geführt, durften „macha“ trinken und haben anschließend „udon“ gegessen.

Montag haben Mie und ich Frau Nakamura von der DJG Takamatsu getroffen. Sie hat uns das neue Rathaus gezeigt, von wo aus man über ganz Takamatsu blicken konnte. Nach einem Mittagessen in der Kantine, hat es Frau Nakamura ermöglicht, die gegenüberliegende Schule zu besichtigen. Der Direktor hat uns herumgeführt und alles erklärt. Die kleinen Kinder aus der 1. Und 2. Klasse waren besonders süß. Sie haben mich mit genauso großen Augen beobachtet, wie ich sie. Der Direktor hatte mich anschließend sogar dazu eingeladen, einen ganzen Tag in der Schule zu verbringen und mir den Unterricht anzusehen. Leider hatte ich dafür zu wenig Zeit. Das hätte ich wirklich gerne gemacht. Abends waren Mie und ich mit einem Bekannten von ihr und einer weiteren jungen Frau (Sekimata, Yoriko) von der DJG in einem japanischen Restaurant essen. Anschließend sind wir noch in eine Karaoke-Bar gegangen. Das war sehr lustig! Dienstag war ich mit Mie und Sekimata-san in Kotohira. Dort sind wir zum Konpira san heraufgestiegen. Das war schon ziemlich anstrengend bei den vielen Stufen. Aber es hat sich auf jeden Fall gelohnt. Danach waren wir noch in der udon-gakko, wo wir gelernt haben Udon zu machen. An diesem Abend habe ich bei Sekimata-san und ihren beiden Kindern übernachtet.

Mittwoch sind wir dann zusammen nach Shodo-shima gefahren. Dort haben wir ein altes Schulmuseum besucht, das die Kulisse für den Film '24 hitomi' war, und anschließend waren wir noch in einem Affenpark. Donnerstag brauchte ich dann einen Tag zum ausspannen und Sachen packen. Und Freitag bin ich dann nach Kamakura gefahren.

Die Woche in Takamatsu war einfach super! Ich habe viel erlebt, aber ich habe mich auch in der Familie sehr wohl gefühlt. Mie und ihre Mutter haben mir beigebracht Maki-sushi zu machen. Ich habe mich fast schon wie ein Familienmitglied gefühlt und der Abschied ist mir sehr schwer gefallen. Aber jetzt freue ich mich schon darauf, wenn Mie im September nach Deutschland kommt.

Clarissa Ottawa



高松、2001年7月10日～15日

7月10日私は高松に到着した。直接駅まで柳澤先生に出迎えてもらった。ホームステイ先までの途中少し意見交換をしたが、彼はすでに高松滞在の詳細を伝えてくれた。夜家族、奥さんと3人の子供たち（3歳、8歳、11歳）を紹介された。夕食はたっぷりあって、とても美味しかった。続いて私はホストファミリーに持ってきた「オミヤゲ」を渡したが、とても喜んでもらった。

日本の限られた住宅事情にもかかわらず私は自分のだけの部屋を貰えた。

翌日栗林公園へ遠足に出かけた。とても美しく、典型的な和風の設えだった。その他に伝統的な茶室があり、私たちは訪ねていった。そこで私は105歳の男性にあって、とても驚いた。先生の奥さんが日本では珍しいことではないと説明してくれた。お茶をいただいている間、柳澤先生が緑茶の葉っぱはこの庭でも育てられていると説明してくれた。

この日の夜私は柳澤先生ご夫妻と「ホンゲン」という名の信仰団体の会合に行った。参加者は言葉とお経で効果をもたらす、四国の同名の僧侶の治癒力を信じている。このとき軽い花粉アレルギーを起こしていたのを、柳澤先生はこのようにして和らげることができたのだと私は思っている。次の日私は香川日独協会の関亦さんと会った。私たちは一緒にちょうど1000年の歴史を持つ、金比羅さん（高松近郊）を見学した。軽食を取った後高松の中心部に出かけたが、夜は柳澤先生が学生たちとの楽しい夕食会を開いてくれた。

翌日（金曜日）の午前中香川日独協会の中村さんと会った。私たちは一緒に高松の中心部を散歩し、市役所の最上階からの眺めを楽しんだ。昼食はレストランで典型的な和食を食べた。午後7時頃私は柳澤先生の奥さんと車で会うことを約束していた。というのはそこから一緒に海岸に行って、他の家族とバーベキューをしたからだ。

次の日は柳澤先生の学生である中山さんと一緒にここにある香川大学へ行ったが、彼は彼のロックバンドを紹介された、そのバンドはすでに何度も高松で小さな公演を行っていた。私はいくつかの楽器を試して楽しんでもよかった。この日の夜にはもう私は柳澤先生とお別れを言わなければならなかった。というのは先生は翌朝早く「ホンゲン」寺の会合に行かなければならなかったからだ。

（この後他のホームステイ地のことが書いてありますが、紙幅の都合により省略します——訳者）

Takamatsu 10. – 15. Juli

Am 10. Juli kam ich in Takamatsu an. Dort wurde ich direkt am Bahnhof von Herrn Prof. Yanagisawa in Empfang genommen. Auf der Fahrt zu seiner Wohnung konnten wir uns bereits ein wenig austauschen, und er konnte mir bereits den Aufenthalt in Takamatsu beschreiben. Am Abend stellte er mir seine Familie vor: seine Frau und seine drei Kinder (3, 8 und 11). Das Abendessen war sehr reichlich und schmeckte ausgezeichnet. Im Anschluss daran überbrachte ich meiner Gastfamilie die mitgebrachten Omiyage, worüber sie sich sehr freuten.

Trotz der in Japan beschränkten Wohnverhältnisse hatte ich ein eigenes Zimmer ganz für mich allein.

Am nächsten Tag machten wir einen Ausflug in den japanischen Ritsurin Park in Takamatsu. Jener war sehr schön und nach typisch japanischer Landschaftsarchitektur gestaltet. Außerdem gab es dort ein traditionelles Teezeremoniehaus, das wir besuchten. Dort traf ich einen Mann, der einhundertundfünf Jahre alt war, was mich sehr erstaunte, und Frau Yanagisawa erklärte mir, dass das in Japan durchaus keine Seltenheit ist. Während der Teezeremonie erklärte mir Herr Prof. Yanagisawa, dass die Blätter dieses grünen Tees auch hier in diesem Park wachsen.

Am Abend desselben Tages besuchte ich mit Herrn und Frau Yanagisawa ein Treffen ihrer Glaubensgemeinschaft namens Hongen. Die Teilnehmer glauben an die heilenden Kräfte eines gleichnamigen Priesters in Shikoku, welche durch Worte und Sprechgesänge wirken. Zu dieser Zeit hatte ich eine leichte Pollenallergie, und ich glaube, Herr Prof. Yanagisawa konnte sie auf diese Art etwas lindern. Am nächsten Tag traf ich mich mit Frau Sekimata von der Deutsch-Japanischen-Gesellschaft in Takamatsu. Zusammen haben wir den Kompira-Tempel besichtigt (in der Nähe Takamatsu), welcher knapp 1000 Jahre alt ist. Nach einem kleinen Imbiss fuhren wir dann in die Takamatsuer Innenstadt, denn an diesem Abend veranstaltete Herr Prof. Yanagisawa ein heiteres Abendessen mit seinen Studenten.

Am Vormittag des nächsten Tages (Freitag) traf ich mich mit Frau Nakamura aus der Deutsch-Japanischen-Gesellschaft in Takamatsu. Zusammen spazierten wir durch die Takamatsuer Innenstadt und wir genossen die Aussicht von der höchsten Etage des Rathauses in Takamatsu. Zu Mittag aßen wir typisch japanisch im Restaurant. So gegen 19:00 Uhr waren wir mit Frau Yanagisawa am Bahnhof verabredet, denn von dort fuhr ich mit ihr zusammen zum Strand, wo wir mit einer anderen Familie gemütlich gegrillt haben.

Am nächsten Tag besuchte ich zusammen mit Nakayama, einem Student Herrn Prof. Yanagisawas, die örtliche Kagawa Universität, und er stellte mir seine Rockband vor, welche schon desöfteren kleinere Auftritte in Takamatsu hatte. Dabei durfte ich zum Spass einige Instrumente ausprobieren. An diesem Abend verabschiedete ich mich schon herzlich von Herrn Prof. Yanagisawa, denn er musste am nächsten Morgen schon früh nach Shikoku zu einem Treffen im Hongen-Tempel. Vormittags traf dann das Ehepaar Yasuoka ein, denn sie waren so nett, mich von Takamatsu per Auto abzuholen.

ホームステイを体験して

武井 素子

昨年、ボンで1週間、ホームステイさせていただきました。実施にあたり、日本では中村会長、高木教授ご夫妻にいろいろと相談にのっていただき、ドイツではMönch 会長はじめ、Longさんご一家、Felskiさんご夫婦、Moogさんご夫婦にお世話していただきました。

ボンの町並みは、とても美しく、落ち着いた雰囲気を感じていました。ベートベンの家やボン市立美術館、ドイツ連邦共和国歴史博物館を見学し、偉人の功績やドイツの歴史をたどったり、豊かな芸術に触れることができました。

ホームステイ期間中、なにより新鮮で楽しかったことは、ドイツ家庭生活を実際に体験することによって、観光旅行ではなかなか味わうことができない日常のドイツを感じることができたことです。朝早く、Longさんと一緒にパン屋さんや朝市に出かけたり、Felskiさんにクリスマスシーズンになるとよく作るというHaselnußやお母様からレシピを受け継いだというVanille の作り方を教わったりして、とても楽しい時間を過ごしました。Moogさん宅では、すてきなコレクションを見せていただき、アンティークの食器でおもてなしを受け、優雅な気分になることができました。Mönch 会長には、ドイツの学校教育や環境教育に興味を持っている私のためにと、それぞれに関連する機関への視察がスムーズに行えるようにご配慮いただき、たいへん感謝しています。

今回お世話してくださった方々はもちろんのこと、街角や交通機関の中で出会ったドイツ人の方々はとても親切で、ますますドイツが好きになりました。

ホームステイ受け入れのおすすめ

山 田 美智子

「ホームステイ受け入れ」と聞いて、先ず何を連想されるでしょうか？

「うちにはカギのかかる部屋は無いし・・・」、「語学力？全然ダメ」、「家族は反対してるし・・・」、「毎日、日本料理でもてなすの？」、それに、「何かあったらどうしよう？」多分、そういったところではないでしょうか？

でも、それほど心配することはありません。

わが家のように、この中で「家族の反対」以外のマイナス条件を満たしているところでさえ、短期ではありますが、既に6ヶ国 11 人のホームステイを受け入れています。11 人の中には、クリスティーネ（独）のように、4回、計 24、5 泊の人もいれば、2回の人も3人います。他に、日帰りで来た人が、5ヶ国 19 人います。

実は、昨年6月の懇親会で、ホームステイ受け入れの裾野がもっと広がってけば、ということを感じました。

そこで、できるだけ多くの方に引き受けていただけるよう、わが家の体験談を書いてみようと思います。「これなら私もやってみようかな？」と感じていただければ幸いです。

対象者がドイツ人とは限りませんが、その点は予めおことわりしておきます。

心配その1「語学力」

これは今更どうしようもありませんので、最初から、「少しは日本語のできる人」ということにしています。

日帰りでやって来たアメリカのキンバリーとステイシーの時には、近所の英語のできる奥さんに応援をお願いしました。キンバリーは、ほんの少し日本語ができましたが、ステイシーは英語のみ、でもこの奥さんが快く応じて下さったので大助かりでした。

助かったといえば、クリスティーネの時には、香川大学の学生さんにも、ずいぶん協力していただきました。以前のレポートにも書きましたが、カレーパーティ、カラオケ、お花見、それに当時全盛だったプリクラなどへのガイドには感謝です。

心配その2「カギのかかる個室」

ずっと以前、日本の住宅のことを「ウサギ小屋」と呼ばれたことがありますが、それならそれで「ウサギ小屋体験」をしてもらうのも悪くはないだろう、というのがわが家の持論です。

私のところには、カギのかかる部屋はありませんが、今は子ども達が結婚して、それぞれ別のところに住んでいるため、2階の部屋が空いています。

そこで、この畳の部屋に布団を敷いて、エアコンが無いので、冬はコタツと電気

ストーブ、必要な人にはあなか、夏はちょっと暑いのをガマンしてもらうことにしています。さすがに、ヴェトナム、マレーシア勢にとっては、暑さも苦にならないようです。

ヴェトナムと、マレーシアの人たちは、いずれも2人一組で来ました。仲の良い同士なら、受け入れ側としては、この方が1人よりもずっと楽です。それに、来る側の緊張の度合いも少ないようです。ヴェトナムの人たちは、自国のライスペーパーと魚醤持参で、春巻きを作ってくれました。

イギリス人のガレスは、日本人のガールフレンドと一緒にやって来ました。彼は、わが家の長男が当時在学していた大学の留学生でした。日本語はかなり上手でしたが、ちょうど高松に着くと同時に風邪気味になってしまったので、彼女がいてくれたのは、お互いずいぶん心強いことでした。

その夜、たとえ襖の仕切りでも、部屋は別々の方がいいかと思って、そのつもりで用意していたら、何と長男も入れて3人、大きなガレスを真ん中にして、彼女が言うには、「川の字ならぬ、小の字に布団を並べて寝た」そうです。

この時、ガレスが、「部屋を真っ暗にして寝るのはダメ、でも豆球が真上にあるのもちょっと・・・」と言うので、彼女と長男はしばらく考えた末、窓のカーテンを少し開けて、外の防犯灯と、月明かりを入れることにしたというのを翌朝聞きました。

照明について、あまり深く考えたことのない私たちには予想外のことでした。

その後泊まった人たちにも尋ねてみましたが、今のところ、気になるという人はなくて、暗闇派、豆球派、それぞれ適当に過ごしているようです。

ドイツ人には蛍光灯を嫌う人が多いと聞いていたので、クリスティーネにも尋ねたところ、「大丈夫、問題はない」ということでした。

心配その3「家族の反対」

幸いにして、わが家においてはこの心配はありません。

心配その4「日本料理」

ホームステイの話をする、必ず、「毎日、日本料理作るの?」と聞かれます。どうやら、皆さんの頭の中には、懐石料理のようなものが並んでしまうようです。

もちろん、腕に覚えのある方なら、次々とその見せどころを披露なされば、それにこしたことはありません。しかし、そうでない者が無理をすると疲れるだけなので、あまり手のかかるものは作らないことにしています。

それに、普段食べているものでも結構喜ばれているようです。私も、もし外国でホームステイをするなら、その家でいつも作っているものの方がうれしいと思います。

なかには、韓国のイ・ジョンスンのように、あり合わせの材料で、韓国式の手巻き「キムパ」を作ってくれた人もいます。この時には、近所の方にも味わってい

ただきました。

それから、たまには外食や宅配を利用すると楽です。

ある時、ちょうど食事時に高松駅で待ち合わせたヴェトナムの2人に、「どんな店に行きたい？」と聞いたところ、「スパゲッティが食べたい」。寿司か、てんぷらを予想していた夫と私はちょっと驚きましたが、希望どおりイタリア料理店へ、ということもありました。

心配その5「何かあったらどうしよう？」

これはもう気持ちの持ちようにかかってくるものですから、「絶対そんなの大丈夫！」とも言いきれません。

しかし、この不安を一番に考えていると、何もできなくなってしまうので、あとは天におまかせということにしています。

さて、かくいう私も、実は中村会長さんが副会長をなさっていたところに、何となく乗せられて引き受けてしまったというのが、そもそもの始まりなのです。

あれは、香川日独協会がホームステイの受け入れを始めてまだ間もない頃のことと記憶しています。

岡山へ出かけた帰り、マリンライナーから降りて高德線に乗り換えようとしたら、ドイツ人と思われる女性が、案内板を見上げていました。

なぜ、ドイツ人だと思ったかという、彼女がとても大きな荷物を背負っていたのと、いかにも頑丈そうな靴をはいていたからです。

「どこまで行きますか？」と声をかけたところ、「屋島です」というので、途中の木太町駅まで一緒に乗って行くことにしました。

話をするうちに、やはり彼女はフランチェスカという名前で、ボン大学で日本語を勉強しているということがわかりました。日本の絵が好きというので、私は日本画の絵葉書を送る約束をして、住所を教えてもらいました。

そうして、彼女が帰国した頃をみて、絵葉書とカードを送ろうとしました。ところが、宛名の書き方がわからなかったので、中村さんに電話をかけて、教えていただくことにしました。

私の話を聞いて教えて下さったあと、中村さんは、「ところで山田さん、全く知らない人にそうして声をおかけになるのなら、是非ホームステイをお引き受けください。それはもう、素晴らしい体験になりますよ」

これは、えらいことになった！と、思いもかけない話に、しばらく返事のしようがありません。「でも、あのお、私のとこ、誰もドイツ語できませんし・・・」すると、中村さんは続けて、「フランチェスカさんのように日本語のできる方なら大丈夫でしょう？」とおっしゃいます。

このような次第で、だんだんと中村さんの魔力に引き込まれ、ついには「それなら、次の機会にでも・・・」ということになりました。

その機会は、意外にも早くやってきて、それから1ヵ月後ぐらいには、クリスティーネのホームステイが決まったというわけです。

あの時、フランチェスカさんに会わなかったら？

会ったとしても、声をかけていなかったら？

中村さんにお尋ねするきっかけもなく、クリスティーネがわが家でホームステイをすることはなかったかもしれません。

そして、もしクリスティーネが来なかったとしたら、その後何カ国かの人たちが訪ねて来たり、泊まりに来るということもなく過ごしていたかもしれません。

それを思うと何とも不思議な気がします。

.....

ちなみに、当時、

クリスティーネは、ボン大学学生

キンバリーは、ミシガン州ランシング短大学生で、

与島の京阪フィッシャーマンズワーフで研修中

ステイシーは、ミシガン州からやって来たキンバリーの友人

イ・ジョンソンは、瀬戸内短大交換学生

マレーシア、ヴェトナム勢は、全員、詫間電波高専留学生

他に、穴吹日本語学校学生（中国、韓国）、穴吹情報専門学校留学生（香港）

岡山大学留学生（中国）、企業研修生（中国）など

クリスティーネとステイシー以外は日本在住者でした。

会員のご活躍・お便り

ゲッティンゲンから

高野 光司

なによりもまず、香川日独協会十周年をお祝い申し上げます。

私は1963～65年 Alexander von Humboldt-Stipendiat として在独、千葉大学医学部助手、講師、助教授、カリフォルニア大学研究顧問、ゲッティンゲン大学客員教授をへて、1971年3月ゲッティンゲン大学医学部教授運動神経生理部長、後、病態神経生理部長として25年あまり在職し、95年3月部長職を解任されました。大学令によりますと、Mitglied ではなくなり、今は選挙権と義務のない、Angehörige になりました。後任の志願者が30人ありましたが、選考がもめている間、一年間、義務から開放されて、連日5km標高差200mの山道、野道とキャンパス内を徒歩で研究所に通っていました。選考がもめたのは、その大学に在職しているものは、原則として教授候補になれない。資質が同じ場合には女性を優先する。この二つが重なってしまったからでもあります。私が選考のための応募者の講演を聴いたかぎりでは、私の弟子ではありませんが、本学在職者が一番でした。しかし一位は、ウィーン出身の女性ときまりました。ところが、この女性は同時にウィーン大学にも応募していて、ここでも一位になりましたので、故郷に花を飾ることになり、本学出身の物理学の理学博士号と医学博士号を持つ員外教授が、後任となるという経緯がありました。この間に、私の妻が客員教授をさせていただいていた高松短大にお世話になることになり、96年から4年間高松に住みました。中央大学文学部で児童文学論を講義し、独文専攻の学生にドイツ語の授業を担当していた妻とは別居でした。

高松に着いた翌日、96年3月29日土曜日、快晴。県庁近くの讃岐荘を朝食後に出発、全部徒歩で、まず、これから何年か世話になる高松短大のまわりをぐるりと歩き、屋島を目指して、うねうね曲がった細い道を、迷いながら、お遍路道に辿り着き、屋島寺に登り、島の南半分を回り眺望を楽しみ、帰途につきました。これで、時差ぼけ解消です。国際会議に出席した時にも、いつも1日か2日早く着いて、一日中歩き回りました。ウィスコンシン州都マジソンでは4万歩。州立大学は3km程の湖岸にあるキャンパス。ゴミがほとんどない美しい町でした。シンガポールの学会の時には、あの長いオーチャード通りを何遍往復したのでしょうか。最後にこの道の端にあるオーチャードホテルに戻ろうとして、反対端の旧政庁の近くにきてしまいました。太陽を見て、方角をきめたのが、間違いのもとでした。6月下旬のことです。なぜ私がおろかにも、反対方向へ行ってしまったか、おわかりですか。翌30日には栗林公園に行きました。私にとっては、日本で一番すきな公園です。回数券か一年の定期券を買おうとしますと、係の人から長寿手帳を市役所でもらえば、無料で入れると教えられました。

栗林公園に入るためにもらった長寿手帳は、市立美術館を訪れるのにも、とても役立ちました。千円前後の入場料を払って、たとえば、シスレー展に入場したら、一時間以上ねばって絵を見るでしょうし、多分一度しか行かないでしょう。長寿手帳のおかげで入場無料なので、気に入った展覧会は、下町に出るたびに5分ほどでも訪れました。確か、ストックホルム近代美術館のモジリアーニは何度見たかわかりません。入り口の近くにありましたが、丁寧に挨拶してくれる係の婦人のいる入り口からすぐに出るのは、気がひけるので、出口まで美しい絵のなかを通り、途中でピカソやマチスの絵を見たりしたものです。美術館の隣の、うどん屋さんには、美術館を訪れる度

に通いました。

短大では、児童保険、ドイツ語、国際理解、環境論、比較文化論などを担当させられました。「まるで、昔のゴミ箱のようだな。近ごろはゴミだって分別収集しているのに」と誰かにぼやいたことがあります。

授業は私なりに工夫をしました。ドイツ語を習った人は、ドイツ語を忘れても、デルデスデムデンは覚えているでしょう。私の学生は、デルデスデムデンが、「ドイツ語みたいだな」と思うだけかも知れません。でも一生ブラームスの子守歌とシューベルトの野ばらをドイツ語で歌える人は、何人もいると思います。私が撮影したスライド、大学の食堂、学生寮、グリム兄弟、ゲーテ、ガウスの住んだ家なども、見てもらいました。たとえば、書き取りのテスト、私が読まないで、学生にとっては、とても早い会話のCDを、何遍も聞いて書くのですが、100点と98点それぞれ2枚を壁に張り出したところ、同僚2人の反対があって、取り下げたことがあります。今になってみると、おかしいことです。

環境論は、これこそ地球市民にとって、もっとも重要なことだし、高松の人々の関心の薄さに驚いていましたから、もっとも力を入れました。ちょうどその頃、ダイオキシシン問題がピコグラムという言葉とともに、連日のように新聞に掲載されていました。ゲーテがホモンクルスの口を借りて言った

” Das was bedenke, mehr bedenke wie.”

が、私の研究者、教師としての一生のモットーでしたから、ピコグラムに関しては、10の何乗という概念、1メートルはどんな長さか、メートル法のできた歴史的背景、つまり啓蒙主義、1789年の革命、産業革命、などを、私なりに噛み砕いて話し、理解してもらいました。ほぼ1学期かかりましたが、ほぼ9割の学生は、「体重1グラムにつき1ピコグラムが致死量である破傷風毒素の地球全体のヒトの致死量はいくらか」、という計算ができるようになりました。できるようになるまで、何度でも時間の終わりに、私のところに、来てもらいました。自分でできたのか、本当に理解してできたのか、できないかは、5秒程でわかります。(十進法を理解し、掛算九九と割算ができれば、中学生でもできるはずです。頭の体操です。計算してみてください。)

「環境保全は、私たちの子孫の存亡にかかわること。一人一人が身の回りの生活の中で、実践努力しなくてはいけないこと」を強調しました。私が1985年に自動車を持つことをやめて”grüner als die Grüne”と称していたことが私の授業の支えになりました。授業を進めながら困ったことがありました。「なぜ小型焼却炉は、いわばダイオキシシン製造器であるのか」ということを学生によく理解してもらいましたが、大学では依然として焼却炉を使っていました。CO₂問題に関しては、「紙は森なり」という意味からも詳しく、やさしく話しましたが、大学では大量の紙を焼却処分していました。会議直前に配られる教授会資料は、その場では読み切れない程の量でした。……尻切れトンボですが、この話はこれでやめましょう。

私語をする学生には、二人のうちの一人に代表で教室の後に、適当時間立ってもらいました。4年間には何十人かの学生さんが立ったことでしょうが、私の教室では私語はほとんどありませんでした。携帯電話を使ったり、ベルを鳴らしたら(3階の)窓から下に投げますよ、と宣言しました。一度電話機をあずかったことがありました。が、投げ捨てはしませんでした。

ドイツ語のテストは学期中に何度も行い、他の学科のレポートは、学期の途中か、最後から2番目、3番目の授業時に提出してもらい、採点、批評をして、学生に返しました。「レポートには知らないことは書くな、書きたければ、勉強して理解できたことだけを書け」をレポートを書く場合のモットーとしました。自分で理解できていな

いことを書いた学生は、私から油をしぼられました。短大には「卒業研究」というものがあります。この「研究」は入念に読みました。学生は何冊かの本を読んで、多かれ少なかれ、自分のものにして書くわけですが、世の中には、出鱈目を平気で書く本の著者が、たくさんいることがわかり、閉口しました。でたらめ臭い一行を調べるのに、図書館で半日過ごしたこともあります。データーは忘れましたが、「日本の海岸線の長さはどれだけ、その六分の一を使い、・・・波のエネルギーで発電すると、どんな大きさの原子力発電所のいくつ分が発電できる」という計算はレポートに書かれたものが正しいかどうか、何度も計算し、最後にレポートを書いた学生と一緒に計算してみせて、本の記載が正しくない、と納得してもらったのは、その一例です。

ドイツに30年あまり過ごした私は、浦島太郎で、日本のことがわからなくなっているのかもしれませんが、他方、「岡目八目」色々のことが目につきます。音がうるさいのには閉口しましたが、この問題は省略します。言葉の乱れもそのひとつです。日本でも嘆いておられる方も多いようですが、ふたつだけ、「どうして？」とおっしゃる方もあるかもしれないことを申し上げます。

私は教授会で「AO入試を立ち上げる」というのに一人反対したことがあります。「お聞きしたところ、若い先生方の負担が増える、ということですが、勉強をしなくてはならない若い先生方は委員会などで、今でも忙しすぎます。この上負担が増えることには反対です。また、この方法は、特徴や伝統のある大学や学部、心から憧れているような学生を選ぶ、ということですが、わが大学にはまだ特徴も伝統もないではありませんか。」と発言したことがあります。あとで、少しでも学生を多くとる手段だ、と聞きました。そうと始めから言うてくだされば、私も反対しなかったでしょう。本音と建前の差が日本では多すぎる、一例と思います。脱線しました。申し上げたかったのは「立ち上げる」という言葉です。この時はじめて意識して聞いたと思いますが、なんと表現したらいいか、「いやな言葉だなー」と思いました。ドイツに帰って、読んだ文芸春秋巻頭随筆で阿川弘之さんも、嫌な言葉としてあげておられました。

二つ目。私が日本滞在中に東海村の[リンカイ]事件がありました。リンカイというのはジャゴン(jargon)です。いわば「東海村原子力関係者のヤクザ言葉」です。私が日本で正しい表現を聞いたのはただ一度、小松左京さんだけでした。物理学者や化学者がどうしても何とも言わないのでしょうか。ふたつ、と言いましたが、もうひとつ。昨4月6日、NHK短波放送を聞いていると、法案の中で、クロイツフェルトーヤコブ病を、ヤコブ病と告げていることです。解説者もヤコブ病と言っていました。この二人の学者のどちらが、この病気において、より多くの貢献をしているか、まだ知りませんが、日本語における「短縮語」には問題のあるものがとても多い、とだけ申し上げて、この問題は後の機会に譲ります。ちなみに、Creutzfeldt 兄弟、兄の Werner、ゲッティンゲン大学の同僚の内科の世界的な大教授で、少し離れていますが隣人、弟の Otto は神経生理学者としての同僚、私の家から1 km 足らずのマクス・プランク研究所の教授(故人)、1991年のノーベル賞受賞の Sackmann と Neher の先生でゲッティンゲン大学の Honoralprofessor (日本にはない表現で、日本の大学で使われている名誉教授ではない)、この兄弟はクロイツフェルトのお子息です。兄弟二人がゲッティンゲンにいるのは偶然です。(拙著ゲッティンゲン便り、参照) 私がドイツに住んでいる間に、今は不景気ですが、日本はとてもお金持ちになりました。私がフンボルト留学生として渡独したときには、北極回りは SAS だけ、政府専用機などなく、私は偶然、時の外務大臣大平さんと一緒でした。運賃は大学助手の年俸と同じくらい、機内食の食器はツーリスト・クラスでも銀でした。航空機の発達もありますが、今では、安い航空運賃なら月給の10分の1くらいなのはご承知のことです。経済は栄え

ましたが、学生を見ていると、社会は「金金金」になってしまい、経済の発達でよいことよりも、悪いことの方が多いのではないかと思ったこともあります。容れ物は立派でも中身がない。たとえば、高松にはいくつもの立派なホールがありますね。私が高松にいた時に、外国のオーケストラその他外国からの音楽家の演奏会もポツポツあったようですが、心に残るようなものは、日本の新作オペラ「脳死を越えて」くらいのものでした。多分私がドイツの家に帰っているときに良い音楽会があったのでしょう。

志度のホールは高松のそれらに比べて、お粗末ですが、中身は少し良い。少々痛ましい思いでしたが、ごく晩年のランパルを聞くことができました。ランパルといえは1970年代、高松のホールには大分見劣りのする当地のホール（Stadthalle）で、ランパルの金、フルニエの銀のフルートのこの上なしのデュオを聞いたことがあります。志度といえは、大串半島のへさきに、瀬戸内海を見下ろす、音響効果も良い野外劇場がありますが、どれだけ利用されているのでしょうか。数年前ストュツガルトのごく粗末な、大串半島のその建設費が100分の1、あるいは1000分の1にもならない野外劇場でクライストのペンテジレーアを観劇したことがあります。聴衆は座布団と膝にかけの毛布持参でした。週に4日、もう8週間も上演されているということでしたが、300人くらいの席は、いつもほぼ満員ということでした。私たちも入場券を手に入れるのに苦労しました。ペンテジレーア、翻訳でいいですから、読んでみてください。

昨年5月アイルランドの西北岸の小都市スライゴーに行きました。ダブリンの空港に降りると、この国は文化を大切にしているな、と思いました。豚や羊の疫病のほとぼりがまだ冷めず、空港では消毒液のしみた絨毯の上を歩かせられた頃です。司馬さんの愛蘭土紀行によれば、アイルランドは、国民一人当たりになると、世界一の債務国（1997年朝日新聞による）だが、債務は国民の教育と福祉のために金がいるから、としています。今や、アイルランドはEUでは経済でも優等生です。スライゴーは、コンサート・ホールもない小さな都市ですが、いまや世界的のフォークラー・クワルテットを3年間充分な待遇で丸抱えにして、その間、年50回を越す、世界各国における演奏会には自由に出て良い、という結構な提案がありました。この通りには音楽家たちの都合で、実現しませんでした。私が訪ねた時には、フォークラー・Q.週間を催したのです。大部分の演奏会は、スライゴーの郊外、詩人イエーツの墓のすぐ側の、いわば村の教会で開かれました。聴衆は熱中して音楽を楽しんでいました。容れ物がなくても、文化のためには、金を惜しまない態度を日本の人々に学んでもらいたいものです。司馬さんに長生きをして、もう一度アイルランドを見ていただきたい。当時、司馬さんは紀行の、次のページに「国家とは画民の誇りと希望の源泉でもある。この要素は、金銭では換算できない」と書いておられます。

千葉大学助手山岳部OBの頃、薪の燃し方、ご飯の作り方で、いちいち文句をつけたからでしょうか、現役の後輩たちから「おじいちゃん」とか「小姑」というあだ名をもらいました。この手紙でもどうやら、「おじい、小姑」が適切なようで失礼しました。模型飛行機（プラモデルではなく、飛ぶ模型です）に熱中した少年時代の夢につながるYS-11（自転車でも何度も見にいきました）のある高松、やんちゃ盛りを過ごした彦根と姉妹都市の高松、おそらく生涯で最後の日本生活をした高松には思いが馳せます。皆様と、もっと親しくお付き合いしていただければよかった。

独検 2 級への道

藤田 晋

つい先日、独検 2 級の合格証書を手にすることが出来ました。学生の頃には「こんなもの、出来るはずがない」と思っていたものに、気がついたらトライし、そして成果を上げた自分がありました。このように考えると、感慨深いものがあります。

会員の皆様の中にも、独検に関心を持たれている方、これから受験を目指す方がいると思います。自慢話のようで恐縮ですが、私なりにこれまで取り組んできた内容を紹介させていただければと思います。

2 級の話の前に、まずは、3・4 級を目指した香川大生の頃を紹介します。1994 年秋の独検で、4 級と 3 級を受験、合格しました。ドイツ語をきちんと学び初めて 2 年目だったので、3 級はボキャブラリー不足を痛感しました。検定の時に初めて見た単語も少なくありませんでした。しかし、リスニング問題が完璧に近かったことで、3 級までを取得することが出来ました。

そのリスニングですが、語学研修センター（現アイパル）の中級講座で、やや難しいビデオ視聴や練習カセットに触れたこと、インター＝ユニ（九州から中国地方までの大学生が参加する、ゲーテがサポートしているドイツ語合宿）に参加した際に、多くのネイティブに触れたことが大きかったと思います。そして何よりも、シュラルプ先生のドイツ語会話の授業でした。"Themen neu 1"をベースに進められたこの授業では、テキストに付属した一問一答の会話練習テープを使うことが多かったように思います。この練習はけっこうハードだったのですが、リスニングと即答の力を身につけるには、非常によいものだったと思います。

多くの人が「最初の目標」に据えられるであろう、3 級に合格するには、"Themen neu 1"の内容を、自分のものにすることで十分だろうと思います（それでも結構大変だとは思いますが）。

さて、2 級の話です。昨年の会報でホームステイ記録を書かせていただきましたが、その旅行の半年前から、都内の「某駅前」に通っています。ちょうど 2 年が過ぎたところですが、徹底した少人数制、会話ベースの授業で鍛えています。

その授業を少し紹介しますと、ネイティブの先生と最大 3 人までの生徒（3 人になることはまれで、2 回に 1 回はマンツーマン）で 40～45 分の授業が行われます。最初の 10～15 分はフリートークの時間で、自身の近況、国内外のニュース、趣味に関する話題など、特にテーマを決めずに会話をします。時にはトークが盛り上がったまま 40 分が過ぎることもあります。そして、後半は主にテキストをベースとした練習です。時には、講師の持ってくるプリントに基づくこともあります。ここでは"Sprachkurs Deutsch"シリーズを使っており、私は現在、4・5 巻を併用しています（入学当初は 3 巻を使い

ました)。文法演習をする時もあれば、テキストを読むこともあります。ただし、単語の意味の説明、文法事項の説明など、全てドイツ語で進められます。

テキスト演習ももちろんですが、最初のフリートークは特に重視されています。幸い、私は地理学を専攻し、現在は講師の立場で教壇に立っていますので、「話のネタ」を探すのは得意です。その際に、単語を知っているかどうかは全く考えません。「話したい」ネタをとりあえず見つけておく。そして、回りくどくとも、自身の出来る方法でとにかく表現することを心がけています。その中で、適切な表現・語彙を増やすことが出来るからです。独検2級に向けて勉強したことといえば、これだけです。気を付けたことは、どんなに忙しくとも、週に2時間以上授業を受け続けることだけです。

昨年11月に1次試験(筆記90分+リスニング30分)、今年1月に2次試験(5分程度)を受験しました。近年、1次試験の内容がかなり変化しているようなので(易化しているとのこと)、参考までに今回のパターンを紹介します。しかし、易化しているとはいえ、合格基準は例年73点前後です。3級以下の基準が60点前後であることから考えると、相当な難関です。

第1問、第2問は語彙の問題です。前者では、類似する単語から適切なものを選ぶというものです。ここでは、分離動詞・非分離動詞を正確に使い分けられるかが問われます。後者では、同意書き換えにおいて、ある動詞の名詞形を書き取るというものです。普段単語帳を作るときに、動詞-名詞-形容詞の派生を意識しながら作ること、動詞については「"stellen"のグループ」など、分離動詞・非分離動詞にまで広げていくことを意識することが肝要かと思います。それを実行できると、語彙力はどんどんと高まるはずです。

第3問から第6問は長文問題です。1問はグラフ読解問題で、必ず出題されます。冷静に読んでいけば、難しいものではありませんが、ケアレスミスを起こしやすいところかもしれません。そのほかでは、2問にドイツ語による短文と日本語による要約文の組み合わせ問題があります。これは全ての単語が分からなくても、キーワードをきちんと見つけることが出来れば容易なものです。残りの1問では、ドイツ語による要約文の中から、正しいものを選択する問題が見られます。対策としては、ドイツに関するニュースに意識しておくことでしょうか。出題事項に関する知識があれば、かなり取り組みやすいと思います。リスニングは2題あります。今回はいずれも会話を聞いて、問題用紙中にある4択から選択するものが5問ずつありました。会話と質問文は2回繰り返されます。気を付けたいのは次の点です。会話を聞いていると、選択肢に書かれていることが全て出てきます。これで混乱する人も少なくないと思います。それだけに、1回目では「質問文をきちんと聞き取る」ことが非常に重要になります。これが出来れば、2回目では何を聞き取るべきかが分かり、会話を聞きやすくなるはずです。ちなみに、2題目は全問正解でした。

そして、2次試験ですが、ドイツ人と日本人の試験官が一人ずつの部屋で行われます。質問は原則としてドイツ人の試験官のみが行うらしいのですが、私の場合は、日本人の試験官から、解答に対する詳細を確認するような発問がありました（単語の使い間違いがあったのかもしれませんが）。

その質問内容ですが、非常に簡単です。名前、出身地、職業、仕事場の紹介（描写）、現在ドイツ語を学んでいる場所と理由、将来のドイツ語活用法（夢）、趣味などを聞かれ、最後に個々に関連した質問でした。私は、地理の講師と言うことからでしょう。一人旅とグループ旅行のどちらが好きか、なぜなのかを尋ねられました。

コツとしては、質問を正確に聞き取ること（初対面の試験官と話すとすると、意外と難しいらしい）、即答すること、大きな声でゆっくり解答すること、間違いを気にせず解答することだと思います。また、難しい表現にこだわらず、簡潔に解答することもコツだと思います（実際は、ドイツ語と関わる夢を話すときに接続法第2式を使っていたが）。

以上のプロセスを経て、幸運にも最初のトライで2級を取得できました。香川大時代のドイツ語学習の在り方が、現在でもベースになっているように思います。初年度の「実際の言い回しから（ドイツ語を使いながら）、文法をも身につけていく」というスタイル、クノル先生以来の「大きな声で、文法などの間違いなどを考えずに、即答する」方法が私のスタイルとも言えます。自分流となりつつある分、他の方々に参考になるかどうかは分かりません。少しでも、特に、学生の皆様に参考になれば幸いです。

なお、私自身はZertifikat Deutschなど、独・奥で実施されている国際的な(!?)基礎力認定試験に挑戦できればと思っています。

【編集者付記】

下記のサイトに藤田氏のドイツ語学習歴のより詳細な内容もアップされています。

<http://homepage2.nifty.com/SFujita/J/deutsch.htm>

また、独検のホームページも、最近オープンしているようですので、ご参照下さい。

<http://www.dokken.or.jp>

川田 敦子

再びドイツへ

この会報に投稿させて頂くのは今回が2度目になります。当時私は大学の2回生で、香川日独協会の紹介で友人の山田さんとボンに2週間ホームステイをさせて頂いた折の感想を述べました。あれから実に3年の月日が流れ、その間何と私は2回もドイツを訪問しました。正確に言うとドイツに1年間留学していました。ボンでのホームステイから帰って益々ドイツへの魅力にとり付かれ、私は香川大学のパートナー校ヴィースバーデン専科大学へ1年間留学する決心をしたのです。自ら望んだ留学であったものの、正直言ってこれからどんな生活が待っているのかと思うと私は不安で仕方がありませんでした。

大学生活

しかし、そこで私を待っていたのはホームシックとは程遠い毎日でした。もちろん私のドイツ語力は大学で経済の講義を聴けるほど充分なものではなかったもので、午前中は市民大学でドイツ語を学び午後から大学の講義に出るというハードな毎日でした。それでも私がやってこられたのは、ヴィースバーデンで日本語教師をされている先生方の助けや私が生活していた寮の仲間、そして友達がいたからです。特に私のルームメイトだったダニエラは私にとって家族のような存在でした。共に食事や掃除、買い物をしたりテレビを見たり、相談にも乗ってもらいました。3ヶ月が経とうとする頃ようやくドイツ語が聞き取れるようになり、嬉しかったのを覚えています。

さて、ドイツでの生活は日本のそれとは大きく異なっており、全てが驚きの連続で私の目には何もかもが新鮮に写りました。例えば、大学の講義では学生が大変積極的で教授は学生達から質問攻めに遭うのが日常茶飯事です。学生もそれだけ勉強をしているということです。彼等はパワーポイントを自由自在に使いこなし、プレゼンテーションをやったのけました。私もドイツに来て初めてパワーポイントでのプレゼンテーションを地元のバス会社でしました。ヴィースバーデンの学生たちは、私が講義を理解できないでいると、嫌な顔一つせずに簡単なドイツ語で噛み砕いて説明してくれたものです。また、強く感じたのは、ドイツでは学費がかからないため学生は生活費だけで勉強でき、従ってアルバイト等の稼ぎで経済的に自立している者が多いので日本の学生よりもしっかりしているということです。ドイツではほとんどの学生がインターンシップで企業研修を行います。自分で研修先を探し、期間は2ヶ月から長いもので半年間、わずかな報酬が出るが多々あります。香川大学でも、このインターンシップをカリキュラムの一環として取り入れています。期間が数週間と非常に短く、研修先もある程度限られているのが現状です。その程度では仕事を覚えたと思ったら去っていかねばならないのももう少し長くできるシステムが必要かと思います。行事としては、留学生の世話をしてくれるチューター達がカジノ、テレビ局、ライン川下りと中世の祭り、ワイン試飲会と郷土料理（これは学長さんの

招待でした)、お城の訪問等を企画運営してくれました。

寮生活

私は大学から徒歩15分ほどの所にある寮にダニエラと住んでいました。個室は12m²で、バスとキッチンは二人で共同でした。地下にはフィットネスルームもあり、時々そこで汗を流しました。私のラジオ体操を見よう見真似でする人もいました。屋上やフロアでは度々誕生日パーティーや食事会があり、思い起こせば食べてばかりの思い出が沢山あります。洗濯物を屋外に干せないのがとても不便でしたが、大学から近くて真新しく、寮は小さな家がいくつも集まっているようなものなので、友達を部屋に訪ねることが容易でしたから何よりも多くの友人をここで得ることができました。

休日の過ごし方

ところで、週末の時間の過ごし方というのは、当初は「ドイツ人は週末一体何をして過ごしているのだろうか?」と思いました。というのも週末(土曜日の午後以降)に営業している店といえばカフェ、レストラン、映画館などに限られているからです。彼らにとって週末は家族や友人たちとのんびり過ごす大切な時間です。カフェに座って話したり、ライン川沿いを散歩したり、森を歩いたり…ドイツでは時間がすごくゆっくり流れているようでした。残念ながら今の日本は何だかあくせくしていて心に余裕のない人が多いように思います。それはもしかしたら、家族と過ごす時間が少ないし、いつも時間に追われているからなのかもしれません。

日常生活

ドイツ人を連想するとき、私の頭の中には「質素・儉約」と「親切」の文字が浮かんできます。ご存知ドイツは環境保護先進国で、買い物時には袋持参、古紙やビン、ペットボトルのリサイクル、そして資源ごみの分別が徹底して行われています。そこにはドイツ人のシンプルな生活観が環境を守ろうとする態度となって現れていました。がしかし、リサイクル品の普及率はあまり芳しくないようで、それが残念に思いました。それから、困っている人がいるとどこからともなく手を差し伸べる人々を私はこの国で何度も目にしました。私自身この親切に何度助けられたことでしょうか。駅の階段やホームで、バスの乗り降りの際に当たり前のように自然に手助けができるドイツ人は本当に素晴らしいと思います。残念ながら日本ではこの光景をあまりみかけません。この2点は日本が多いに見習うべき点ではないでしょうか。

移民大国ドイツ

ドイツで1年間生活してみて感じた事は、この国には本当に移民が多いということです。私のルームメイトだったダニエラをはじめとする新ユーゴスラビア人、ロシア人、そしてトルコ人の移民が特に多く、ドイツという国は彼等の存在なくしては成り立たないと実感しました。そうした環境の中で、本来なら両者はお互いに理解し合い共生していかなければならないのに、高い失業率は移民が原因だと考えるドイツ人が中にはおり、衝突が起こることがあります。

2002年より本格的にユーロの導入が始まり、EU諸国の結びつきは益々強くなっていくでしょう。その中にあって、様々な人種が共存し、8カ国もの国々と国境を接するヨーロッパの心臓部分であるドイツで求められていることは人々が互いの立場を理解し合い、認め合うことだと思います。ユーロの導入で通貨が統一され、容易に物価を比較でき、価格競争が激しくなる中でドイツでは物価が約2倍に跳ね上がり、移民の人々を直撃しています。その現状を連邦政府はどう受け止め、改善していくかが今後の大きな鍵となりそうです。

再会

帰国後、就職活動や卒業論文を終えて社会人になる前にヨーロッパを再訪することにしました。寄寓にも、ちょうど1年前ドイツを去ったまさにその日にドイツへ向けて旅立ちました。私の卒業旅行は留学時代に会った友人や知人を訪ね歩く旅となりました。空港では昨年ヴィースバーデンから高松に留学してきたアネッテとラリッサらが出迎えてくれました。翌日ヴィースバーデンの思い出の場所である大学、市民大学、そして寮を訪ね、懐かしい顔ぶれに嬉しくなりました。突然の訪問でみんな驚いていましたが、私の顔を見るととても喜んでくれました。6カ国の国々で数々の再会を果たすことができ本当に良かったです。

このように私はドイツで出会った人達だけでなく、日本の日独協会の方々、沢山の友人、そして家族など様々な人々の支えで今までやってこれたし、今の自分があるのだと思います。これらの人々に深く感謝すると共に、これからもこれらの人達とのつながり、そして新しい出会いのひとつひとつを大切にしていきたいと思っています。

ボン独日協会の友人と再会してきました 2001/9/6～9/9

香川日独協会学生会員 明神実枝

2001年9月

Email: mieallegute@hotmail.com

◇ドイツを旅行するきっかけ

◇ボンでの再会日記

9月6日（木）ボンへ到着 クラリッサと再会

9月7日（金）メンヒさんと再会

9月8日（土）カイ&ヴィリーと再会

9月9日（日）ヘルムートと再会 + お礼の夕食会

お礼の夕食会

◇全体の感想

◇ドイツを旅行するきっかけ

今回のドイツ旅行

2001年9月3日～12日の10日間、母の知人である上島さんご夫婦を案内してドイツを歩きました。マインツやリンブルク、カウプなどライン川沿いの町々を訪れ、ボンに6～9日の4日間滞在してボン独日協会の友人達と再会を楽しみました。そして何より、上島さんご夫婦にとっては彼らとの出会いを楽しんでもらえた旅となりました。

旅行するきっかけ

上島さんはドイツに興味を持たれており、ツアー旅行よりも、私の案内でドイツを旅行したいと2000年2月頃から言っていて下さっていました。私自身、ドイツ好きで旅行した経験はあっても人を案内してドイツの良さを紹介できる自身はなく、あまりにいいお話でお世辞かと思っていました。



しかし、どうも上島さんは本気で言っていて下さっている様子、それなら私にできることは限られているけれど、ドイツ人の友人に助けてもらえればきっと心に残る旅になると考えて案内役を引き受けることにしました。

(写真①:9月9日(日)最後日みんな揃って夕食会:

左から私、上島美貴子さん&教夫さん、ヘルムート・シュレックさん、マリアンネ・メンヒさん、カイ&ヴィリー・ヘックさん)

そして以前、2000年9月にボンでホームステイ、インターンシップをさせてもらった際に知合い、お世話になったボン独日協会の友人達にメールを送って相談してみたところ、「ぜひ再び会いましょう。上島さんご夫婦にもお会いできるのを楽しみにしています」と返事をもらいました。

そんな経緯でドイツを旅行する機会が与えられ、ボン独日協会の皆さんに再会する旅行、上島さんにとっては出会いの旅が実現することとなりました。

◇ボンでの再会日記

9月6日(木) ボンへ到着 クラリッサと再会

この日はライン河に浮かぶプファルツ城を訪れて、夕方ボンに到着しました。クラリッサ(Clarissa)とは16:30頃再会し、ボンの街を案内してもらう予定でしたが、上島さんは初めての土地を冒険しつつ歩きたいとおっしゃり、ホテルから街の中心街まではクラリッサの案内でボン大学の歴史を教えてもらいながら歩き、その後、お2人でボンの街を散策されました。

クラリッサと私は、クラリッサが3月に高松の明神家でホームステイして以来ですから、半年ぶりの再会でした。明神家ではまき寿司づくりなどに挑戦したので、日本から焼きのりをお土産に持っていきました。彼女はドイツに戻って巻寿司をつくってみたけれど上手くいかなかったとか。。。再度挑戦してもらうための、いいお土産になりました(笑)。

9月7日(金) メンヒさんと再会

メンヒさんとアーヘンを訪問したきっかけ

メンヒ(Mönch)さんにアーヘンを案内してもらうことになったきっかけは、昨年のホームステイ中に訪れる機会を逃がしたことにありました。昨年2000年はカール大帝戴冠200周年のイベントで、カール大帝のフランクフルトからアーヘンへの馬での道のりを辿るツアーがありました。それに参加できず残念だったので、今年こそとメンヒさんに相談しました。すると、「そのツアーは昨年のもので今年はないけれども、私が案内しましょう。アーヘンには7年住んでいたし主人と知合った街でもあるし、ぜひ案内したいのです。」と言って下さいました。



(写真②) : 9月7日(金) 3国点(3-Länder Punkt)にて。左からメンヒさん、上島さんご夫婦)

褐炭の採掘

車で道の途中、ドイツのアウトバーンの通行料を巡る問題、褐炭の露天掘りと住民反対にまつわる議論、それによって作られた人工の山のスキー場としての利用、若者の Wandalismus など、ドイツの事情を教わりました。メンヒさんは、上島さんが電力関係のお仕事をされていたということを私から事前に知り、ドイツのエネルギー問題について、特にボンからアーヘンに向かう地域で褐炭の露天掘りと褐炭を利用した発電所などについても詳しく説明して下さいました。

3 国点 (3 - Länder Punkt) に立つ

アーヘンの市街地を訪れる前に、ベルギー、オランダ、ドイツの国境が接する 3 国点に案内してもらいました。

そこへ行くにはオランダに一度入っていかなければなりません。メンヒさんが道路を走りながら「ここからがオランダ」と言って下さったいたしましたが、そこから看板表示がオランダ語になっていました。しかし、何も言われなければ全く気づかなかったと思います。

3 国点のそばにあるお土産屋では、オランダ語入ったステッカーなどを売っていたけれども、その店員の女の子はドイツ語も話せるので混乱してきて、その店員に「普段は何語を話すのか、オランダ語を話すのか」と聞くと、「私はベルギー出身だけどベルギー語はなく、家ではフランス語を話し、学校でドイツ語を習っている」との答え。言語文化も混ざり合っている様子でしたが、とは言え、その隣にあるレストランはオランダ料理のみ、数km戻ったところにベルギー料理のレストランがあり、両国の差を意識しているような一面も見られました。

アーヘン (Aachen) 訪問

アーヘンでは、まず大聖堂を見学しました。カール大帝がアーヘンを気に入っていたこと、持病に配慮して建物を建てさせたことなど、カールにまつわるエピソードをメンヒさんから教えてもらいました。その他に、街中に点在するこつけいな噴水、アーヘン名物の人形型クッキー-Printen の店など、ツアーではもちろん、ガイドブックからも知ることのできないようなアーヘンの面々を見せてもらいました。昼食はアーヘン市役所の地下レストラン Ratskeller で取りました。Steinpilze というドイツのマツタケ(?)を初めて食べました。もちろん、おいしかったです。



(写真③:9月7日(金)アーヘン 噴水前にて。左から上島教夫さん、メンヒさん、上島美貴子さん)

アーバイラー (Ahrweiler) 訪問

アーヘンを後にし、少し時間があるのでぜひにと案内されたのはアール(Ahr)川の流れるアーバイラー地方でした。アール川はライン河の支流で、傾斜のきつい谷間に流れ、そのために温暖な気候がもたらされてワイン栽培が盛んな地方です。地名は聞いたことがあったけれども、ワイン畑と言えばライン川沿い、モーゼル川沿いという固定観念を持っていたので、新しい発見でした。傾斜がきついために冷たい風が通り過ぎるとは言え、日当りは良くない、しかし粘板岩を畑の表面に敷くことで熱を留まらせてワインを育てるというローマ時代からの知恵だそうです。

その地方のワイン醸造所(Mayschoss Weinkeller)にも立ち寄りました。地下の醸造所にはワイン作りの道具の展示があり、奥にはワインの樽がいくつもならんでいました。中には彫刻の施してある樽があり、それは例えば 200 周年などを記念してつくられたものであることも知りました。丁度ワインの収穫時期だったので大半の樽は空にされ、今年収穫のワインに備えられていました。

その夜は、アーバイラーの田園風景を楽しめる静かなレストランで夕食のひと時を過ごしました。何とも素朴な風景にだんだんと明かりが灯されるのを眺めながらの夕食は最高でした。

メンヒさんご夫妻

話の流れの中で驚いたことは、メンヒさんご夫妻と上島さんご夫妻は何とお二人とも年齢が同じだということです。それもひとつの理由だったのか、メンヒさんは帰りに自宅に招待下さり、上島さんご夫婦を自宅で療養中のご主人に紹介して下さいました。メンヒさんご夫婦と上島さんご夫婦は国籍は違えど不思議に通じ合うものがあったようです。私は言葉の通訳を担当しましたが、しかし当人同士は言葉を超えていろいろなことを理解し合っていたように感じました。

9月8日(土) カイ&ヴィリーと再会

カイ&ヴィリーには、昨年ボンでホームステイしていた時にケルンを案内してもらい、今年もお願いしたいと言うと、こころよく引き受けてくれました。しかも、最初の予定ではケルンだけでしたが、ブリュールのアウグストス城(Schuloss Augustus)もぜひ一緒に見学しようと申し出てくれました。

ブリュール (Brühl) 訪問

アウグストス城の裏にはそれは見事に手入れされた庭園と森が広がっており、すばらしいのひと言だったのですが、カイやヴィリーは「秩序はあるけれど、残念ながら日本の庭園のような自然で風情のある空間はない」と日本びいきなコメントをしてくれていました。



(写真④:9月8日(土)ブリュール アウグストス城にて。

左からヴィリー・ヘックさん、上島美貴子さん、カイ・ヘックさん、私)

アウグストス城の見学ツアーのガイドさんはボン大学の学生で美術史専攻という女性でしたが、説明が大変早口で私には歯が立ちませんでした。しかし、カイとヴィリーは私が理解できる程度に噛み砕いて説明してくれ、ようやくそれを日本語に通訳することができました。

カイとヴィリーはお城のことをとても詳しく説明してくれ、2 人ともよく知ってるなあと感心しつつ、上島さんが「このお城を見学するのは何回目ですか」と聞きました。ヴィリーは「2 回目」と答え、続けて「1 回目はいつだか分かる？」と聞きかえすので、「随分前のこと？」と言うと、「ちょうど一週間前の土曜日！」と笑いながら答えてくれました。私たちとの約束の前に下見してくれていたのです。本当に嬉しく思いました。

「ふるさと」と「リンデンバウム (Lindenbaum)」

「日本食をぜひ一緒に食べたい」というカイとヴィリーのリクエストから、私たちはドイツの日本食を食べに行きました。面白かったのは、ケルン近郊の日本食レストランに向かう車の中で、ヴィリーが北ドイツでの休暇で買ってきた舟歌の CD をかけていましたが、それが上島さんの耳にとまり、意外にもカイとヴィリーも上島さんも歌が好きだということです。そんな話題で盛り上がりました。

カイとヴィリーは以前日本を旅行した時に鳥取県を訪れ、そこで「ふるさと」の歌を耳にし、気に入ったのだそうです。そして、東京の CD ショップで店員に歌って聞かせて CD を探したのだそうです。



一方で上島さんは家族が集まったりすると歌う歌のひとつが「ふるさと」だそうです。こんな話題で盛り上がり、今度は上島さんが昔歌ったことのある「リンデンバウム」の CD を探したいとリクエストしたところ、食事の後に CD ショップへ行き、カイとヴィリー、店員さんまでが粘り強く探してくれ、手に入れたのです。

思いがけず、上島さんご夫婦もカイとヴィリーも旅の出会いの面白さを感じることでなりました。これも、日本を旅行して「ふるさと」を気に入ったカイとヴィリーが車で北ドイツの舟歌を聞き、ドイツを知るきっかけの一つに「リンデンバウム」があった上島さんが「ふるさと」を好きだった、という不思議な巡り合わせで、旅行前には想像の出来なかったことです。言葉を超えた楽しみを感じました。

ケルン (Köln) 訪問

CD を買って満足したところで、ケルン市内へ向かいました。

(写真⑤:9月8日(土)ケルン市内 噴水前にて。左から上島美貴子さん、紀夫さん、カイ・ヘックさん、私)

その途中で「ケルンの大聖堂は近くまで行ってしまうと大聖堂全体がカメラに納まらない」ということで手遅れにならないよう、大聖堂に近づく前に写真を撮りました。細かな配慮が有難かったですし、地元の人に連れて歩いてもらう時の特権だと感じました。

そして、いつ見ても偉大で壮大な大聖堂に近づき、「カイとヴィリーも背がとても高いけれど、大聖堂も大きい」なんて冗談を言いながら中も案内してもらいました。大聖堂の中では、オルガン、3人の博士が眠っている棺桶、クリストフォロスの像、などひとつひとつにまつわる神話や聖書の物語を説明してもらいました。その後、ケルン市内に点在する噴水、ローマ遺跡などもひとつひとつ説明をしてもらいました。

9月9日(日) ヘルムートと再会 + お礼の夕食会

シュレック・ファミリーには香川日独協会からの多くのホームステイ希望者が受け入れてもらっていますが、私もその1人で、昨年(2000年)は3週間もお世話になりました。

今回はヘルムートに、コブレンツ、エルツ城など、少し遠いですが、わがままを聞いてもらって連れて行ってもらいました。

コブレンツ (Koblenz)

落ち着いた日曜日の朝、ヘルムートは相変わらず流暢な日本語で、私たちを迎えてくれました。所属する和太鼓演奏グループ“震太鼓”のコンサートのポスター、写真などを見せてくれ、お土産にとくれました。アマチュアグループとは思えない本格的な演奏会活動の話聞き、終始驚かされることばかりでした。

コブレンツへはライン川沿いを車で走ってくれました。高速を走るより景色がきれいだから、ということで。コブレンツ到着し、ヘルムートは“ドイツの角(Deutsches Eck)”まで徒歩10分くらいの場所に車を駐車しました。おかげで、コブレンツ市内を散策も楽しめました。

ツアーではその場へバスで行って写真を撮って次の目的地へ、となってしまうのですが、ヘルムートのちょっとした心遣いのおかげで、一味違ったコブレンツを楽しませてもらいました。



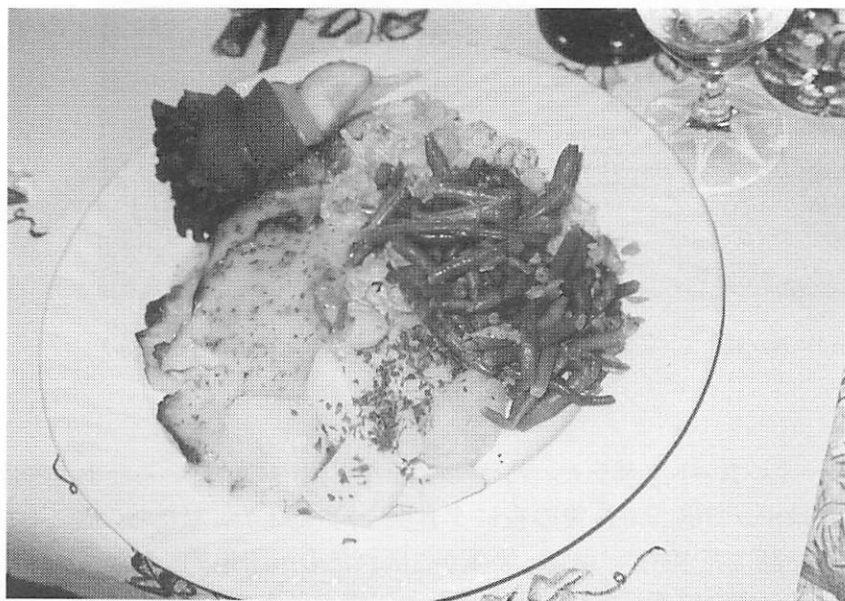
(写真⑥:9月9日(日) コブレンツ “ドイツの角(Deutsches Eck)”にて。

左から、上島教夫さん、ヘルムートシュレックさん、上島美貴子さん)

この日の天気はあまりよくなく、風も強かったのですが、私たちはウラ道を通して“城塞エーレンブライトシュタイン(Ehrenbraitstein)”にも行きました。最初に小さな舟でライン河の対岸に渡り、城塞の地下トンネルのような所をくぐり抜けて、ロープウェイで登りました。ドイツの歴史をより深く垣間見せられるようでした。“ドイツの角(Deutsches Eck)”からの景色もすがすがしいものでしたが、城塞からの眺めはまた一味違って最高でした。

モーゼルケルン (Moselkern) での昼食

私たちの計画にはなく、ヘルムートが運転中に思いつき、昼食をとるべく向かったレストランは、コブレンツからエルツ城に向かう途中、モーゼル川沿いのモーゼルケルン (Moselkern) 駅でした。この駅は無人駅で、昔、待合室として使われていた駅舎が改造されてレストランになっていました。こじんまりとした駅舎の中には暖炉があり、植物や置物の人形、ろうそく、ワインなどの装飾が施されており、その雰囲気にもまれてただけで満足しました。シェフは経営していたレストランを引退し、趣味を兼ねてこの小さなレストランを始めたそうです。



ヘルムートが「今日は何がある?」と聞いて、シェフがおすすめと言ってくれたものを頂きました。そこで食べた料理が最高においしかったことが忘れられません。ちなみに、このレストランで撮った写真は昼食の写真だけ。。。あまりに居心地が良くて写真を撮ることさえ忘れさせられていました。

(写真⑦:9月9日(日)モーゼルケルン駅レストランでの昼食。豚肉の燻製といんげん、ジャガイモ、キャベツのサラダ)

昼食後、シェフが駅舎の2階に案内してくれました。彼はそこに、モーゼルケルン周辺地域の歴史的な家具や写真、文書などを集めており、将来は博物館にするために仕事の合間を縫って少しずつ手を入れているそうです。

モーゼルケルン駅に着いた時、あまりに人気のない古びた駅なので、そんなにすてきなレストランがあるとは想像が付きませんでしたし、シェフが駅舎を博物館にしようと計画していることはまったく私の発想にはありませんでした。もう一度ドイツを旅行できるなら再び訪れたい場所のひとつになりました。博物館がどうなったか気になりますし。

エルツ城 (Burg Eltz) 見学

エルツ城自身は四方山に囲まれた盆地のような所へポツンと立てられていました。川沿いに競って建てられ、戦闘の中、占領されたり破壊されたりした歴史を持つ古城とは性格が異なるお城だということは、その地理的条件から納得できそうなものでした。エルツ城は破壊されたことがなく、外見は建設時より後の時代に付け足された異質な建築様式とのコントラストが面白く、内側は迷路のように入り組んでいました。

エルツ城自体、面白いお城でしたが、何よりエルツ城に行くまでのドライブを楽しませてもらったと思います。細くて蛇行するモーゼル川沿いはぶどう畑や民家が並び、その景色は雄大に流れるライン川沿いとは異なり、和やかでした。その両方の川沿いのドライブを楽しませてもらえて、ドライバーに感謝です。



(写真⑧:9月9日(日)エルツ城にて。左から、私、ヘルムート・シュレックさん、上島美貴子さん)

お礼の夕食会

メンヒさん、カイとヴィリー、ヘルムート達がラインラント・プファルツ州内のいろいろな土地を案内してくれたお礼に、私たちはボンで過ごす最後の夜に夕食会を持ちました。私たちの過ごした時間のいろいろなエピソードで話に花が咲き、終始、笑顔がこぼれたのが印象的でした。

その中で、ヴィリーは自分が日本を旅行した際に会った大谷焼の茶碗を持ってきて見せてくれました。8日(土)にケルンを案内してもらった時に、日本でいい茶碗に出会ったというエピソードを話してくれたのですが、私たち日本勢は大谷焼を詳しくは知らず、夕食会に持ってきて見せてくれたのでした。私たちの身近にはすばらしいものがたくさんあることに気づかずにいましたが、外国人であるヴィリーの目を通して、再確認させられました。

この夕食会は彼らと会う2回目の機会ですが、しかし既にずっと前からの友人に会ったようで、話は尽きませんでした。

◇全体の感想

ホームステイ、インターンシップを通して知合った、ボン独日協会のメンヒさん、ヘルムート、カイとヴィリーに再会する旅行は、他に2つとない特別な旅行となりました。彼らは、私たちをどこへ案内しようかと事前に下調べまでしてくれていました。それに、彼らの日本に対する興味について聞かせてもらうことはとても驚かされ、学ばされることでした。その一方で、上島さんは日本画や俳画を描かれるというので、事前に準備してもらって、ボン独日協会の案内をしてくれた皆さんにプレゼントしてもらいました。このこともこの旅行を特別なものにしたと思います。

メンヒさん、カイとヴィリー、ヘルムートはボン独日協会を通じてお互いによく知っていますが、今回の旅行で上島さんご夫婦と私も含めた共通の友人となったことを嬉しく思います。今回の出会いは最初で最後の旅行の1シーンではなく、私たちの新しい日独交流のスタートとなりました。旅行、手紙、Eメールなどを通してこのつながりを細く長く大切にしていきたいと思っています。

私が初めて出会ったドイツ人

松浦 洋三

今からもう60年も前の私が子供の頃の古い古い思い出話して恐縮ですが、ちょっと申し述べさせていただきたいと思います。もちろん戦前の事です。

私は高松市宮脇町 403 番地という所で小学生時代の12才頃迄生まれ育ちました。12才頃迄と言うのは昭和20年7月4日未明の、いわゆる高松空襲で家を焼かれてしまったからです。この時、私の幼い日々の思い出の品々は全部焼失してしまいました。当時の高松市は人口が公称12万と言われていましたが疎開などして実質10万人足らずぐらいたったようです。こんな小都市にB-29爆撃機が100機余りも飛来して2・3時間で焼け野原にしてしまいました。酷いものでした。

焼ける前の我が家の所在地は、現在は近辺の様相が変わっていますが、香川大学経済学部のすぐ東側の道路をほんの少し入った所です。もう少し正確に言いますと経済学部の正門がある北の端から敷地に沿って南のバス通りに至るちょうど中程に、今はありませんが当時は東通用門と呼ばれる門がありました。私の家はその前を少し東に入った所でした。家からその門までほんの50m位でしたでしょうか。

現在の香川大学経済学部は戦前は「高松高等商業学校」と言い、全国各地から応募される名門校でした。通称「高商（こうしょう）」と呼ばれて学校の近辺の人からも親しまれていました。そして今と違って校内に近所の人たちなども自由に出入りしていました。私たち近所の子供の遊び場所はいつも「高商」の校庭や広いグラウンドでした。空襲の時はそのグラウンドに避難しました。そして「高商」の校舎が次々と火に包まれるのを目のあたりにしました。

東通用門に入って右手前方には入学や卒業の式典を行なう講堂があり、その正面には大きなソテツの木があり、赤い実がなっていたのを記憶しています。そして通用門から右に正門迄の道路に沿った敷地内には八重桜の並木があり毎年きれいな花を咲かせていました。また一方左手の奥には木造二階建ての学生寮があり、寮に沿って西奥のグラウンドに通ずる道にはお茶の木の生け垣があり、その時期時期には白い花が咲き凸凹した種子が実っていました。これらはすべて空襲で焼失しました。

このように色々な木々が沢山植えられている校庭は私たち近所の子供の格好の遊び場所でした。私たちは学校から帰るとカバンを放り出して「高商」に遊びに行くのを日課にしていました。そんなある日、校庭を一人で散歩されている外人さんに会いました。その方は「オット・カーロ先生」と言うドイツ人で「高商」のドイツ語の先生だと言うことを後で聞いて知りましたが、私が生まれて初めて出会った西洋人でした。どんな風貌をしていたとか、どんな身なりをしていたとか具体的な記憶は今は全くありません。ただ子供の目から見るその外人さんはずいぶん大きな男の人という印象でした。そうですね、それがいつの頃だったか今となってははっきりとした記憶はありませんが、確か昭和17・18年頃でなかったかと思います。ただはっきりしている事は戦争中だったと言うことです。なぜならば当時外人教師として学校におられたのは日本と同盟を結んでいた国であるドイツ人だけだったからです。

そしてまたある日、私たちが校庭でいつものように遊んでいる時、今度は西洋人の男の子に出会いました。これも後で知ったことですが「ルドルフちゃん」というカーロ先生のお子さんでした。西洋人は子供でも大きいので正確には解りませんが5～6才ぐらいだったと思います。多分お父さんと一緒に学校に来て先生がお仕事をしている間、一人で遊んでいたのでしょうか。この時は同じ子供なので近くに寄ってじっくりと見ました。何しろ高松という田舎都市で西洋人などを見るのは当時としては非常に珍しいことでしたから。「ルドルフちゃん」はずいぶん立派な服装をしていました。ブレーザ・コートというのでしょうか、背広のような上着を着ていて「すね」がでる半ズボンにソックスをはいていました。何よりも私の目に焼き付き今も強く印象に残っているのは彼の足元でした。足首まで包まれたピカピカと黒光りする立派な革靴を履いて遊んでいたのです。

「ドイツの子供はこんな立派な革靴を履いている」私は驚きました。

それは私の子供ながらに一種のカルチャー・ショックと言うものでした。当時高松の私たち子供の履物は下駄か草履かが普通でした。少しましな履物と言えば古びて爪先に穴のあいたズックの運動靴でしたから。とにかくその頃の日本は戦争最中で、もうゴム靴など売っていなかったと思います。ゴムは重要な軍需物資でしたから。

「でも、ドイツも戦争をしているというのにー？」

その後1・2回「ルドルフちゃん」に会ったように思います。私たちは「ルドルフ」と言う彼の名前が発音しにくいので「ゆどうふ（湯豆腐）ちゃん」と言っていました。言葉も解らず親しく共に遊んだことは残念ながら一度もありませんでした。いつも彼の一人遊びをこちらの遊びを中断して、物珍しくしばし眺めているだけでした。そしてそのうち、彼はいつの日にか二度と私たちの前に姿を現わすことはありませんでした。ドイツも戦争が激しくなり帰国されたのでしょうか。それとも学齢期になって母国の学校へ通うために帰国されたのでしょうか。利発そうな可愛いお子さんでした。カーロ先生ご一家は学校の近くにあった「高商外国大官舎」にお住まいでした。その場所は現在で言うと香大法学部正門の西斜め前あたりです。そこに戦前は急勾配の赤い屋根のある2階建て洋風住宅が何棟か建っていました。

あれから60年近くも月日が過ぎました。カーロ先生はお元気でしょうか。もう60年も経っているからお亡くなりになっていらっしゃるかも知れません。そしてまたルドルフちゃんもお元気でしょうか。もう彼も60才を幾つか超えて私どもと同じような老境に入っていることでしょう。

近年ドイツへ初めて旅した時、私はルドルフちゃんの住んでいる国に来たと言う子供の頃の淡い思い出と懐かしみを覚えました。私はカーロ先生のご出身はドイツのどこか知りません。でもドイツのどこかで昔の愛らしいルドルフちゃんは元気に生活しておられる事でしょう。「遠くあなたの健康と幸せを祈っている日本の一老人がここにいます。」私は少し感傷的になりました。あなたは60年も前に高商の校庭で出会った日本の子供の事など覚えていないでしょう。でも少なくともあなたが幼い時に日本の高松という土地にしばし住んでいたという記憶はあるに違いないと思います。

だれもが私のように初めての外国人との出会いがきっかけとなり、例えばアメリカ人であればアメリカという国に親しみを覚えるだろうし、その他の国にしても同様な感情を抱く事でしょう。私の場合はたまたまドイツ人に最初に出会ったと言うほんのちょっとした事ですが何となくドイツに今なお親しみを覚えるのです。不思議なことです。 おわり。

ドイツからユーロで厚生年金が貰える

加藤元規

社会保障に関する日・独の相互協定で、この1月1日から思わぬ年金が入ることになりました。日本がドイツの社会保険制度を参考にしたこともあって日独は大変よく似た年金制度となっています。

このため日本としては条約が結びやすかったと社会事務所で聞きました。世界でドイツ以外の国との協定は、現在ではまだ何処とも締結されていません。

1月から毎月25日頃にドイツ郵便 AG の年金サービスからユーロ建てで銀行口座へ送金されて来ます。額は小使い程度ですが大変喜んでます。ドイツ語をやっている良かったというのが今の実感です。

この年金はドイツで5年以上年金を納めていた人が対象です。昨年12月で満65才になったのを機に、老齢厚生年金者 *Regelaltersrente* となりドイツの公的な動物園・博物館・スポーツ施設や公的な交通機関等で使える *Rentnerausweis* を戴きました。日本の年金者優待証に相当するものです。

何時のことになるか分かりませんが、次のドイツ旅行でこれを使ってみるのを今から楽しみにしています。ドイツの友人達も年金者の仲間入りを歓迎すると言ってくれています。友達というより、老後の友が一人増えたという感じなのでしょう。

日本ではお前も、とうとう年になったかと同情の念を出し、精々ご苦労さんというところが、ドイツではおめでとう仲間入り歓迎といわれると日独文化の風土の違いを感じざるをえません。年金を楽しみにしている国民性が滲み出ています。

申請でいろいろな証明証が必要でしたが、中でも異色なのは10才の時あなたの居住していた場所を証明しなさいというのがありました。これには少々驚きました、日本では卒業証明書は出ても、かような証明証は発行してくれません。

要は国籍に変更が無かったかの証拠立てに出生時、10才、高校・大学卒業証書が必要だったのでしょう。その上、仕事についていた関係もあり、給与証明等を送ることもなりました。こんな事情で *Rentenbescheid* が届いたときは感激もひとしおでした。



地域を元気にする応援団

—— 共に歩むふれ愛サークル ——

「共に歩むふれ愛サークル」の活動は、平成11年12月3日にスタートしました。

行政や各団体と共にその地域の特産品を使って商品を開発するなど、地域の活性化と発展を支援しています。

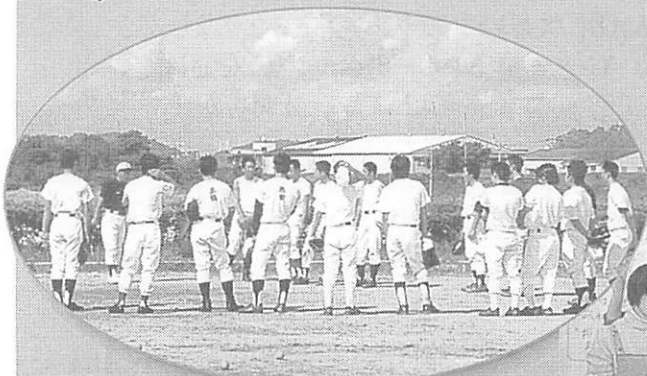
また、福祉、文化、スポーツ、国際交流などさまざまな分野での交流活動も行っており、昨年から丸亀硬式野球愛好会などと協力して開催している「中学3年生硬式野球交流教室」には、毎回多くの中学生が参加し、野球を通して地域や学校を越えて交流を深めています。

丸亀市から始まったこの活動も、今では県内各地に支援センターや友の会などができるほどに広がりを見せています。

▶共に歩むふれ愛サークル鶴足津友の会「夢愛す」のデザインシール研究会で意見を交わす会員



▲サンポート高松オープニングフェスティバルに出展の詫間町企業ボランティアの応援



▲中学3年生硬式野球交流教室練習風景

国際クッキングでの1コマ▶



この情報誌は共同募金の配分金で発行されています。

21世紀に 駆けるトップ

県下全域に広がる夢アイスネットワーク ボランティア活動にひたむきな情熱

(有) 笠井 強 氏
代表取締役
(丸亀市川西町北669)



「このアイスが皆さんにこれほど支持され喜んで頂けるとは、当時は夢にも思わなかったですし、やりがいがあります」と、屈託のない笑顔が返ってきた。

3年前丸亀で始まった民間ボランティア活動の輪が、今では行政を巻き込んで全県下に広がりを見せている。

事の発端は、平成11年に丸亀市制百周年の際に、何か特産品を作ろうと、笠井さんらボランティア仲間が思いついたのが、丸亀の市木である山桃をベースにしたアイスクリームであった。「さぬき夢アイス」と命

名されたこのアイスの存在は、瞬く間に各市町に知れ渡ることになり、あんず、しょう油豆、米、お茶、梅、梨、黒米、さつまいも、藻塩等と次から次へと新商品が誕生していく。

さらに県内各地のイベント開催にあたっては、アイス店の出店要請が引きも切らない状況が続いており、笠井さんは準備や打ち合わせに奔走する日々が多くなった。

「夢アイスを通して多くの人と知り合い、交流の輪が広がったことで、歴史・文化を含めた香川の素晴らしさを再発見できました」

現在加入しているボランティアサ

ークルの名称は、「共に歩むふれ愛サークル&丸亀支援センター」で、笠井さんは現在代表を務めている。

アイス以外にも多彩な活動を行っているが、スポーツ交流の一つが県下の中学3年生を対象とした硬式野球交流教室の開催である。

自ら高校時代野球部に所属していただけに、硬式ボールの扱いはおてのもので、ユニフォーム姿で熱心に子どもたちを指導する。

「今も県内の高校で活躍している多くの生徒を知っていますよ。」と目を輝かす。「今日の私を支えているのも過去野球で培った精神力ですし、それ以外ありません。野球は素晴らしいですよ。」

本業は、うちわや四国霊場八十八カ所関連グッズの企画販売と不動産賃貸であるが、クリエイティブな発想力のある笠井さんは、ユニークなグッズを商品化してきた。

闊達な性分ゆえに、多くの仲間から信頼されており、様々な異業種交流の場にも精力的に顔を出す。

さぬき夢アイスを県内の代表的な特産品に育て上げたいというのが、笠井さんの夢であり、それも現実のものになりつつある。ボランティア活動にひたむきに情熱を傾ける姿に、生きる証を見た。51歳の努力家。

『香川経済レポート』

2002年2月5日号 (No.723)

20頁掲載記事より



第2回ビッグ・エス全国ドイツ語スピーチコンテスト
(2001 年 8 月)



ドイツ オーバーハウゼン国際平和村
(2001 年 11 月)

第2回

Big-S 2. Deutsch - Redewettbewerb!!

ビッグ・エス 全国ドイツ語スピーチコンテスト

主催 株式会社 ビッグ・エス

協賛 Lufthansa ルフトハンザドイツ航空会社

後援 大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館/オーストリア大使館/マインツ大学/独日文化交流育英会/関西国際ドイツ文化センター/バスニックドイツ/日本カール・デュイスベルク協会/ドイツ観光局/在日ドイツ商工会議所/ドイツ農産物販促会 (DMG)/財団法人日独協会/ドイツワイン基金駐日代表部/財団法人高松市国際交流協会/香川日独協会/香川第九合唱団/エスシー企画/四国新聞社/西日本放送/瀬戸内海放送/岡山放送/徳島新聞社/四国放送

＝第2回全国ドイツ語スピーチコンテスト＝

本選には18名が参加し日頃の成果を発表
最優秀賞の大学生二人がドイツ旅行を獲得

ビッグ・エス主催

酒・家電等小売の株ビッグ・エス (高松市春日町一六二一) 大坂 靖彦社長) の主催により、8月16日 (木) アイバル香川にて「第2回全国ドイツ語スピーチコンテスト」(ルフトハンザドイツ航空公社協賛) が開催された。



に分かれて白熱した戦いが繰り広げられた。
参加資格は、日本に住み、両親共にドイツ語を母国語としない人で、海外在住経験が合計、ヶ月以内の人。つまりコッコとドイツ語やドイツ語の歌を勉強している人に対し、日頃の成果を試せる場を提供している点にこのコンテストの大きな特徴がある。

出場者は学生を中心に主婦、OLなど幅広く、小道具や歌を用意したり、ドイツに対する思いやドイツとの関わりなどについて身振り手振りを交えて熱く語っていた。
大坂社長も「昨年の出場者が実際にドイツに留学するなど、私どもの取り組みがドイツとの交流に少なからず役立っていることを嬉しく思っている。今後も地道に努力している方々の成果を発表する場として、毎年継続的に行っていきたい」と徐々に手応えを感じている様子。

昨年同様、各部門の最優秀賞として「手作りドイツワインの旅」が用意されており、審査の結果、幸せなハンスを朗読した川鍋佳子さんと、「ドイツ民謡の世界」と題して創作スピーチを披露した満洲悠理さん(ともに大学生)が見事栄冠を勝ち取った。
その他敢闘賞やユニーク賞が表彰された。

なお今回訪問するもう一つの目的として、同社の各店舗で昨年末から行っていたオーバーハウゼン国際平和村への募金の贈呈式を行うことになっている。目標金額の百万円にあたり、歩道で迫っており、来店客や取引先、社員から寄せられた浄財が、一つの大きな形となって戦災で苦しむ子供たちに贈られることになる。このコンテストを通じて、参加者のドイツに対する熱い思いに感動したと同時に、同社の社会貢献・国際交流にける情熱は随分と目に見えるものであることを実感した。

香川経済レポート 2001年8月25日(No.709)版

28ページ掲載記事より抜粋

第2回 ビッグ・エス

2001年8月16日開催

全国ドイツ語スピーチコンテスト

Big-S 2.Deutsch-Redewettbewerb!!

ご好評をいただきました第1回「全国ドイツ語スピーチコンテスト」に引き続き、私たち株式会社ビッグ・エスは、日頃お世話になっている地域社会への貢献活動や国際交流の一助として、またオリジナルワインを皆様にご愛飲いただいていることへの感謝もふまえて、当社の特徴を生かした形で「第2回 全国ドイツ語スピーチコンテスト」を開催いたします。
ドイツやドイツ語又はドイツワインが大好きで日頃コップとドイツ語やドイツ語の歌を勉強しているけれど、その成果を発表する場がなくてやきもきしている人に朗報です！
あなたの想いや経験を是非聞かせてください。(ドイツ語で!)
又、高校生やドイツ語の勉強を始めたばかりの人の為に朗読の部もあります。是非チャレンジしてください。

募集及び開催要項

参加者大募集!!

初心者の方には、朗読の部もあります。

参加資格

日本に生み、両親共にドイツ語を母国語としない人で、高校生以上、海外在住経験合計一ヶ月以内の人。

開催日時

2001年8月16日(木)13:00~(開場12:30)

アイバル香川 香川国際交流会館 3F大会議室(一般公開、入場無料)

住所: 香川県高松市市場1丁目11番63号 TEL:087-837-5901

会場までの交通費は各自負担となりますのでご了承ください。

交通のご案内: 高松駅より徒歩約20分/バス約5分(五番町または県庁北通下車)

●駐車場: 高松駅より徒歩約10分/バス約5分(五番町下車)

コンテスト

朗読の部

A. ブレーメンの音楽家 (Die Bremer Stadtmusikanten)

B. 幸せなハンス (Hans im Glück)

C. Gibt's doch gar nicht (Isst Was)

上記の3つの題材の中から一つを選びそれを朗読する。(朗読時間は3分とします。)

創作の部

3分以内の自作ドイツ語朗読稿(テーマはドイツ語・ドイツやドイツワインに関すること又は、自分の人生設計、過去・現在・未来とドイツとの関わり等、未発表のもの)を発表する。(表現方法自由におもしろおかしく表現してください)

※朗読の部、または創作の部どちらか一方に参加

※コンテスト終了後、参加者、ドイツ人教職員、スタッフ等でミニパーティーを予定しております。(コンテスト終了予定時刻16:00、ミニパーティー終了予定時刻18:00)

応募方法

題材につきましては、下記ホームページまたは電話にてご確認ください。

朗読の部: 題材テキストを郵送またはe-mailでお送りしますので下記お申し込み窓口までご連絡下さい。
創作の部: 3分以内の自作ドイツ語朗読稿(テーマはドイツ語・ドイツやドイツワインに関すること又は、自分の人生設計、過去・現在・未来とドイツとの関わり等、未発表のもの)をA4用紙にドイツ語と日本語でタイプ又は手書きし、ドイツ語のスピーチをテーマに練習したものも添えて、住所、氏名(フリガナ)、電話番号、生年月日、職業及びドイツ留学経験、通称を明記して、下記申込先までお送りください。
※応募者が規定数を超える場合は原稿及びテープにてプレ・コンテストを実施します。

表彰

厳正なる審査の上、入賞者を決定し主催者から各入賞者にカップと賞状と副賞を用意します。また上位入賞者2名の方に賞状と副賞の手作りドイツワインの瓶にご招待します。(ビッグ・エスワインを仕入れている農家にホームステイし、ウェルカムパーティーや葡萄の樹の世話や伝統的工場見学、ハイデルベルグ城の見学、ライン川下りなど盛りだくさんの内容を用意!)

(副賞の旅行は体力が旅行に耐えられる事を前提とします。条件に外れる方は他の副賞を用意いたします。)

その他の入賞者には、それぞれ金一封(商品券)等が贈られます。又、コンテスト本選出場者全員にビッグ・エスオリジナルドイツワインを贈呈致します。(未成年者の場合、他の副賞をご用意します)

※審査は審査員だけでなく、創作能力や演出およびスピーチ内容などを加味し厳密に審査を行います。

参加申込締切日

2001年7月31日(火)必着

資料提出締切日

2001年8月6日(月)必着

申込先/お問い合わせ窓口

〒761-0701 香川県高松市春日町1627-1

TEL:087-843-7711 FAX:087-843-7761

HPアドレス: <http://www.big-s.co.jp>

e-mail: info@big-s.co.jp

株式会社 ビッグ・エス 「全国ドイツ語スピーチコンテスト」実行委員会 担当: 大坂 純子/ 原本 誠志

Big-S 2.Deutsch -Redewettbewerb!!

Als Beitrag zum hiesigen Gesellschaftsleben und internationalen Austausch, sowie zum Dank für alle, die unseren original Deutschen Wein trinken, veranstaltet die Big-S AG dieses Jahr den 2. Deutschen Redewettbewerb.
"Big-S 2. Redewettbewerb in deutscher Sprache".
Wer Deutschland, die deutsche Sprache oder deutschen Wein liebt und schon immer seine Lernergebnisse unter Beweis stellen wollte, fühle sich hier angesprochen!!
Für Schüler und absolute Anfänger gibt es einen Lesewettbewerb. Dabei sein ist alles!!



Am Donnerstag, den 16. August

2001, 13:00 Uhr

I. Lesewettbewerb:

- A. Die Bremer Stadtmusikanten
 - B. Hans im Glück
 - C. Gibt's doch gar nicht
- 3 Minuten aus A, B oder C.

II. Redewettbewerb:

3-minütiger, selbstverfaßter und noch unveröffentlichter Text über Deutschland, die deutsche Sprache, deutsche Sache oder deutschen Wein

Preise: Alle Gewinner erhalten einen Pokal sowie eine Urkunde.

Die Gewinner des 2. Preises werden zu einer Wein-Reise nach Deutschland eingeladen. Alle weiteren Gewinner erhalten einen Warengutschein.

Information:

Big-S, 1627-1
Kasuga-cho, Takamatsu-shi,
Kagawa-ken
Tel: 087-843-7711
Fax: 087-843-7761
HP-Adresse:
<http://www.big-s.co.jp>
e-mail: info@big-s.co.jp

主催: 株式会社 ビッグ・エス

協賛: ケーステンキ

協賛: ビッグ・エス

協賛: PC DEPOT

協賛: Lufthansa ルフトハンザドイツ航空会社

後援: 大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館/オーストリア大使館/マインツ大学/独日文化交流育英会/GOETHE INSTITUT 関西ドイツ文化センター / パナソニックドイツ/日本カール・デュイスベルク協会/ドイツ観光局/在日ドイツ商工会議所/ドイツ農産物振興会(CMA)/ 財団法人高松市国際交流協会/香川日独協会/香川第九合唱団/エスシー企画/四国新聞/西日本放送/瀬戸内海放送/岡山放送/徳島新聞/四国放送

Veranstalter: Big-S AG

Unterstützt von: Lufthansa/Generalkonsulat der BRD in Kobe-Osaka/Österreichische Botschafter/Universität Mainz/Studienwerk für Deutsch-Japanischen Kulturaustausch in nrw e.v./Goethe Institut/Kansai/Panasonic Deutschland GmbH/Carl-Duisberg-Gesellschaft Japan/Deutsche Zentrale für Tourismus e.v./Deutsche Industrie und Handelskammer in Japan/CMA/Japanisch-Deutsche Gesellschaft Kagawa/Kagawa 9.Symphonie(Chor)/etc.

平成 14 年 2 月 吉日

ドイツ オーバーハウゼン国際平和村に募金贈呈

株式会社 **ビッグ・エス** ではドイツ語の全国スピーチコンテストを毎年実施している。昨年の 8 月に第 2 回目を開催し、約 45 名の出場者が高松に集まった。11 月末にはこのコンテストの優勝者とドイツへ行き、併せてオーバーハウゼンの国際平和村を訪れた。

一昨年訪問して、あまりの悲惨さに驚いた。この平和村にはアフガニスタンやアンゴラを中心にアフリカや中近東・アジアなど、戦争や紛争の災禍により頭部や手足を損傷した 14 歳以下の子供達が現在 150 名いる。国際的なボランティア活動としてスタッフが治療とリハビリをしていたが、子供達の痛々しさは目を覆うばかりであった。治療やリハビリの終わった子供は母国に帰るが、半分の子供達にはすでに両親がいないのである。それでも母国に帰りたいという・・・。

帰国後、社員と相談して各店舗での募金活動を始めた。「子供達の為に何かしたい」という私の気持ちが全社員の気持ちとなったからだ。その募金額 100 万円を持って、コンテスト優勝者と訪れたというわけである。

当日はデュッセルドルフ日本人学校の小学生も訪れ贈呈式に参加してもらった。小学生達に同じ年齢層のこの子供達と交流してもらい、戦争のない国にいる事がいかに幸せかを話した。

現在日本は深刻な不況下にある。平和村を訪れた人はみな日本の平和に安堵する。しかし平和な日本がこういった子供達に何をしているのであろうか？ここには不況以前の生命の危機、人間としての尊厳の危機があるのである。子供達に「私たちは生まれてこなければよかった」と言わせないようにこれからも 1 灯を掲げたい。

お問い合わせ窓口：

株式会社 **ビッグ・エス**

香川県高松市春日町 1627-1

tel087-843-7711/fax087-843-7761

代表取締役 大坂 靖彦

(香川県日独協会副会長)

ケースデンキ **ビッグ・エス** はドイツ国際平和村を応援します。

子ども達に言ってほしい…
『**生まれてきて良かった**』と。
戦災で負傷した子供たちを、私たちは全力で支援します。



**FRIEDENSDORF
INTERNATIONAL**

■この国々の子供たちを救います。

アフガニスタン [Afghanistan]	ユーゴスラビア [Yugoslavia]	セネガル [Senegal]
アルバニア [Albania]	カザフスタン [Kazakhstan]	セルビア [Serbia]
アンゴラ [Angola]	レバノン [Lebanon]	ソマリア [Somalia]
アルメニア [Armenia]	リビア [Libya]	スーダン [Sudan]
アゼルバイジャン [Azerbaijan]	リトアニア [Lithuania]	タジキスタン [Tajikistan]
ボスニア [Bosnia]	モーリタニア [Mauritania]	トルコ [Turkey]
カンボジア [Cambodia]	モルドバ [Moldova]	トーゴ [Togo]
クロアチア [Croatia]	ニカラグア [Nicaragua]	ウガンダ [Uganda]
エチオピア [Ethiopia]	パキスタン [Pakistan]	ウクライナ [Ukraine]
ガーナ [Ghana]	パレスチナ [Palestine]	ベトナム [Vietnam]
ハイチ [Haiti]	ペルー [Peru]	
イラク [Iraq]	ポーランド [Poland]	
イスラエル [Israel]	ルーマニア [Romania]	
ジャマイカ [Jamaica]	ロシア [Russia]	

ビッグ・エス、ケースデンキでは来店されるお客様につり銭の中から「1円」、募金箱への投入をお願いしています。皆様にとって『わずか1円』『たった1円』でも、私たちのお店に訪れる年間140万人のお客様の7割の方がご協力いただきますと、100万円になります。

そのお金で、被災を受けた自分の国では生き残れない状態の子ども達を治療し、リハビリしていますドイツのオーバーハウゼン国際平和村を支援できます。

この国際平和村は、アンゴラやユーゴスラビアなど 数10カ国から集まった被災児童を治療しているボランティア活動組織です。

私たちは小さな企業ですが、この大きな取り組みに全力をあげます。社員やその家族はもちろん、関連企業やお取引先様にもお願いしております。

たとえ結果的に不自由な身体になったとしても、子ども達に「生まれてきて良かった」と言ってほしいのです。

皆様の温かいご理解とご支援をお願い申し上げます。

(株)ビッグ・エス
社員一同



募金箱はビッグ・エス、ケースデンキに備えてあります。

募集期間◆平成12年12月より平成13年8月まで

目標金額◆100万円

贈呈式◆平成13年秋

ドイツ・オーバーハウゼン国際平和村にて行う予定。

ENGLISH

Big S. K's Denki is pleased to announce that we are starting to support children suffering from tragic wars in countries around the world.

Friedensdorf International, children victimized by war from all over the world, such as Angola, live together and are fighting against illnesses and injuries. Some of them are injured by mines, and are left without any treatment given.

We want to help those children who are bravely fighting against hardship with their hope and dreams. Only one yen from each of our 1.4 million yen a year and can save many children.

We greatly appreciate that you generously support our program and those children with your contribution in a box you find in the store.

DEUTSCH

Wir wollen dem Friedensdorf International in Deutschland helfen, wo Kinder aus aller Welt behandelt werden, die bei Kriegen in ihren Heimatländern schwer verletzt worden sind.

Wir bitten alle Kunden des Big-S und des K's Denki, einen Yen aus dem Wechselgeld in die Spendenbox zu tun. Aus diesem Yen wird in einem Jahr mehr als eine Million Yen.

Ihr Yen hilft kranken Kindern und gibt ihnen Hoffnung für die Zukunft.

Mit dieser Aktion möchten wir den Kindern neuen Lebensmut geben.

Wir danken von Herzen.

中国語

我们全力以赴地支援德国国际和平村，在那里收留着来自世界各地的遭受战争灾难的孩子们。恳切期待每个光临我们BIG'S/K'S电器各店的客人们，从您找回的零钱中拿出1个日元放在募捐箱里。尽管只有微不足道的1个日元，但是一年的累计额就会超过100万日元了。请用您的1个日元来帮助那些可怜的孩子，并将希望带给他们吧。

但愿这些孩子们会从内心感到“能够来到这个世界上真是太幸运了！”

ドイツ国際平和村と今回の募金活動につきましては、以下のホームページをぜひご覧ください。

<http://www.big-s.co.jp>

国境を越えた、私たちの募金で彼らを救えます。ドイツ国際平和村支援計画にご協力お願い致します。

株式会社ビッグ・エス 〒761-0101 香川県高松市春日町1627-1 TEL.087-843-7711 FAX.087-843-7761 E-mail info@big-s.co.jp

後援/大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館、Lufthansa、独日文化交流育英会、GOETHE-INSTITUT (関西ドイツ文化センター)、パナソニックドイツ、独日本カール・デュイスベルグ協会、ドイツ観光局、香川日独協会、四国新聞社、徳島新聞社、西日本放送、DEUTSCHE WELLE ジェップジャパン

WESTDEUTSCHE ALLGEMEINE

Die Zeitung des Ruhrgebiets

WAZ

Unabhängig – Überparteilich

www.waz.de Nummer 277 / 48. Woche

Deutschlands größte Regionalzeitung

1

Dienstag, 27. November 2001



Eine riesige Summe überreichte Yasuhiko Osaka (hinten, 2.v.l.) an Friedensdorf-Mitarbeiter Wolfgang Mertens (hinten, Mitte): Eine Million Yen sind 17 000 Mark für die kleinen Patienten. WAZ-Bild: Heeger

Eine Million Yen für Friedensdorf-Kinder

Japanischer Geschäftsmann startet Spenden-Aktion

Um die halbe Welt ist Yasuhiko Osaka gereist, um zum Friedensdorf zu kommen. Der japanische Geschäftsmann hatte ein großes Ziel: Er wollte mit Hilfe seiner Mitarbeiter und Kunden eine Million Yen für die Kinder im „Dorf“ zusammentragen.

Den großen Batzen dieses ehrgeizigen Spendenziels überreichte Yasuhiko Osaka gestern im Friedensdorf an der Pfeilstraße.

Wie aber kommt ein japanischer Geschäftsmann auf die Idee, das Friedensdorf zu unterstützen? „Ich habe die Filme über die Einrichtung im Fernse-

hen gesehen. Als ich auch das Buch übers Friedensdorf gelesen habe, musste ich weinen“, erklärt der Leiter einer Kette von Elektro- und Getränkemärkten auf Shikoku in Japan. Im Frühjahr 2000 besuchte er mit seiner Ehefrau zum ersten Mal die Einrichtung Am Brink: „Als ich sah, wie die Leute hier leben, habe ich mich entschieden, dass ich auch dafür was machen soll.“

Die Firma hat zurzeit 14 Läden, pro Jahr kommen rund 1,7 Mio Kunden in die Geschäfte: „Wenn 60 % einen Yen spenden, sind es insgesamt eine Million Yen, habe ich ausgerechnet. Die Angestellten und Kin-

der haben sich auch dafür engagiert, den gewünschten Betrag zu erreichen“, erzählt der Gast aus Japan. Nun steht bei jedem Geschäftsgespräch in der Firma eine Spendendose auf dem Tisch, ein Teil der Umsätze der aus Deutschland importierten Weine wurde gespendet, an jeder Ladenkasse stehen Spendenkästen. So wurde das erste Ziel von einer Million Yen, das sind 17 000 Mark, erreicht – und es wird weiter gehen.

Yasuhiko Osaka brachte zwei Preisträger eines ungewöhnlichen Wettbewerbes mit nach Oberhausen: Sie hatten bei einem Deutsch-Rede-Wettbewerb der Firma gewonnen.

Allgemeine Zeitung

Landskrone

Nr. 280 / 151. Jahrgang

RHEIN MAIN PRESSE

Samstag, 1. Dezember 2001

„Jasuschko“ gehört fast zur Familie

Student von einst ist heute Unternehmer und verkauft Wein aus Rheinhessen

SCHWABSBURG/UNDENHEIM/ALSHEIM - Wenn Yasuhiko zu Besuch kommt, ist die ganze Familie da. Was vor fast 40 Jahren mit einer Brieffreundschaft begann, hat tiefe Wurzeln geschlagen: Der Japaner verkauft nicht nur den Wein der rheinhessischen Familie in seiner Supermarktkette, sondern hat in der Provinz Kagawa auch eine deutsch-japanische Gesellschaft gegründet.

Von unserem
Redaktionsmitglied
Christine Bausch

Ein Taxifahrer klopft an das Küchenfenster des Undenheimer Weingutes. Ob sein japanischer Fahrgast hier richtig ist? Er wird freundlich aufgenommen – auch wenn er seinen Besuch nicht angekündigt hat. Yasuhiko ist der Brieffreund der ältesten Tochter Ortrud. Mit dem Zug ist der Student durch die Sowjetunion gefahren, will in einem Jahr 28 europäische Länder sehen. Drei Monate verbringt er in Undenheim. Das war 1964.

Dieter Schilling besorgte dem Gast eine Aufenthaltsgenehmigung, Lehrer Christian Dittewig nahm ihn jeden Tag mit in die Volksschule. Schnell gehörte „Jasuschko“, wie die fünf Geschwister den Japaner auf Rheinhessisch nennen, zur Familie. „Er hatte einen Fotoapparat mit Selbstauslöser, der auf drei Füßen stand“, erinnert sich Ingild Huff, jüngste Tochter der Familie, in deren Haus Yasuhiko Osaka diesmal zu Gast ist. Damit habe er seine Freunde und sich selbst im Bild festgehalten. „Damit nur ja kein Foto verschwendet wurde, mussten Trockenübungen durchgeführt werden, bis endlich alles klappte“, erinnert sich die Schwabsburgerin. „Er hatte auch ein Tonbandgerät und nahm meinen Gesang auf, weil ich damals noch auf eine Karriere als Schlagersängerin



Seit Jahren gern gesehene Gäste in Rheinhessen: Yasuhiko und Yoko Osaka (Mitte), diesmal in Begleitung von Juri Misobuchi und Keiko Kawanabe. Vor fast 40 Jahren hatte Elfriede Schilling (rechts) den Brieffreund ihrer Tochter in ihrem Haus aufgenommen. Bild: hzb/Torsten Zimmermann

hinarbeitete.“ Bis heute könne Yasuhiko den Text von Peggy Marchs „Mit 17 hat man noch Träume“ auswendig.

Seine Träume hat sich Yasuhiko Osaka längst erfüllt. Zurück in Japan, gründete er eine eigene Firma. Heute betreibt er 15 Einkaufsmärkte für Computer und Elektronik, Lebensmittel und Spirituosen sowie 100-Yen-Waren. Nachdem die Freunde eine Zeitlang weniger voneinander gehört hatten, stand „Jasuschko“ vor zehn Jahren wieder vor der Tür und verkündete, er wolle rheinhessischen Wein in sein Sortiment aufnehmen. Drei Töchter der Familie Schilling haben in Winzerbetriebe eingeheiratet. Inzwischen schicken die Weingüter Petershof in

Schwabsburg, Sparrmühle in Undenheim und Peter Balzhäuser in Alsheim jedes Jahr zwei Kühlcontainer auf den Weg. Zwischen japanischen Schriftzeichen in den Werbeprospekten sind Fotos der Erzeuger abgedruckt. „Die Japaner mögen eher liebliche Sorten“, berichtet Peter Balzhäuser. „Und sie wollen die traditionellen braunen Flaschen.“

Weil er als junger Student in Deutschland freundlich aufgenommen wurde, engagierte sich Yasuhiko Osaka heute selbst für Studenten, organisiert Sprachwettbewerbe, ermöglicht jungen Leuten Reisen nach Deutschland. In diesem Jahr begleiten ihn und seine Frau Yoko zwei Studentinnen aus Tokio und Osaka, Juri Mi-

sobuchi und Keiko Kawanabe. Auch die beiden Töchter der Osakas waren jeweils ein halbes Jahr in Alsheim zu Gast, lernten Deutsch am Mannheimer Goetheinstitut. „Unsere Familie besteht sozusagen aus Deutschlandfans“, sagt Osaka.

Diesmal hat er noch eine weitere Mission. Im Gepäck hat er einen Scheck über 18000 Mark für die Organisation Friedensdorf International, die in Oberhausen Kinder aus den Krisengebieten der Welt betreut, die im Krieg oder durch Minen verletzt wurden. In jedem seiner Geschäfte stehen Sparschweine an den Kassen. „Ein Yen ist sehr wenig“, sagt Osaka. „Aber wenn jeder Kunde nur einen Yen einwirft, sind das im Jahr 1,7 Millionen.“

ドイツワインの樹

あなただけのドイツワインの樹のオーナーになりませんか?

Möchten Sie nicht Besitzer eines eigenen Weinstocks in Deutschland werden?

収穫後、あなたの樹のワインをお届けします。

Wir liefern Ihnen nach der Ernte den Wein ihres eigenen Weinstocks.

年会費

1口 10,000円(税込)



ベータ・バルツホイサ
Peter Balzhauser



ヴェルナ・マンツ
Werner Manz



カール・ペータ・フーフ
Karl-Peter Huf

ドイツワイン 3人の作り手たち!!

Die drei deutschen Winzer

次々金賞ワインを生み出す、まさにドイツワインのマイスター。

きらめく3家の人達!

その歴史の中で代々語り受け継がれたワイン造りの技をこ

期待ください!!



1998/99ドイツワインクイーン
ズザンネ・ヴォルカーさん

ドイツ有数のワイン産地ファルツ地方のワイン農家3家(マンツ家、フーフ家、バルツホイザー家)のぶどうの樹3本分のオーナーを毎年限定で募集しています。

樹の成長と収穫を楽しみ、自分だけのワインを味わってみませんか？
ドイツはワインを造る国の中で最も北の北緯50度圏に位置する
国でライン川に沿って産地が集中しています。

その中でも、ラインヘッセンに次ぐ作付面積を持つファルツは、ワイン造りに適した土地と理想的な気候を有し、白ワインの中でも特に厚みがあり個性的なワインを造れることで有名です。

会員様に香り高い美味しいワインをお届けしようということで、この企画が始まりました。

Jeder Personen können jeweils einen Weinstock von drei verschiedenen Weingütern in der Pfalz, einem bekannten Weinanbaugebiet Deutschlands, erwerben. Sie haben die Freude das Heranwachsen des Weinstocks und der Ernte mitzuerleben und können dann ihren eigenen Wein genießen. Der pfälzer Weisswein ist dank des milden Klimas der Gegend für seinen vollen Geschmack bekannt.



(株)ビッグ・エスでは、この「ドイツワインの樹」の収益の一部を、オーバーハウゼン ドイツ国際平和村に寄付いたします。

Die Big-S AG spendet einen Teil des Gewinns an das Internationale Friedensdorf in Oberhausen.
(詳しくは弊社ホームページをご覧ください。)

*平成13年12月23日「世界ウルルン滞在記」にて紹介されました。

ホームページアドレス www.big-s.co.jp

お申し込み方法

お申込み方法などの詳細は裏面をご覧ください。

うれしいお申し込み特典もあります。

Die Einzelheiten der Anmeldung finden Sie auf der Rückseite.

お申込みは20才未満の方はご遠慮ください。●お酒は20歳になってから。未成年の飲酒は法律で禁止されています。





ドイツワインの樹

会員制



Riesling ぶどうは白ぶどう、最高級品種リースリング
上品な酸と甘さのバランスが絶妙。



オリジナルワインの樹について

樹のオーナー1年間のお楽しみ

はじめにオーナーの会員証をお送りします。
3軒のワイナリーからの情報をもとに今年の天候や畑の様子、ぶどうの出来具合、ファミリーの様子など写真を交えてE-mailもしくは封書にてお送りいたします。

Wir teilen Ihnen per Postkarte oder E-mail mit, wie das Wetter ist und wie das Wachstum der Weinstöcke verläuft.

最後のお楽しみ オリジナルワインについて

3軒のワイナリーで今年育つリースリング種のぶどう果粒を醸してワインを造っていきます。ワインは農産物ですから、なにより天候次第!!品質等級、収穫量とも10月中旬の収穫までわかりません。

Die Wetterverhältnisse versprechen einen qualitativ hochwertigen Wein.

お届けするワイン

平年でお届けするワインの本数は(3本分の樹から)4~5本。収穫後、発酵、熟成、瓶詰めを経て、みなさまにオリジナルワインをお届けする時期は2003年初夏の予定です。どうぞご期待ください。

In der Regel kann man mit drei Weinstöcken vier bis fünf Flaschen Wein gewinnen. Wir schicken Ihnen den fertigen Wein dann im Frühsommer 2003. Sie können sich schon darauf freuen.

オリジナルワイン
シェパードレーゼ

まずお届け
します!

お申込み特典

シェパードレーゼワインを
1本プレゼント

(お申込確認後お届けします)

※1口につき1本、3口以上

お申込みでさらにプラス1本プレゼント。

(例:6口お申込みで7本プレゼント)

Zur Anmeldung erhalten Sie als Geschenk eine Flasche Spätlese.

ご紹介者特典

ご紹介者の方に
1口につき
500円分の
図書券を
プレゼント致します。

※ご本人様が会員である
事が前提です。
※ご紹介者の名前及び
会員番号、連絡先など
いたしません。

お申込み期限 Anmeldeabschluss

2002年7月31日

口数に限りがあります。
満口になり次第締め切らせていただきます。
お早めにお申込みください。

年会費

1口 10,000円

※お申込時にお支払いいただきます。

Der jährliche Mitgliedsbeitrag beträgt
10,000 Yen pro Person (incl. Steuern)

お申込み・お支払い方法

お申込、お支払い方法は下記の中からお選びいただけます。

お申込み方法

店頭にて
受付

FAXにて
受付

メールにて
受付

ホームページ
[ドイツワインの樹(楽天市場)]
にて受付

お支払い方法

Bezahlung:
Bar in einer der Filialen, per Postüberweisung oder mit Kreditkarte (von
der Rakuten-Homepage aus).

●店頭にて現金払い

または

●郵便振替

クレジットカード払い

入会

入金確認後
会員証発行

承認確認後
会員証発行

お申込み先

株式会社 ビッグ・エス 各店舗

●お申込みFAX 087-870-0355

●ホームページアドレス

www.big-s.co.jp

●メールアドレス

shop@big-s.jp

●ドイツワインの館(楽天市場)

www.rakuten.co.jp/big-s/

郵便振替先

口座番号 01630-3-56911

口座名称 株式会社 ビッグ・エス

Die Anmeldung kann telefonisch, per Fax, per E-mail oder direkt von der Homepage
von Big-S aus erfolgen. Sie können auch persönlich zu Anmeldung in eine unserer
Filialen kommen und dort direkt bezahlen.

◇お申込みいただいたおととのキャンセル・ご返金は致しかねます。
◇2002年の秋に収穫し、出回るワインはその年の天候により品質などが異なるので、ご了承ください。
◇楽天市場では代引でのお支払いはできません。
◇天候によりワインの出産ない場合は当社オリジナルワインを4~5本お送りいたします。
◇ワインお届け時に、会員様の更新確認をいたします。
◇会員証は入金・承認確認後、2~3週間以内に発送致します。未着の場合は下記お問い合わせ先まで、ご連絡ください。

Hinweise:
◇Eine Stornierung nach der Anmeldung ist nicht möglich.
◇Bitte beachten Sie, dass die Qualität des Weins je nach den Wetterverhältnissen schwanken kann.
◇Die Anzahl der Weinstöcke begrenzt ist, ist eine baldige Anmeldung ratsam.

*樹の成長状況は、ホームページにて随時確認できます。(更新月1回予定) www.big-s.co.jp

Man kann sich auch auf der Homepage von Big-S über das Wachstum der Weinstöcke informieren.

お問い合わせ先 株式会社 ビッグ・エス 「ドイツワインの樹」係 香川県高松市春日町1627-1 TEL (087) 843-7711

お申込みは20才未満の方はご遠慮ください。●お酒は20歳になってから。未成年の飲酒は法律で禁止されています。

ドイツワインの樹のオーナー

お申込み書

フリガナ
お名前
Name
フリガナ
ご住所
Adresse
都道府県
お電話番号 ()
Telefonnummer
FAX番号 ()
Faxnummer
※お届け先が上記と異なる場合のみご記入ください。
フリガナ
お届け先名称
Liefername
フリガナ
お届け先住所
Lieferadresse
都道府県
お支払い方法 bezahlen ☐ 現金 bar ☐ 郵便振替 uoerweisung

E-mail
アドレス
お持ちの方は必ず正確に記入してください。お便りメールをお送りします。
ご紹介者
会員番号
様
電話番号 ()
輸入代行 株式会社 ビッグ・エス
〒761-0101 香川県高松市春日町1627-1
TEL.087-843-7711 FAX.087-870-0355
屋島店 TEL 087-844-0831
郷東店 TEL 087-881-7755 三木店 TEL 087-898-8700
浅野店 TEL 087-889-0010 高瀬店 TEL 0875-56-2555
店(館) 受付者 印

※ご記入もれのないようにお願いいたします。 Bitte vollständig ausfüllen



最優秀賞

ラルフ デーゲン
Ralph Degen

今回私が挑戦した「身毒丸」は、翻訳の面白さをよく体験できる上に本当に翻訳する価値のある作品です。違う文化、違う時代、非常に短縮された文体、この神秘的な作品を現代ドイツ語の文章に変身させるということは、最初から失敗するとわかっている冒険のようなものです。探偵のように、折口信夫がいったい何を書いたのかを徹底的に分析し、脚注や副文による説明をできるだけ使わずに、日本の読者と全く違う生活様式や背景をもつ外国人がなんとかその原文の内容や雰囲気把握できるように再生すること、これはたとえ永遠に作業を続けても、光速飛行への挑戦と同じように絶対不可能な話です。だからこそ、その作業は面白い。いつまでやっても退屈しないのです。そして、一度本格的な翻訳の作業をすると、もっと他の作品にも挑戦したいという意欲が湧いてきます。

キーン先生がPRビデオでおっしゃった通り、翻訳というのは孤独な仕事です。しかし、いろんな国の面白い文学作品を読むことが出来ないということは大変大きな損失です。ですから、文芸作品の翻訳とはなくてはならない重要な仕事なのですが、この難解で孤独な面倒くさい仕事の面白さを知り、チャレンジ精神を掻き立てるといった点で、しずおか翻訳コンクールはとても大きな役割を果たしていると思います。これからいろいろな日本の面白い文学作品に挑戦したいと思っています。今回は本当にありがとうございました。

インタビュー

第3回しずおか世界翻訳コンクールドイツ語部門で、見事最優秀賞を獲得したラルフ・デーゲンさんに、お話をお聞きます。

——デーゲンさん、最優秀賞受賞おめでとうございます。まず、受賞を知らされた時の感想を教えてください。

「受賞するとは思っていませんでした。凄く嬉しかったです。ただ、優勝の知らせが留守番電話に入っていたので、違う人が優勝したのに私に間違えて優勝の知らせを知らせてくれないだろうかちょっと不安だったのですが、翌朝にもう一回メールが来たので安心して大喜び。本当に感謝しています」

——そうでしたか。ところで、デーゲンさんが日本語を学び始めたのは大学ですか。

「そうです。1991年頃にフランクフルト大学で日本語を学び始めました」

——そもそもどうして日本語を勉強しようと思ったのですか。

「それをよく訊かれますね。実はただの偶然でした。ドイツの大学で人文学を勉強する場合は主専攻の他に副専攻を2つ取らなければなりません。私はもともと哲学が主専攻で、いつも同じ専攻の学友と、いろいろな話をしながら13キロぐらいの距離を自転車に通っていました。ある時彼が言ったんです。「じゃあ、哲学の正反対のことを副専攻にするというのはどうだろう。認識論的に言えば哲学の基本は分析、総合的な思想に基づいているのは禅だ。だから日本学をやってみよう。」それが日本語を学ぶきっかけでした」

——実際、日本語を勉強してみてどうでしたか。

「日本語を勉強し始めて、特に漢字に触れて大変気に入りました。そこで主専攻を哲学から日本学に変更しました。結局、大学で8年間位、日本文学を勉強しましたね」

——日本文学といっても色々ですが、主にどの分野を研究されていたのですか？
「担当教授の専門が江戸時代だったので、私もその時代の読本を主に研究しました。現代文学と違って漢字も難しく大変でしたが、読むのはとても面白かったですね」

——コンクール応募の動機として、「翻訳能力を試したい」とおっしゃっていましたが、大学で翻訳の勉強をしていたのですか。

「はい。大学で翻訳のゼミがありました。非常に面白かったですね。ゼミの半分位の時間は翻訳論と翻訳の歴史についての論文を読み、残りの半分は川端康成の短編のあまり良くないドイツ語訳を分析して批判しました。そしてクラスを3人組に分けて家で同じ短編のもっといい翻訳を書いてみて、ゼミで互いに他のグループの翻訳を厳しく批判しました。卒論の一部も翻訳でし、卒業試験の一つの課題は翻訳論でした」

——課題についてお聞きしたいのですが、「身毒丸」を選んだ理由を教えてください。

「実は他の二つの短編はあまり面白くありませんでした。それに「身毒丸」が一番難しいから翻訳の作業も一番面白だろうと思ったからです」

——「身毒丸」の翻訳をしてどういうところが一番苦労しましたか。

「まず、意味を把握することだけでもなかなか難しかったです。そして田楽、仏教などの日本の伝統的なことや日本にある物などに詳しくない人に、文章の中で説明がましくなく何となく説明することが難しく感じました。特に雰囲気や背景をあまり長く長くしないようにすることも困難なことです。あとは地名の読み方なども簡単に確認できない場合が幾つもありました。植物の名前もそうです。例えば「のじとみ」という花を辞書で引いてもなかなか見つけれません。そしてやっと見つかったら長さ10センチぐらいのラテン語の名前が出ています。日本語の名前をそのまま使ってしまうとドイツ人の頭の中ではその花のイメージが全然浮かびませんし、ラテン語の名前ももちろんそうです。「論拍子」「金櫛の前垂」みたいな単語も非常に翻訳しにくい」

——かなり苦労されたようですが、翻訳をする際にはやはり辞書を参考にしたのですか。

「そうです。広辞苑等でもわからない単語は図書館で日本国語大辞典20冊、地名辞典と目録、仏教用語辞典などで調べました。その他に江戸時代の地図なども参考にしました。日本人に聞くこともありましたが、身毒丸は難しいので、日本人でもその意味が分からないということもありました。また、聞くときは、一人だけではなく、必ず何人かの人に聞くようにしました」

——評論には「読み出しますか」を選んでいますが、何か理由があるのですか。

「評論の中で一番現代的なものだったからです。「身毒丸」はほとんど古文的な文章ですからバランスを取るために割と新しい文章を選びました。それにグローバル化、国際化など「読み出しますか」で話題になる問題は今の日本で非常によく討論されているようです」

——今回、翻訳に挑戦して新しい発見などありましたか。

「やっぱり翻訳というのは時間がかかるけれども面白いということです。これまで大分日本語を勉強してきましたけれども、難しい文章にあたると全然分からないところがどんどん出てきます。辞書を引いても結局ちゃんと分かったかどうかという自信がない。「身毒丸」と「読み出しますか」の作品の中には今まで私が知らなかった日本の伝統や歴史が描かれていました。特に折口信夫の日本語は初めてで、「こういう感じの日本語もあるのか」とちょっとびっくりしました。大学で平安時代の文章を読んだ時と似ている感覚でした」

——ところで、デーゲンさんは現在、香川大学でドイツ語の教師をしていらっしゃるわけですが、将来は翻訳の仕事をしていきたいとお考えですか。

「文学作品の翻訳だけでは生活できないと思いますが、チャンスがあれば是非、もっと翻訳したいと思っています。確かに日本文学の作品はすでにいろいろ翻訳されていますが、他にも価値のある凄く面白い作品がまだまだ翻訳されていないので、日本語が出来ない人のため、そして日本のイメージのために山ほど翻訳の仕事が残っていると思います。現代の作品でも江戸時代などの作品でも面白くて、他の国であまり出会わないスタイルと考え方が入っています。もっと広い範囲で読まれるべきです」

——好きな作家や今後翻訳してみたい作品等がありますか。

「好きな作家はたくさんいます。安部公房なんかは好きですね。でも、彼の作品はドイツ語ですでに翻訳されています。筒井康隆の作品はドイツ語でまだあまり翻訳されていないと思いますし、機会があれば是非翻訳したいですね」

——最後に、今後翻訳コンクールに挑戦する方々へ、御自身の体験も含めてアドバイスをお願いします。

「特別なアドバイスはありませんが、やはりひとつひとつの単語の意味を丁寧に調べ、確認することが大切だと思います。知っている単語でもその単語の使い方がなんだか変だと思ったらやっぱり辞書で引くことが大切です。私は「身毒丸」の中の4つの単語の意味を2、3日かけて調べたりしました。途中で投げ出さない根気強さが必要ですね」



デーゲン先生優勝祝賀会
(2001年7月20日)

第3回しずおか世界翻訳コンクール概要

- (1) 募集期間／1999年9月3日～2000年12月15日
 (2) 翻訳対象言語／英語、ドイツ語(どちらか一言語を選択)
 (3) 翻訳課題図書／小説・評論各3篇からそれぞれ1篇ずつを選択

	小 説		評 論	
四角の漢字(表)	「鍵」(神吉祐郎) 出典:『明日という日』(文芸春秋)	鍵	「鍵み出しますか」(司馬遼太郎) 出典:『尊灯筆記』(朝日新聞社)	鍵
	「ガッティの背中」(須賀敦子) 出典:『ミラノの風景』(白水社)	ガ	「江戸人の發想法について」(石川淳) 出典:『全書 石川淳』(筑摩書房)	江
	「身毒丸」(折口信夫) 出典:『折口信夫全集第十七巻』(中央公論社)	身	「桃太郎の誕生」(柳田國男) 出典:『定本柳田國男集第八巻』(筑摩書房)	桃

(4) 賞

最優秀賞	各言語1名	表彰状、賞金100万円、日本留学助成金(1年間)
優秀賞	各言語2名	表彰状、賞金30万円
奨励賞	各言語2名	表彰状、賞金10万円

(5) 企画委員

氏名	現職
企画委員長 大岡 信	詩人、文芸評論家、日本芸術院会員
企画委員 栗津 則雄	文芸評論家、フランス文学者
企画委員 川村 二郎	文芸評論家、ドイツ文学者
企画委員 高橋 英夫	文芸評論家、ドイツ文学者、日本芸術院会員
企画委員 向井 敏	文芸評論家、エッセイスト
企画委員 山崎 正和	劇作家、文芸評論家、東亜大学学長

(6) 審査委員

氏名	現職
審査委員長 ドナルド・キーン	コロンビア大学名誉教授
英語 審査委員 大岡 信	詩人、文芸評論家、日本芸術院会員
英語 審査委員 ジャーニーン・バイチマン	大東文化大学教授、筑波大学講師
ドイツ語 審査委員 川村二郎	文芸評論家、ドイツ文学者
ドイツ語 審査委員 エドゥアルド・クロッペンシュタイン	チューリッヒ大学教授

(7) 応募総数

148件(英語部門103件、独語部門45件)

(8) 国別応募状況

英語部門	独語部門
日本 40人(うち海外在住21人)	ドイツ 28人
アメリカ合衆国 22人	日本 11人(うち海外在住9人)
イギリス 18人	スイス 4人
オーストラリア 5人	アメリカ合衆国 1人
カナダ 6人	スウェーデン 1人
アイルランド 2人	
インド 2人	
ニュージーランド 2人	
他 6人	
計 14か国 103人	計 5か国 45人

(9) 年代別応募状況

年代	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	計
英語	2人	37人	23人	16人	10人	13人	2人	103人
独語	1人	19人	13人	5人	3人	4人	0人	45人
計	3人	56人	36人	21人	13人	17人	2人	148人

(10) 審査結果

区分	氏名	翻訳図書 小説 評論	性別	年齢 (応募時)	国籍
最優秀賞	エバン・エムスワイルー Evan Emswiler	身 稿	男	25	アメリカ
優秀賞	ジョン・B・ウィットラム John B. Whittam	身 稿	男	40	イギリス
優秀賞	デイビッド・グンドリー David Gundry	身 稿	男	38	アメリカ
奨励賞	デミセバスタプロ Demetri Sevastopulo	身 稿	男	31	アイルランド
奨励賞	デボラ・A・ホジソン Deborah A. Hodgson	ガ 稿	女	27	オーストラリア
最優秀賞	ラルフ・デーゲン Ralph Degen	身 稿	男	34	ドイツ
優秀賞	トーマス・エゲンベルグ Thomas Egenberg	身 稿	男	39	スイス
優秀賞	ペーター・ラフ Peter Raff	ガ 稿	男	50	ドイツ
奨励賞	ユッタ・M・フォークト Jutta M. Vogt	身 稿	女	31	ドイツ
奨励賞	ハラルド・G・マイヤー Harald G. Meyer	身 稿	男	28	スイス

Erster Preis

1

Shintokumaru

von Orikuchi Shinobu
Übersetzung von: Ralph Degen

Shintokumaru Vater war Dengaku-Mönch aus Sumiyoshi. Doch nun ist er nicht mehr da. Manchmal versuchte sich Shintoku an die Zeit zu erinnern, als er sich von seinem Vater trennte. Damals war Shintoku neun Jahre alt.

Außer den Auftritten beim Reisepflanzfest in Sumiyoshi bestritten die Dengaku-Mönche ihren Lebensunterhalt für das Jahr, indem sie durchs Land reisten und ihre Dengaku-Kunst als Musikanten und akrobatische Tänzer bei der Bewässerung einer guten Ernte darboten. Ihre Kinder nahmen sie schon zu Aufträgen im Umkreis von etwa zehn Kilometern mit, wenn sie gerade erst begonnen hatten, alleine zu laufen. Ab dem Alter von neun Jahren begleiteten die Kinder ihre Väter dann auf der Reise über die Grenzen Yamatos hinaus in Richtung Iga und Ise, wo die Gruppe ihre Dengaku-Kunst gegen Bezahlung darbot.

Meister Nobuyoshi, Shintokus Vater, hatte fünfzehn oder sechzehn Dengaku-Mönche unter sich. Morgens, wenn Shintoku nicht auf dem Pferd saß und das Laufen für ihn zu anstrengend wurde, schlief er oft auf dem Rücken eines der jungen Schausteller. So wanderte er der Reihe nach von einem zum anderen, der ihn dann Huckepack nahm. Gelegentlich öffnete er verschlafene die Augen und betrachtete die Berg- und Flusslandschaft um sich herum. An einem Ort entbrannten inmitten der grünen, mit Gras bewachsenen Berge Azaleen, andererseits teilte sich das Wasser in einem breiten Flussbett in mehrere Äder, und unzählige Vögel, deren Namen er nicht kannte, flogen durch die Luft. Mit diesen Landschaften vermischte sich undeutlich, wie mit einem dünnen Seidenschleier überzogen, die Erinnerung an die Nacht, in der sein Vater verschwand.

Es war schon spät in jener Nacht, und der Mond stand hoch am Himmel. Als Shintoku plötzlich aufwachte und die Augen öffnete, merkte er, dass Meister Nobuyoshi ihn an der Schulter hielt und schüttelte.

1

身毒丸

折口信夫

身毒丸の父親は、住吉から出た田楽師であつた。けれども、今は居ない。身毒丸はをりをりその父親に訣れた時の容子を思ひ浮て見る。身毒丸はその時九つであつた。

住吉の御田植神事の外は旅まはり一年中の生計を立てて行く田楽法師の子どもは、よたよたと一人あるきの出来出す頃から、もう二里三里の遠出をさせられて、九つの年には、父親らの一行と大和を越えて、伊賀伊勢かけて、田植能の興行に伴はれた。信吉法師という彼の父は、配下に十五六人の田楽法師を使うてゐた。朝間、馬などに乗らない時は、疲れると層々い能芸人の背に寝つた。さうして交る番に皆の背から背へ移つて行つた。時をり、うす目をあけて處々の山や川の景色を眺めてゐた。ある處では青草山を点綴して、露の花が燃えてゐた。ある處は、廣い河原に幾筋となく水が分れて、名も知らぬ鳥が無数に飛んでゐたりした。さういふ景色と一つに、模糊とした羅衣をかづいた記憶のうちに、父の姿の見えなくなつた。夜の有様も交つてゐた。その晩は、更けて月が上つた。身毒丸は夜中にふと醒ました。見ると、信吉法師が彼の肩を持つて、揺ぶつてゐたのである。

「おまへにはまだ分るまいがね」といふ言葉を前提に、彼れこれ小半時も、頭はない耳を相手に、滞り勝ちな涙聲で話してゐたが、大抵は覚えてゐない。此頃になつて、それは、遠い昔の夢の断れ片の様に思

Gehen wir weiter?

von Shiba Ryōtarō

Übersetzung von: Ralph Degen

“Wie kann man ein neues Japan erschaffen?” Das ist das Thema dieses Vortrages.

Ich habe es vom Veranstalter bekommen. Als ich darüber nachdachte, kam ich zu einem Ergebnis, das ich selbst zum Fürchten finde, weshalb es mir auch nicht recht gelingen will, frohen Mutes hier zu reden. Im folgenden möchte ich hier auch keine fertigen Behauptungen aufstellen, sondern vielmehr meinen Denkprozess zu diesem Thema wiedergeben. Das Ergebnis ist allerdings deprimierend.

Zunächst möchte ich aber mit einer kurzen Vorgeschichte beginnen. Als es ihm vor seinem Tode für kurze Zeit etwas besser ging, wollte der dieses Jahr (1991) im Alter von dreiundachtzig Jahren verstorbene Inoue Yasushi, noch einmal die Menschen treffen, die er in diesem Leben unbedingt noch einmal sehen wollte. Bei einem Gespräch, das ich durch Vermittlung der Zeitungsfirma zu diesem Anlass mit Herrn Inoue führte, ereignete sich etwas Denkwürdiges. Als es zufällig um das Thema Japan und seine Rolle im internationalen Umfeld ging, sagte Inoue: “Japan muss wohl auch in den Club eintreten”. Dies hinterließ bei mir einen tiefen Eindruck. Diese lakonische Äußerung passt sehr wohl zu Herrn Inoues poetischer Art, die Essenz eines Sachverhaltes in knappe Worte zu fassen.

Ich finde, diese Aussage veranschaulicht die Figur, die Japan seit der Nara-Zeit (645 - 794) und wieder seit der Meiji-Zeit (1868 - 1912) macht, in einem Satz. Es ist niemals in den Club eingetreten. ...

Mit “Club” sind natürlich “internationale Zusammenkünfte” gemeint.

Bitte behalten Sie diese kurze Vorrede für das Ende meines Vortrages im

Hinterkopf.

Ich möchte bei meinem Gedankengang zunächst vom Begriff der “Zivilisation” ausgehen. Dies ist ein eher vager Ausdruck und freilich kein sozialwissenschaftlicher Terminus. Zivilisation ist ein Wert, oder – wenn man den Gedanken zu Ende führt – vielleicht ein Standard, an dem ein jedes Volk über den Rahmen des eigenen Staatswesens hinaus teilhaben möchte. Die römische Zivilisation basierte auf Recht und Baukunst. Was diese direkt ablöste, nachdem ihr Glanz im Europa des fünfzehnten, sechzehnten Jahrhunderts verblichen war, war der Katholizismus, der die Rolle der Zivilisation selbst übernahm. Zivilisation muß, wenn man es einmal mit der “Zivilisation des Fliegens” veranschaulicht, so einfach sein, wie die simple Regel, dass man beim Starten und Landen den Sicherheitsgurt anlegt. Wenn man es definitorisch ausdrückt, so muss eine Zivilisation so beschaffen sein, dass jeder an ihr teilnehmen kann, und jeder, der an ihr teilnimmt, ihren universellen Wert sofort erahnen kann, und dabei ein Gefühl von Zweckmäßigkeit und Harmonie empfindet.

Völlig entgegengesetzt verhält es sich aber mit der “Kultur”, die der Zivilisation den Rücken stärkt. Sie trägt den individuellen Charakter von Einzelpersonen oder Gruppen.

Zum Beispiel ist es gewiss praktisch, eine Schiebetür in einem japanischen Zimmer, das mit dicken Reisstrohmatten ausgelegt ist, im Stehen oder mit dem Fuß zu öffnen. Innerhalb der japanischen Kultur macht man dies aber nicht. Man kniet extra nieder und schiebt sie dann mit beiden Händen zur Seite. Dies ist eine sehr eigenwillige und überaus umständliche Methode. Leute, die diese Kultur teilen, empfinden dies jedoch als angenehm.

Kultur ist ineffizient und voller Eigenarten. Wenn man sich in ihr befindet, so empfindet man sie als angenehm und man fühlt sich sicher.

So wie ich gerade hier sitze, hat sich eine Luftschicht von ein oder zwei Zentimetern um mich herum gebildet, die angenehm warm ist. Wenn es jetzt aber zieht, verflüchtigt sich diese Hülle, und es wird etwas kälter, was ich als unangenehm empfinde. Auch die Kultur kann man als eine solche Hülle begreifen. Wird man von ihr umhüllt, fühlt man sich wohl und erkaltet sich nicht. Die Kultur besteht aus den Gewohnheiten der jeweiligen Völker oder Einzelpersonen. Es ist aber nicht möglich, sie auch auf andere Völker oder Einzelpersonen auszudehnen.

Ich habe die Angewohnheit, nach dem Grund eines Sachverhalts zu fragen und am Lauf der Dinge, die zu ihm führten, zurückzudenken.

踏み出しますか

司馬遼太郎

“新しい日本をどうつくるか”。これが演題です。

主催者から与えられたものです。考えてみて、自分でもおびえるような結論らしきものが出てきたのですが、勇んで語りたいという気にはなれません。

ですから、以下は主張というよりも、自分で考えたプロセスだけを申し上げます。結論は、憂鬱なものなのです。

その前に、ちょっと余談をはさみたいとおもいます。ことし（一九九一年）、八十三歳で亡くなられた井上靖さんが、死の前、小康を得られたとき、会っておきたいひとに会っておきたい、ということで、新聞社を通して対談ということになり、私にとって思い出ぶかいものになりました。たまたま日本をめぐる国際環境のはなしになったとき、

「日本も組合に入らなければいけませんね」

といわれたのが、印象的でした。それっきりの発言で、井上さんらしい詩的本質論というべき短いことばでした。

このことばは、奈良朝以来、あるいは明治以来の日本の姿勢をひとことと象徴していると思います。組合に入ったことがない。……

むろん、組合というのは、世界の寄り合いということですが、

この余談を、私のはなしの最後のあたりで思いだしてください。

文明ということばで、考えてゆきたいと思います。文明というのはあまいなことばで、むろん社会科学の用語ではありません。各民族が国のわくを超えてそれに参加したいと願っている価値、あるいは——煮つめれば——基準というものでしょう。ローマ文明の基準は法と土木であり、十五、六世紀までのヨーロッパでは、ローマ文明の栄光の終焉に膚接して興ったカトリックが文明そのものでした。

文明とは、たとえば航空機文明に参加するには、離着陸のときに、シート・ベルトを締めるという程度で済むほどに簡便なものでなければなりません。定義としていえば、たれでも参加でき、参加すればたれも普遍的価値を感じることができ、そこに便利さと平和を感じることができるものでなければなりません。

文明の普遍性に対し、それに裏打ちされる文化は、いわばその反対の位置にあります。文化とは、個人あるいはグループだけの特異なものでしょう。

たとえばお座敷で襖を開けるときに、立って開けたり、足で開けたりすれば安直でいいのですが、日本文化にあってはそうはしない。いったん座ってから両手で引き開ける作法を用います。非常に不合理な、特殊なものであります。しかしその文化を共有する者たちにとって、感じがいい。

文化は不合理で特殊ながら、それにくるまっていれば楽しく、気が安らぎます。

ちょうど私が、こうしてここに座っておりますと、私の体温で一センチか二センチほどの温かい空気の被膜が出来ていますが、風邪が吹いてくるとそれが吹き飛んで、ちょっと寒くて居心地がわるいという感じになります。そのように、文化というのは被膜のようで、それにくるまっていれば、心地よくて、風邪をひかない。それぞれの民族および個人が持っている習慣というものは文化であります。それは他国や他人には及ぼすことが出来ないものです。

Deutsch-Japanische Gesellschaft Bonn e.V.
独日協会ボン



Allen Mitgliedern und Freunden unserer Gesellschaft
wünscht der Vorstand der DJG Bonn für das neue Jahr 2002
Gesundheit, Glück und Erfolg!

あけましておめでとうございます

本年もなにとぞよろしくお願い申し上げます

平成14年 元旦

Januar 2002
Nr. 1

Liebe Mitglieder und Freunde,
wir hoffen, dass Sie gesund in das neue Jahr hineingekommen sind und auf ruhige und erholsame Feiertage zurückblicken können. Möge Ihnen und Ihren Angehörigen das kommende Jahr viel Erfreuliches und Gutes bringen, vor allem aber beste Gesundheit.

Nach dem chinesischen Tierkreis hat das „Jahr des Pferdes“ begonnen. Nach 60 Jahren wiederholt sich wieder das Jahr des Feuerpferdes „hinoe-uma“, in Japan früher zwiespältig angesehen. Mädchen, die im Jahr des Feuerpferdes geboren wurden, galten als grosses Missgeschick. Sie konnten kaum verheiratet werden. „Pferdemenschen“ sagt man vielfältige Eigenschaften zu, positive wie negative. Man spricht ihnen Fröhlichkeit und Aktivität zu, die Liebe zur Unabhängigkeit, rhetorisches Talent, das ihnen zu Führungspositionen verhilft und sie beliebt macht. Obwohl das Kanji für „Pferd“ auch für „baka“ (Narr) benutzt wird, spricht man den „Pferden“ Intelligenz zu. Sie sollen aber auch zum Egoismus und zur Ungeduld neigen. Die besten Partner für sie sind Menschen, die im Tierkreis des Tigers, des Schafs oder des Hundes geboren sind. 1942 war das letzte „Feuerpferdjahr“. Hoffen wir also, dass dieses „besondere“ Jahr unserer Gesellschaft nur Positives beschert.

Zum Jahreswechsel war die **Umstellung der Währung auf den Euro** in aller Munde. Auch wir werden nach dem 10.01. bei vorliegender Abbuchungsermächtigung Ihren **Beitrag in Euro** abbuchen. Falls Sie nicht sicher sind, ob Sie uns eine Abbuchungserlaubnis erteilt haben, überprüfen Sie bitte um den 15.01. ihre Kontoauszüge. Bei Nichtabbuchung bitten wir möglichst im Januar um die Beitragsüberweisungen. Nach Beschluss der letzten Mitgliederversammlung wurden die Beiträge leicht erhöht. Sie betragen für **Studenten 15 €, Einzelmitgliedschaft 30 €, Ehepaare 40 €, private Förderer ab 50 €, Firmenförderer ab 100 €**.

Wir freuen uns sehr, dass viele Anmeldungen eingegangen sind und begrüßen herzlich unsere neuen Mitglieder:

Frau Außem, Reiko,
Herrn Dietrich, Eric,
Frau Dzepina, Eva,
Herrn Hanazawa, Nobuhiro und
Frau Hanazawa, Yuka,
Herrn Hübner, Karl und

Frau Hübner, Hildegard,
Herrn Radscheit, Markus und
Frau Oikawa-Radscheit, Dr. Junko,
Herrn Rodorff, Christoph,
Herrn Scharf, Frank,
Herrn Yoon, Julian.

Wie es sich für ein Feuerpferdejahr ziemt, beginnen wir im Januar mit Schwung das neue Veranstaltungsjahr. Erstmals bieten wir im Wochenturnus ein Seminar über Shintô und Buddhismus an. Das gesamte Programmangebot bis Mitte März ist üppig gefüllt, rechnet man alle Veranstaltungen im Bonn-Kölner Raum zusammen. Ab Mitte März folgt die übliche Semesterferienpause. Wir hoffen, dass es die Witterungsverhältnisse zulassen, häufig an unseren Veranstaltungen teilnehmen zu können.

Geschäftsstelle: c/o Marianne Mönch, Auf dem Köllenhof 47, 53343 Wachtberg,
Tel./Fax: 0228-348365, E-mail: djg-bonn@t-online.de; www.djg-bonn.de
Bankverbindung: Sparkasse Bonn, Kt.Nr. 20 013 850 BLZ 38050000

Deutsch-Japanische Gesellschaft Bonn e.V.
独日協会ボン

Neuer Vorstand in der DJG Bonn e.V.

ab 25. April 2002

Ehrenvorsitzender:

Pantzer, Prof. Dr. Peter
Roemerplatz 5
53179 Bonn

☎ 0228-365240 (priv.)
☎ 0228-737599
☎ 0228-737020
✉ p.p@uni-bonn.de

Vertretungsvorstand

1. Vorsitzende:

Moench, Marianne
Auf dem Koellenhof 47
53343 Wachtberg

☎/☎ 0228-348365
☎ 0228-345816 (priv.)
✉ djg-bonn@t-online.de

2. Vorsitzende:

Franzel-Kobayashi, Margaretha
Coburger Str. 7
53113 Bonn

☎ 0228-239906
☎ 0228-5400122
✉ franzel-kobayashi@t-online.de

Vorstandsmitglieder:

Freynhagen, Britta
Friedrich-Friesen-Str. 10
53225 Bonn

☎/☎ 0228-9738714 (priv.)
✉ bfreyhagen@gmx.de

Meise, Barbara
Rheinweg 25
53113 Bonn

☎ 0228-238155
☎ 0228-5388156
✉ barbara.meise@netcologne.de

Prinzler, Jeanette
Erlenweg 18
53227 Bonn

☎ 0228-4335738
✉ jprinzler@hotmail.com

Schaper, Hans von
Buettgener Str. 5B
47877 Willich

☎ 02154-6751 (priv.)
☎ 0211-8995870
☎ 0211-8935870
✉ hans.vonschaper@stadt.duesseldorf.de

Schreck, Helmut
Jakob-Hengstler-Str. 14
53119 Bonn

☎ 0228-988450 (priv.)
☎ 0228-9887618
☎ 0228-9887611
✉ H.Schreck@eps-bonn.de

Tanaka-Pantzer, Midori
Roemerplatz 5
53179 Bonn

☎ 0228-365240
☎ 0228-365368
✉ p.p@uni-bonn.de

Wallentowitz, Anneli
Roemerstr. 12
53111 Bonn

☎/☎ 0228-9695203 (priv.)
☎ 0228-739693 (Uni)
✉ uzs6bd@uni-bonn.de

Kassenpruefer:

Bergmann, Stefan
Mohrstr. 8
53121 Bonn

☎ 0228-626266

Becker-Blonigen, Erika
Sertuernerstr. 4
53127 Bonn

☎ 0228-283779
☎ 0228-283779

Ehrenmitglied:
(Altpräsident)

Dietz, Wolfgang
Am Wolfbach 50
53229 Bonn

☎/☎ 0228-481452

Geschäftsstelle: c/o Marianne Mönch, Auf dem Köllenhof 47, 53343 Wachtberg,
Tel./Fax: 0228-348365, E-mail: djg-bonn@t-online.de

2001 年度香川日独協会のあゆみ

01年 4月4日(水) 18:00～

高野光司会員送別会：高松

4年間の高松滞在勤務(高松短期大学)を終えドイツへ帰国されました。

ドイツの住所

Hoelleweg 13 37077 Goettingen TEL: 0551-21915

01年 5月9日(水)

事業企画委員会：

香川県社会福祉総合センター・ボランティア交流室

01年 5月20日(日) 10時～

第1回理事会：アイパル香川会議室で開催

協議事項は00年度事業報告(案)、00年度決算書(案)

01年度事業計画(案)、01年度予算書(案)について

01年 6月3日(日)

1、第2回理事会：17時～ 香川県民ホール第2会議室

協議事項は、第1回理事会と同じ

役員人事

2、総会：17時半～ 香川県民ホール第2会議室

審議事項は、上記「第2回理事会」におなじ。

3、懇親会：18時半～ 県民ホール6Fレストラン「ラ・シレーヌ」

宮崎 朋菜さんのピアノ演奏

(香川県出身 東京芸術大学音楽科卒 モスクワ音楽院在籍中)

ショパン作曲・小犬のワルツ、シューベルト作曲・即興曲など

素晴らしい演奏を楽しみました。大坂氏からのワイン提供で

座が盛り上がりました。

01年 6月6日(水)

事業企画委員会：ボランティア交流センター

10周年記念事業について：ドイツ領事館からのご紹介で

ミュンヘンオクトバーフェストの音楽隊が 来県可能になるかも

知れない。その時の対応について

01年 6月29日(金)

第1回高松市内国際交流団体情報交換会・アイパル香川にて

事務局員 出席

01年 7月1日(日)

運営委員会：音楽隊の来県について



ワインを楽しむ会
(2001年7月27日)



エンゲル祭
(2001年9月9日)
総領事館からの来賓を囲んで

01年 7月18日 (水)

ドイツ大使公邸ガーデンパーティ 会長出席

01年 7月20日 (金)

名誉会員 ラルフ・デーゲン先生が第3回・静岡世界翻訳コンクールで優勝されました。このコンクールは伊豆文学フェスティバル一環の行事として 世界に 募ったものです。お慶びをこめて ささやかなお祝いの会をいたしました。ご本人の希望で あえてこのような形に致しました。

課題本は 折口 信夫 小説 「身毒丸」(しんとくまる)
司馬 遼太郎 評論 「踏み出しますか」

なお、表彰式は9月にとり行われました。

01年 7月27日 (金)

ワインを楽しむ会：中條文化振興財団にて

(株)アサヒ・ビール様のご好意で9種類ワインの試飲会となりました。ソムリエの流暢な説明とワインの香りで夏の一夜を十分に味わいました。続いて デーゲン先生ご夫妻の手料理でドイツの家庭料理・レンズ豆のスープとじゃがいもパンケーキを汗をかきながら おいしく頂きました。

かりかりのじゃがいもパンケーキと野菜たっぷりのレンズ豆のスープが 大好評でした。

01年 8月12日 (日) 13時30分

第3回 理事会：アイパル香川会議室

01年 8月16日

B. S主催 ドイツ語スピーチ・コンテストを後援

01年 8月26日

事業企画委員会：ボランティア交流室

01年 9月9日 (日)

1、第9回チター音楽祭後援：高松テルサにて

2、エンゲル祭を後援

丸亀市駒ヶ林墓地にてドイツ兵の墓地供養に有志が参加
大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館より代表3名参加し墓参
若い兵士AMMANDUS・TEMNMEの出身地をボン独日協会の協力で特定することが 出来ました。

ドイツ・ルール地方のGELSENKIRCHENと判明
第一次大戦後 中国青島から俘虜として丸亀に送られ
大正4年6月6日 丸亀で病没 行年 22才
徳島坂東の合同碑にも 名前が刻まれています。

デュルンバッハ音楽隊



栗林公園の商工推奨館前での記念撮影



「わらや」でのうどん体験

01年 9月26日 (水)

香川日独協会10周年記念行事

1、デュルンバッハ音楽隊 (ミュンヘン) の演奏つきでビアパーティ

(三越高松店6F レストラン・ランドマークにて)

協会創立10周年にあたりバイエルンのオクトバーフェストで毎年活躍している音楽隊28名が関空から直行で高松いりをし疲れも見せず 勇壮なバイエルンの響きを轟かせました。

飲むほどに酔うほどに 総勢150名の雰囲気は盛り上がり音楽隊の彼らは ビールのジョッキを足元に置き飲みながらのダイナミックな演奏でした。子供ずれの方も存分に楽しめたことでしょう。

若い男女が面白いダンスをみせ パタパタと膝をうつ仕種に吾こそはと挑戦する人も現れ、そのうちに中央を舞台としたおおきなダンス場ができ 皆さそわれて 軽快な踊りをみせました。

終わりはつきず ブルーのミュンヘン旗を頂き閉会となりました。

2、新装なったJR高松駅のコンコースで演奏と踊り

ドームのある広場は 絶好の演奏場で 管楽器がひびき迫力ある場面で、乗降客が足をとめ 聞き入る姿があちこちにみられました。

ライブで大型のテレビ画面にも映し出され彼らも 感激の様子。

01年 9月27日 (木)

3、音楽隊が香川大学附属高松小学校を訪問

一時間めにもかかわらず全校生徒700余人の出迎えの中 音楽隊はいつもの勇壮な音楽を披露し 喝采をあげました。

はじまりは 生徒代表の挨拶があり少々硬いかなと思われた雰囲気も一度に和み いつものパタパタの踊りの時は生徒も先生も 輪の中に入り子供らしいきょう声をあげて 楽しむ姿に見とれました。

贈られた折鶴のレイを首に 彼らも別れがたく しばし写真撮影などの交流をおしんでいました。

4、栗林公園の散歩、盥うどん、津田の松原

小学校をあとに 栗林公園を訪れる。商工奨励館の前で全員集合の記念撮影。三々五々 散歩を楽しみ 一路屋島へ。パソコンを買いたい楽団員がいて (株) B. Sで途中下車。ビールを買い込む人も、おみやげを買う人 なかなか離れられず 予定時間延長。

屋島「わらや」ではじめての うどん体験

津田の松原で延々と続く砂浜に感動

ドイツグリーンのバイエルンの民族衣装は やはり山が似合います。

靴の中の砂を払いながらバスに乗車大阪にむけて出発。よい旅を！



ドイツ公使ツインマーマン氏を囲んで
(2001年10月19日)



クリスマス会
(2000年12月16日)
ヴァイオリンの南口姉妹と司会の柳澤氏

01年 10月3日

ドイツ統一記念日祝賀会（神戸・相樂園にて）会長出席

01年 10月19日（金）

ドイツ公使ヨルク・ツィンマーマン氏の講演会：中條文化振興財団にて
（政治担当公使）

演題 「テロに対するドイツの取り組み」 通訳 ラルフ・デーゲン

9月9日アメリカのテロをふまえての ドイツの対応に関心が有り

小人数ながら 後の軽食会で 和気あいあいの良い雰囲気でした。

01年 10月20日（土）

香川県外交官招聘事業によるボランティア講演会：ホテルリーガゼスト

講師：青木盛久氏（元・ペルー大使、前・ケニア大使）

「地方でのボランティア活動をかんがえる。」

あとパネルディスカッション

01年 10月21日（日）

香川県国際交流フェアに参加 出展

サンポート高松沿岸にて

01年 10月23日（火）

事業企画委員会：ボランティア交流室

01年 11月11日（日）

2001フェスティバル「第九」に協力、参加

香川県民大ホールにて

01年 11月27日（火）

第2回高松市内国際交流団体情報交換会：アイパル香川

事務局員出席

01年 12月17日（月）

高松高校ハートフル・コンサート第九 に協力、参加

高松高校・セントラルプラザにて

01年 12月22日（土） 17時～

クリスマス会 : レストラン ミケイラにて

観光スポット・サンポート高松の北端にあるレストラン ミケイラは
夕方の日没がきれいなので その時間に合わせた開始となりました。

シェフの肝いりで 素晴らしい料理が並び、領事館杉岡さんからの
プレゼント・グリュウワインもふるまわれ賑やかな会になりました。

マンハイムで活躍中の南口薫さんとその妹・南口えりさんによる

ヴァイオリン2重奏 の調べは クリスマス気分を盛り上げました。

良いクリスマスを！ 良い新年を！

02年 1月22日 (火)

新春講演会：高松市立美術館講堂

「新しい外交政策について」

ドイツ連邦共和国総領事館総領事ヨハネス・プライジンガー博士

北四国視察訪問の機会に協会のために時間を頂きました。

120名をこえる聴衆にゆっくりと語り掛け 堪能な日本語で質問にも対応されました。

02年 3月5日 (火)

第3回高松市内国際交流団体情報交換会：アイパル香川にて

事務局員 出席

02年 3月23日 (土)

「ハンプルグ桜のプリンセス」アンネマリー・メゼイさんを囲む会

「二蝶」にて

第22代のプリンセスはハンガリー語を母国語とする東洋の雰囲気を持つ女性で理知的な方でした。華やかな、女性の多い会を楽しみました。

02年 3月24日 (日)

アンネマリー・メゼイさんが香川大学付属高松小学校を訪問。

寒い日でしたが、生徒たちを喜ばせようと ピンクのドレスに王冠そして赤いたすき（ハンプルグ桜のプリンセス用）姿で校門を入りました。

手づくりの歓迎門があり、30人余りの5年生の生徒に迎えられ 2本の桜を植樹。教室では 生徒それぞれが学校紹介、歌、折り紙などで交流し最後の挨拶でプリンセスは、「まもなく私の目から涙が落ちそうです。」と感激しきりでした。慌ただしく高松をたち、東京では 小泉総理との面談が待っていたようです。

ボン独日協会とのホームステイ交流

Francesco Piergianni

2001、7、10 (火) ～15 (日)

柳沢 良明宅

武井 素子

2001、11、16、(金) ～22 (木)

Corinna Long 宅

【表紙】

ベルリンのポツダム広場(Potsdamer Platz)周辺は、訪れるたびに新しい建物が次々と立ち、ショッピング街がオープンしたりと、その開発のすさまじさには驚かされる。ベルリン・フィルの本拠地フィルハーモニーが、ポツンと立っただけで、その回りには何もなかった頃から比べると、想像もつかないような変化である。中央の富士山のような屋根のかかった一帯が再開発のシンボルであるソニー・センターで、連日、観光客で賑わっている。

香川日独協会が設立されたのは 1991 年 10 月であるが、私が協会の存在を知り、行事に参加したのは、1992 年 1 月 19 日に開催された新年会が最初である。この新年会は大変に有意義な会で、これ以降、香川日独協会の環も大きく広がっていったのではなかろうか。新年会のことを覚えているのは、翌 1 月 20 日、大阪のシンフォニーホールにアバド指揮ベルリン・フィルの日本公演を聞きに行ったからでもある。10 年ぶりに生で聞いたベルリン・フィルは、カラヤン時代の名奏者たちがまだ多数在籍していたこともあって、厚みのあるサウンドを聞かせてくれたことも懐かしい思い出である。

その後、ベルリン・フィルの日本公演は、1994 年（マーラー9 番他）、1996 年（マーラー2 番他）、1998 年（マーラー3 番他）、2000 年（ワーグナーの《トリスタン》全曲）と聞く機会に恵まれ、ベルリンでも 1993 年と 2000 年、ザルツブルクのイースター音楽祭には、1995 年、1997 年、1998 年、1999 年、2001 年、そして今年 2002 年にも聞きに行ったが、年々、厚みのあるサウンドが失われ、薄っぺらになっていくのは、時代の流れもあるにせよ、残念なことである。

今年の秋からは、ベルリン・フィルの音楽監督がアバドからラトルに変わり、また新しい時代を迎えることになる。アバド時代よりは、もっと豊かでツヤのあるサウンドを聞かせてくれるのではないかと、楽しみにしている。

香川日独協会会報 第 10 号

2002 年 5 月発行

発 行 : 香川日独協会事務局

Japanisch-Deutsche Gesellschaft KAGAWA

〒760-0017 香川県高松市番町 4-4-20

Tel: 087-861-6820

発行責任者 : 中村 敏子 (会長)

編 集 : 最上 英明

印 刷 : (株) 万成社